沼田中学校道徳通信　Vol.25
（平成25年度第1号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年4月　9日(火)発行

「美しい心」を磨くために…

沼田中学校では、次のような心の育成を目指し、道徳教育を展開します。

「美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性、正義感や公正さを重んじる心、生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観、他人を思いやる心や社会貢献の精神、自立心、自己抑制力、責任感、他者との共生や異なるものへの寛容などの感性及び道徳的価値を大切にする心（学習指導要領より）**」**

昨年度は、毎月２回のペースで合計24号発行した道徳通信「心の鍵」を、今年も継続いたします。不定期な発行となりますが、年間25号を予定していますので、どうぞよろしくお願いします。

初回は、掛川茶で有名な静岡県掛川市で配られているタウン誌の裏表紙に掲載されていた、ある学習塾の広告ページから、道徳を学ぶ意味や価値について紹介します。

日本人のこころ　～「美しい心」「道徳心」を育む教育を目指して～

先日、ある飲食店に行った時のことでした。どうやら、閉店間際の入店になってしまったようです。注文した料理が届きいただいていると、急に店内が薄暗くなりました。店外の照明が一斉に消された様子です。少しあわて気味に残りの料理を食べ、会計を済まし店を出ました。すると案の定、駐車場は真っ暗闇。車を探すことすら難しい状況でした。

閉店間近なのだから、あたりまえのことでしょう。店員さんも、決められた「お店のルール」に従ってやったまでのことと思います。ただし私は、すごくいやな気分になりました。足元におびえながら車に戻ったとき、「会計が済んだら、もうお客さんとして扱わないんだな」と感じてしまいました。もちろん、そんな気持ちはないと思います。でも、客である私が、そう感じたことも動かしがたい事実なのです。このお店の「もてなしの心」とは、こんな程度なのだな、と結論付けてしまったのです。

最近、日本人らしい「こころ」を感じることが、めっきり減ってきているように感じます。表面的な「権利」や「義務」、または「正しいか、正しくないか」という判断基準ばかりが重視されているように思えてなりません。日本は法治国家ですから、それらが大切であることは言うまでもありません。しかし法治国家である前に、「人間関係」があることを忘れてはなりません。人間関係において最も必要なことは、「ルール」でなくて「こころ」であるはずなのです。

「日本人のこころ」とは何でしょう。それは「奥ゆかしさ」や「奥深さ」です。「和」を大切にし、何事につけても相手を思いやり、こころを込める…。日本製の電化製品を見れば、一目瞭然わかります。あきれるくらい使う人の立場にたって作られていますよね。そこにあるのは、作り手の「こころ」。その「こころ」に私たちは惹かれてしまうのではないでしょうか。

「海を豊かにしたければ、山を育てよ」という言葉があります。森の土に栄養があれば、川によって、その栄養を含んだ土は海に流され、豊かな漁場が出来上がります。「目先」の海だけ見ていたら、決して気付かない「本質」ではないでしょうか。

「損して得を取れ。」自分が欲しい物は、相手にとっても魅力的な物です。その欲しい物を先に相手にゆずることで、実はより多くのモノが手に入るのです。それは、相手からの「感謝」であり、豊かな「こころ」や「人間性」、そしてそれらが人に伝わり幾重にもなって返ってくるモノ、それが「徳」というものです。

閉店直前に、照明を落とす。閉店なのですから、「正しいこと」です。「お客さんがさらに来てしまっては困るから」です。しかし、よく考えてみましょう。「来てくれなかったら、もっと困る」のです。その店員さんの取った行動は、少なからず私に「もう来たくないな」と思わせてしまいましたよ。なぜ、そうなってしまったのでしょう。その店員さんの行動は「正しかった」けれども、「こころ」がなかったからです。

人は「こころ」に触れると感動します。「こころ」を感じると感謝します。「こころ」にあふれた社会を、何としても作りたいのです。「こころ」を育むには「教育」しかありません。読んで聞かせ、見せて与え、植えつけて育てるしか方法はないのです。

日本人の「道徳心」は世界を変える力を持っています。

名学館掛川校「教育論」Vol.12

次号は４月17日(水)発行予定です。主な内容は「望ましい生活習慣、心身の健康の増進、調和のある生活」です。

幸も不幸もない。要は心の持ち方一つなのだ。　シェークスピア(劇作家)

沼田中学校道徳通信　Vol.26
（平成25年度第2号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　4月17日(水)発行

今月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 心もからだも元気でいよう　～望ましい生活習慣を身に付けた調和のある生活をする～
② 心もからだも元気でいよう　～望ましい生活習慣を身に付けた調和のある生活をする～
③ 心を形に表していこう　～礼儀の意義を理解しその場に応じた言動をとる～
④ 法やきまりを守る気持ちよい社会を
～法やきまりの意義を理解し社会の秩序と規律を高める～

①4/8～14日　②15～21日　③22～28日　④29～30日

道徳教育の内容項目：望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする　1-1「生活習慣」

日々の生活を健康で充実したものにするためには、望ましい生活習慣を身に付けることが大切です。また逆に、望ましい生活習慣を身に付けることによって、健康で充実した生活も可能となります。今回は、「望ましい生活習慣」について考えていきましょう。

明日を生きる意欲を支えるもの

五木寛之さんの著書『大河の一滴』において、イギリス出身のC・W・ニコルさん(小説家として来日したが、日本の自然を愛するあまり日本国籍まで取得した)が、南極かどこかへ探検に行ったときの話を紹介されていました。

南極などの極地では、長い間テントを張り、風と雪と氷の中でじっと我慢して待たなければならない時があるそうです。そんな時、どういうタイプの人間が一番辛抱強く、最後まで自分を失わずに耐え抜けたかというと、必ずしも頑健な体をもったタイプの人ではなかったようです。

南極でテント生活をしていると、どうしても人間は無精になるし、そういうところでは体裁をかまう必要がないから、身だしなみなどということはほとんど考えなくてもいいわけです。にもかかわらず、なかには、きちんと朝起きると顔を洗ってひげを剃り、一応、服装をととのえて髪もなでつけ、顔をあわせると「おはよう」とあいさつし、物を食べるときには「いただきます」と言う人もいる。こういう社会的なマナーを身につけた人が意外にしぶとく強く、厳しい生活環境のなかで最後まで弱音を吐かなかった、というわけです。これはおもしろい話だと思います。

礼儀、身だしなみ、こういうことは極限状態のなかでは最後に考えるような気がします。しかし実際には、そういうなかで顔をあわせたときにきちんと「おはよう」とあいさつのできるような人、「ありがとう」と言えるような人、あるいは朝、ほんのわずかな水で顔を洗い、ひげも剃って、それなりに服装をととのえ、そして他人と礼儀を忘れずに接するという、小さなときからの自分の生活態度をずっと守りつづけたようなタイプの人のほうが、むくつけき(むさ苦しい)頑強な熊のような大男よりも、かえって最後までがんばり抜いて弱音を吐くことがなかった、という。

同じようなことが、第二次世界大戦中のアウシュヴィッツ強制収容所(ナチス・ドイツがユダヤ人を連行し、残虐な殺戮(さつりく)が行われた)でも言えるそうです。五木さんは、フランクルという人の『夜と霧』という著書をもとに、なぜ地獄のような生活から奇跡の生還を遂げたのかを、印象的なエピソードで紹介しています。

精神科医だったフランクルは、人間がこの極限状態のなかを耐えて最後まで生き抜いていくためには、感動することが大事、喜怒哀楽の人間的な感情が大切だと、考えるのです。無感動のあとにくるのは死のみである。そして自分の親しい友達と相談し、なにか毎日ひとつずつおもしろい話、ユーモラスな話をつくりあげ、お互いにそれを披露しあって笑おうじゃないか、と決めるのです。

あすをも知れない極限状態のなかで笑い話をつくって、お互いに笑いあうなんていうことになんの意味があるのか、と思われそうですけれども、そうではないのです。あすの命さえも知れないような強制収容所の生活のなかでユーモアのあるジョークを一生懸命に考え、お互いに披露しあって、栄養失調の体で、うふ、ふ、ふ、と、力なく笑う。

こういうことをノルマのように決めて毎日実行したというのですが、むしろそういうことも、ひょっとしたらフランクルが奇跡の生還を遂げる上での大事な役割を果たしていたのではないか、と思います。

また、風景というものに対して、非常に強い感受性の人間もいたようです。

強制労働のなかで水たまりに映った冬の枯れ枝の風景を眺めて、あ、レンブラントの絵のようだ、なんていうことを考えたりする人がいる。こういう感じかたをする人のほうがじつは強制収容所の非人間的な生活のなかでは、むしろ強く、生き延びることができたのです。

人間は、健康や体力だけで厳しい条件に耐えられるのではなく、「心の在り方」が支えになるのかもしれません。

次号は4月26日(金)発行予定です。「法やきまり」「社会の秩序」などについて考えましょう。

自分を励ますためにもユーモアの習慣は忘れたくない。　高見澤たか子(作家)

沼田中学校道徳通信　Vol27
（平成25年度第3号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪
平成25年　4月26日(金)発行

4月を振り返って

新しいメンバー、新しいクラスで、よりよい人間関係を築き、集団生活を向上させようと、「生活指針」をはじめとするルールの確認を行いました。また、新校舎の生活が始まり、新たな注意事項も加わり、ルールや規則を窮屈に考えている人もいるかもしれません。下記の考え方を参考にしてください。

道徳教育の内容項目：法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める　　4-1「法やきまり」「社会の秩序」

規則を守れば、規則があなたを守る

みなさんの中には、わたしたちの生活に法やきまりがなかったら、もっと自由にのびのびと暮らすことができるのではないかと、なんとなく社会や学校のきまりに抵抗を感じ、反発している人はいないでしょうか。規則にしばられていると型にはまったようにきゅうくつで、自分がい縮してしまうように考えている人はいないでしょうか。もしそう考えていたら、それはたいへんな誤りです。

例えば、交通のきまりがなかったら、自動車は信号で止まるということがなく、交差点では、いつも交通事故が起こるでしょう。歩行者は危なくて道路を歩けません。

もう一つ、スポーツの中で、もっともはげしいラグビーを例にとって考えてみましょう。ラグビーは、走る敵をたおし、敵・味方の上につっこんでたおれ、敵をねじふせて進んでいくはげしいものです。しかし、どんな大げんかになりかねない場面でも、乱闘などにはならず、流れるように試合は進行します。試合が終われば、見るものにすがすがしい感動をあたえ、敵・味方と分かれたフィフティーンはたがいに健闘をたたえ合います。このように試合が進められるのは、きとんとしたルールがあり、すべてのプレイヤーがルールを守るという精神をもち、レフェリーがルール違反者に対しペナルティーを科する、ということがあるからです。

このように、わたしたちの社会生活にとって、法やきまりはなくてはならぬ大切な役割をもっています。法やきまりはわたしたちを守るためにあるので、これを人々が守らないと、法としての機能を発揮することができません。

この法やきまりの乱れた社会を考えてみましょう。もし借りたお金を返さないでおくことがまかり通るようになったらどうでしょう。だれもお金を貸さなくなるか、踏みたおされる危険を予想して、うんと利子を高くするでしょう。また、他人の土地や建物を不法に占拠しても罪に問われず、どろぼうや殺人犯が横行しても、つかまらないとしたらどうなるでしょう。自分の生命や財産を守るために、人々はそれぞれ余計な心配をしなければなりません。これでは個人の生活があやうくなるばかりでなく、国家もあやうくなるでしょう。

ここで、法律について考えてみましょう。法律は国会によって決められた国の規則であって、その規定ははっきりと条文に記されています。そこで法律に反した行為をしたときは、法律の規定にしたがって罰を受けなければなりません。この処罰するということは、国家の権力によって、法律を守ることを、人々に強制しているということです。法律はこのように強制力をもって人の行為を外から正していくものです。警察や裁判所は、このために設けられているのです。このように、法律は人々の財産や生命を守り、集団の秩序や平和を維持していくものなのです。

つまり、法やきまりは、個人を傷つけたり、社会に反するような自分かってな行為に制限を加えて、人々の自由に生きる権利を守るものなのです。ですから、法やきまりを守るということは、一人ひとりの生き方を守り合うということなのです。自分の権利を守るとともに、他人の権利を尊重するという人間尊重の精神こそ、法の精神といえるでしょう。

わたしたちは、自由に楽しい生活を送ることができる権利があると同時に、決められた法やきまりを守る義務もあるのです。「規則を守れば、規則があなたを守る」といわれるように、わたしたちは、法やきまりを守ることによって、その保護によって、安穏な生活を続けていくことができるわけです。　「中学校道徳　あすを生きる２」（秀学社）より

生活向上オリエンテーション(4/10)で伝えた話

牧場　学校は、低い柵に囲まれた牧場のようにしたい。牧場の中では、端っこにいても構わない。でも、みんなで守るルールはあって、それが周りを囲む柵。ただし牢屋のようにみんなを閉じ込める場所ではないので、その柵は低ければ低いほどよい。強制ではなく、一人一人が自分の判断で柵の中に留まり、一定のルールの中でのびのびと暮らす牧場を目指したい。

次号は５月１日(水)発行予定です。「母の日(今年は５月12日)」などについて考えましょう。

人間関係というのは、相手との距離さえ置けばうまくいく。もめるのはその距離を越えようとするからだ。　遠藤三紀彦（作家）

沼田中学校道徳通信　Vol.28
（平成25年度第4号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　5月　1日(水)発行

今月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 法やきまりを守る気持ちよい社会を
～法やきまりの意義を理解し社会の秩序と規律を高める～
② 大切な家族の一員だから　～家族の大切さを再認識しその一員であることを自覚する～
③ 限りあるたったひとつの生命だから　～かけがえのない生命を尊重する～
④ 自分で考え判断してやってみる　～何ごとも自分で判断し決定し実行し責任をもつ～
⑤ 目標に向かうくじけない心を大切にしたい
～目標や希望に向かい勇気をもって生き抜く～

①5/1～5日　②6～12日　③13～19日　④20～26日　⑤27～31日

道徳教育の内容項目：父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く　4-6「家族愛」

ママへ

はなはね、ママに伝えたいことがあるんだよ。それはね、おべんとうが全部作れるようになったこと。びっくりしたでしょ。

冬休み、パパが前の日にお酒を飲みすぎて、ねぼうして、学童保育に持っていくおべんとうを用意してなかった。パパは「あとで持って行くから」と言ったけど、はなは今からでも間に合うと思ったので、パパがお風呂に入っている間、ごはんをたいて、自分でおべんとうを作ってみようと思った。おかずは、ばあばから作り方を教えてもらったたまごやきと、パパから教えてもらった豚肉とピーマンのしおこうじいため。ごはんには、ゆかりのふりかけをかけたよ。こんど作るときは、あとかたずけも全部するって、パパとやくそくしたんだよ。

さいきんのとくい料理は、カレーと肉じゃが。あとね、ママにもっと教えてもらいたかったこと。それはね、ピアノなんだよ。ママはきびしかったけど、教え方がわかりやすかったよ。きびしいほうが、はなが上手になるからね。ママのおかげで、はなは学校のべんきょうの中では、音楽が一番とくいだよ。はなもママみたいに、大人になったら、歌を歌う人になりたいな。おうえんしてね。お風呂のそうじとせんたくは、少し、さぼっているので、４年生になったらがんばる。やくそくするから、天国で見ててね。

今年は、パパといろんなところに旅行したいな。はなは、ママといっしょに行きたいところがたくさんあった。パパとママと三人でおきなわやディズニーランドに行きたかったな。夏休みに、パパがつれて行ってくれるんだって。ママがいてくれたらもっと楽しかったと思うけどね。

人の悪口を言わない。笑顔をわすれない。全部、ママが教えてくれたこと。

むずかしいな、いやだな、こまったな、と思っても、なんとかなるもんね。「きりかえ、きりかえ」って、ママがよく言ってたもんね。

はな、もう泣かないよ。がんばるよ。　安武はな

母が娘に遺した躾と食

人気ブログ「早寝早起き玄米生活~がんとムスメと、時々、旦那~」の一家の物語を、夫(安武信吾)の手記・妻(千恵)のブログ・娘(はな)の手紙で綴った著書『はなちゃんのみそ汁』(文藝春秋)から、娘の手紙を紹介しました。

千恵さんが乳がんの手術を受けたのは、結婚直前の 25 歳でした。抗がん剤の副作用で諦めていたのに、奇跡的に妊娠。出産で再発リスクは高まりますが、「命がけで産んだ」のが一人娘のはなちゃんでした。肺がんの再発後、千恵さんと信吾さんは治療とともに、「食べることは生きること。１人でも生きられる力を身につけて」と食生活の改善に取り組み、「玄米ごはんとみそ汁」の和食生活に変わりました。

そして、肺がんは一度消失しましたが、全身転移が発覚。千恵さんは、はなちゃん５歳の誕生日に約束をします。

「毎朝、自分でみそ汁をつくること」。

遺していく娘が、一人でも生きていけるようにと訴える感動の作品で、躾(しつけ)と食の大切さを訴え、親子愛・家族愛を再認識する良書です。

人間がもつ母への叫び

『日本一短い「母」への手紙』(角川文庫)より、「一筆啓上賞」の第１回受賞作品を紹介します。胸が熱くなります。

あと 10 分で着きます。手紙よりさきにつくと思います。あとで読んで笑って下さい。　瀬谷英佑(16 歳)

母ちゃん。泣きたい夜は決まって母ちゃんが夢に出てくる。背中を押してくれる。　髙田郁(33 歳)

あなたからもらった物は数多く　返せる物はとても少ない
大和田早都美(21 歳)

お母さんから母ちゃんに変えたのは、それだけ誇りに思ったからです。　高橋蘭子(28 歳)

次号は５月 20 日(月)発行します。「生命尊重」について考えましょう。

母、私の最高の教師でした。思いやりや愛、恐れずに立ち向かうことを教えてくれたのです。　スティーヴィー・ワンダー(歌手)

沼田中学校道徳通信　Vol.29
（平成25年度第5号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　5月20日(月)発行

文部科学省が作成した『心のノート』によると、

いま、自分がここに息づいていることの偶然性
そして、一度しか抱きしめることができないという有限性
さらに祖先から受け継ぎ、子孫へ受け渡していく連続性

生命(いのち)について、３つの観点から大切さを見つめています。

生命を考える　偶然性

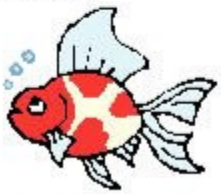
いまここにいる不思議

地球の永い永い歴史を考え、
人類の誕生を考え
そしていまここにいる自分を考えてみる。
こうやって生きていること
存在していることが
何か不思議に思えてくる。
私のまわりに
いつもの笑顔、いつもの声。
でも、この人たちとの出会いも
いまここに生命を授かっているからこそ。
星の数ほどの偶然があって
私自身の、いまここにいることの不思議。
考えれば考えるほど大切にしたいと思う
この生命。

生命を考える　有限性

いつか終わりがあること

遠い日の夏祭り。金魚すくい。
そして金魚が死んでしまったあの秋の日。
そっと土に埋めてあげた幼い自分を覚えている。
生あるものには終わりがあると
しんみり思ったあの夕方。
自分の生命だって
きっと終わりがやってくる。
一度しかない
一度しか抱きしめることのできないこの生命を証を
自分はこの世に　どのように刻んでいけばよいのだろう。
もっともっと
生きていることを実感し、喜びたい。
そしてかけがえのない私の人生を、生命を
もっともっと輝かせて



生命を考える　連続性

ずっとつながっていること

この生命は私のもの。
だれのものでもない、かけがえのない私のもの。
でも、どこからやってきたのだろう。
———そう
これは私が受け継いだもの。
ずっとずっと遠い遠いむかしから受け継がれ
受け継がれて、私が受け取ったもの。
この生命は私のものだけれど
私だけのものではない。
私は生命という襷を受け取り
人生という長いコースを走りきらねばならぬ駅伝走者。
転んでも、立たなきゃならない
くじけるわけにはいかない。
襷を私に届けてくれた人たちのためにも
そして私の襷を
待っている人たちのためにも。

母の日(5/12)と父の日(6/16)に挟まれている今、改めて自らの生命や、家族や友だちをはじめとする身近な生命について考えてみましょう。

生命(いのち)は

吉野　弘

生命は
自分自身だけでは完結できないように
つくられているらしい
花も
めしべとおしべが揃(そな)っているだけでは
不充分で
虫や風が訪れて
めしべとおしべを仲立ちする

生命はすべて
その中に欠如を抱き
それを他者から満たしてもらうのだ

私は今日、
どこかの花のための
虻(あぶ)だったかもしれない
そして明日は
誰かが
私という花のための
虻であるかもしれない

次号は６月３日(月)に発行します。主な内容は「強い意志」です。

沼田中学校道徳通信　Vol.30
（平成25年度第6号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　6月　3日(月)発行

道徳教育の内容項目　1-(2)

強い意志

今月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 目標に向かうくじけない心を大切にしたい
～目標や希望に向かい勇気をもって生き抜く～

② 目標に向かうくじけない心を大切にしたい
～目標や希望に向かい勇気をもって生き抜く～

③ 大切な家族の一員だから　～家族の大切さを再認識しその一員であることを自覚する～

④ この国を愛しこの国に生きる
～日本を愛し優れた伝統の継承と新しい文化を創造する～

⑤ 認め合い学び合う心を　～個性や立場を尊重して他の人から学ぶ姿勢をはぐくむ～

①6/1～2日　②3～9日　③10～16日　④17～23日　⑤24～30日

「沼中三大行事」の先陣を切って、６月６日(木)に「マラソン大会」が行われます。すでに、体育の授業や朝活動の時間、部活動などで練習が進められていますが、今年度は、学校教育目標の「強い身体を磨く生徒」を意識したり、学級力を向上させようと団結して頑張ったりしている光景が見られます。

そこで、1996年のアトランタオリンピックに出場したり、1997年の世界陸上アテネ大会10,000ｍと2003年世界陸上パリ大会女子マラソンで銅メダルを獲得したりした、千葉真子選手を取り上げた道徳資料「ベストスマイル」（日本文教出版）から、「強い意志」や「前向きな心」について考えましょう。千葉さんは世界陸上選手権大会で、異種目複数メダル獲得という前人未踏の快挙を成し遂げた選手ですが、2004年のアテネオリンピックでは補欠に回りました。その際、もう一度原点に立ち返ろうとした気持ちをまとめた文章です。

そもそもわたしがやっているマラソンは、走っているのは自分なんですけれども、一人の力だけでは絶対に走りきることはできません。指導してくれる監督、コーチ、それにトレーナー。食事などの健康を管理してくれるスタッフ、共に励まし合いながら練習をするチームメイト。わたしの場合は豊田自動織機という、全面的にバックアップしてくれるスポンサー、そして応援してくれる両親、友人、ファンの方々……。それはもう、数えきれない人たちからのパワーをもらって走っているんです。わたしが走る、といっても、この元気をもらわなければ、前には進めないと思います。

実際、練習そのものは自分のためのものでしかないんですけれども、試合はみんなで作り上げていくもの。ひとつのマラソンを走るために、何か月も前から毎日みんなで励まし合いながら苦しい練習を積み重ねていく過程があり、走ったときは喜びを共感して、みんなでひとつのものを作り上げていくこと、それがわたしにとっての最大の魅力なんです。わたしは感動好きです。みんなと感動を分かち合うことが大好きです。（中略）

わたしの座右の銘は「ベストスマイル」。ゴールした後にみんなで作ってきたレースをみんなで笑顔で喜び合おうという気持ちを込めた言葉なんです。

そう、人生も「ベストスマイル」で！

自分やクラスの目標を達成するため、主役である一人一人の生徒が希望と勇気をもって着実に走り抜くことを期待しています。

成長への強い意志

竹　　萩原朔太郎（群馬県出身）

光る地面に竹が生え、
青竹が生え、
地下には竹の根が生え、
根がしだいにほそらみ、
根の先より繊毛が生え、
かすかにけぶる繊毛が生え、
かすかにふるえ。

かたき地面に竹が生え、
地上にするどく竹が生え、
まっしぐらに竹が生え、
凍れる節節りんりんと、
青空のもとに竹が生え、
竹、竹、竹が生え。

がんばろう・顔晴れ(がんばれ)

マラソン大会の応援でよく耳にするのが「がんばれ」の声援です。一生懸命がんばっているのに「がんばれ」と言われたら、「もうこれ以上がんばれない」と気持ちが萎えてしまう人もいるかもしれません。

みなさんは「がんばれ」と言われてどんな気持ちがしますか。

1995年の阪神・淡路大震災直後、地元プロ野球チームのオリックスは、ヘルメットに「がんばれ」ではなく、「がんばろう」と書いて共感を呼びました。東日本大震災後も、「がんばろう東北／がんばろう日本」といった呼びかけを多く目にします。沼中も「ベストスマイル」を目指して、顔晴(がんば)りましょう。

次号は６月17日(月)に発行します。主な内容は「愛国心」です。

勤勉努力は、凡を非凡にする。　　上村松篁（日本画家）

沼田中学校道徳通信　Vol.31
（平成25年度第７号）

道徳教育の内容項目：日本人としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める　４-９「愛国心」

心の鍵

和のこころ

1. 素直な心
2. 思いやりがある優しい心
3. 困難に挑戦する心

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪
平成25年　6月１７日(月)発行

2013年3月18日付の「みやざき中央新聞」に掲載されていた富田欣和さんの講演会(久留米市開催「和ごころ塾」)より、日本人の秘密を紹介します。

「和のこころ」って何でしょう？

「和」ってどういうイメージがありますか？

「調和」「統合」「一つ」、いろいろ言い方はあると思うんですけど、「和のこころとは何か」ということを実はアマテラスオオミカミが古事記の中で言っています。

僕にとって個人的にこれは大発見でした。

「和のこころ」とは３つあります。

1、素直な心。2、思いやりがある優しい心。3、困難に挑戦する心。古事記ではこの３つを以て「和のこころ」と言っています。このうちの１つじゃなくて３つ全部持ちましょう、というのです。

どういうことか。

素直な心だけだと、能天気みたいな感じで「素直だね」で終わっちゃいます。思いやりのある優しい心だけだと、もしかしたら八方美人になるかもしれません。困難に挑戦する心だけだと、ジコチューなだけで終わってしまうかもしれません。

素直な心で何でもできる。そして、人のこともちゃんと見つつ、困難なことにも挑戦できる。この３つのバランスがすごく大事だということです。

「素直な心」「困難に挑戦する心」に対して、「思いやりのある優しい心」は少し意味合いが違います。

どういうことかと言うと、素直であることと、困難に挑戦することは１人でもできます。でも、思いやりのある優しい心は誰かがいないとできません。つまり、１人でできる「素直な心」「困難に挑戦する心」の間に、相手がいないとできない「思いやりのある優しい心」が入っているんです。

そしてこの「和のこころ」を表しているのが三種の神器の「鏡」、「剣」、「勾玉」です。

ちょっと余談ですが、天皇陛下が天皇陛下であるためにはこの三種の神器を持っていなければなりません。三種の神器をもっている人を天皇陛下と言うんです。それぐらい重要なんです。

実は「素直な心」というのが三種の神器でいうと「鏡」です。

「困難に挑戦する心」、これは「剣」です。「思いやりのある優しい心」は「勾玉」に対応しています。

もう１つ、鏡はアマテラスオオミカミに対応しています。このことは古事記にこう書かれてあります、「鏡を私だと思ってちゃんと篤く敬いなさい」と。

また、「困難に挑戦する心」は剣に対応していると言いましたが、剣を手に入れた人はスサノオノミコトです。ですから剣はスサノオに対応しています。勾玉はもう１人の神様ツクヨミノミコトに対応しています。

ツクヨミって聞いたことある人いますか？　古事記の中で「最も尊い神様が３人生まれました」と言っているんですが、それがアマテラス、スサノオ、ツクヨミの３人です。

ところが、ツクヨミは生まれた後１行も古事記に出てきていません。アマテラス、スサノオは結構活躍して、すごいエピソードもたくさんあるんですけど、ツクヨミだけ古事記に記述がないんです。最も尊い神様の１人なのに。

なぜか。それは「思いやりのある優しい心」がないと、アマテラスもスサノオも本来の良さが生きてこない、ということです。つまりツクヨミは裏(陰)で支えているんです。

このバランス感覚こそ古事記の秘密、日本人の秘密なんです。わかります？

素直に正直に生きることも大事だし、困難にチャレンジすることも大事なんですけど、それを結びつけているのが思いやりなんです。他者に対して思いやりのある優しい心がなければ、あとの２つは生きない。「三位一体で和のこころなんだよ」ということを古事記は物語っているんですね。

各学年の旅行では、友だちとの交流に加え、日本のよさや日本人の魅力を感じてきてください。
次号は７月１日(月)に発行します。主な内容は「愛国心」です。

心を変えろ、心を。日本を背負う気になってみろ。その気になって背負えば、日本などは軽いものだ。　坂本龍馬(幕末志士)

沼田中学校道徳通信　Vol.32
（平成25年度第8号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　7月　1日(月)発行

今月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 郷土をもっと好きになろう　～地域社会の一員として郷土を愛しその発展に寄与する～
② 自分の学校・仲間に誇りをもって　～学校を愛しよりよい校風をつくる～
③ 比べてみよう きのうの自分と　～自分のよさを見つめ個性を伸ばしていく～
①7/1～7日　②8～14日　③15～19日

※「愛国心」の予定でしたが、内容を変更して「自然愛」について特集します。

新旧ＰＴＡ会長さんのご厚意により、生徒・保護者・教員・地域住民らの融資が参加したボランティアで、新校舎玄関付近に、100 株以上のラベンダーが並ぶ花壇を造成しました。そこで、感謝の思いを込め、木の話を紹介します。

木を植えよう

君が家の周りに、一本の木を植える。毎朝、「お早う」と声をかける。木も、「お早う、元気でね」と、葉をふるわせて答えてくれる。友だちが、仲間が、兄弟が出来たのだ。君が、成長する。木も、成長する。互いに、競争だ。君が病気で寝ているときは、「早くよくなるんだよ、頑張ってね」と、いっそう鮮やかな葉の緑とともに、木が励ましてくれる。

君が家の周りに、もう一本の木を植える。朝、「お早う、元気でね」の木の声が、二倍になる。君は、二倍元気になる。病気したときも、「頑張ってね」の木の励ましが、二倍になる。君はもっと早く、病気がよくなり、治るだろう。背が伸びて大きくなる木との競争にも、もっと熱が入るだろう。

君が家の周りに、三本目の木を植える。「お早う」の声も三倍の、合唱になる。お父さん、お母さんが家にいない、君がひとりぼっちのときも、もう寂しくはない。夜も昼も、雨の日も風の日も、君の植えた木々がいつも傍にいて、お喋りしてくれる。君の仲間ができたのだ。カンカン照りのときも、涼しい木陰を作って君の話を聞いてくれる。学校で先生にほめられた話、叱られた話、友だちと遊んだこと、ケンカしたこと、楽しい話や悲しい話、何でもだ。それによって君の心はより楽しく、より明るく、より元気になる。どんな時にも仲間がいてくれるのは、何よりも心強い。

君が家の周りに、四本目、五本目、六本目、七本目の木を植える。十本目、二十本目、三十本目の木を植える。さらに、百本目、二百本目、三百本目、五百本目、千本目の木を植えれば、やがて林が出来、森が生まれる。「元気でね」の、林や森の大合唱が起きる。自分にとって大元気、大安心が生まれるとともに、自分の村、自分の町の、林や森が出来ることになる。

そこは、自然の荒々しい森とは違う。君や村の人、町の人と同じ大気、同じ土、同じ水を分かち合い、ともに呼吸し合い、ともに生き合う、「息遣いのきこえる」林や森である。そこには、「いのち」が溢れ、小鳥が美しく歌い、ミツバチがおいしいハチミツを作り、虫たちが賑やかに集う。木漏れ日が輝き、雨上がりの水玉が木の葉に光って、最高に美しい芸術作品を生んでくれる。

そこでは、人も自然も心を開き、ともに愛し合う。林や森の大合唱、交響曲がきこえる。「いのち」のきらめきがある。

君の植えた一本、一本の木が大きく成長し、林となり森となるとき、その林や森のある村や町が、君の本当のふるさとになる。たとえ君が大きくなって地球の反対側で働き、くらしたとしても、君が植えた木、君が作った林や森には、ともに育みそだてた愛がある。そここそが、君の帰るべき心のふるさとである。そこには愛があり、美しさと安心がある。君の植えた木々こそが、君の愛する仲間、幼なじみだからだ。

まず、一本の木を家の周りに植えることから始めよう。木を植え、木を愛し、元気と、美しさと、安心の原点を作ろう。一本にさらに一本を加えつづけ、木の仲間、木を植える仲間を増やし、手に手を取って広々とした心のふるさとを作り出そう。

人と木、人と自然、そして人と人が呼吸し合い、生き合い、愛し合うところに、私たちの明るい未来がある。そこに、二十一世紀の幸せがある。

「HAND　IN　HAND実行委員会制作ノート」木村尚三郎（東京大学名誉教授）
「21世紀を生きる日本の子ども達、アジアの子ども達に
－木を植えよう、愛する仲間を作ろう－」

次号は７月18日（木）に発行します。主な内容は「男女の異性観」です。

私たちが新しい木を植えるとき、私たちは平和の種も植えるのです。　ワンガリ・マータイ（ノーベル平和賞受賞）

沼田中学校道徳通信　Vol.33
（平成25年度第9号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　7月18日(木)発行

各学年の旅行が終わり、廊下には旅行のまとめが掲示されています。どの学年も男女混合のグループごとに撮った集合写真が飾られ、協力して困難を乗り越えた様子、楽しく友情を深めた様子などが伝わってきます。

愛

～男女の人格を尊重して、互いに成長する～

道徳教育の内容項目：男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。　2-4「男女の異性観」

そこで、沼中で活用している道徳の副読本から「男女の異性観」に注目し、その一部を紹介します。

坂口幸恵「さわやかな笑顔」

古代のギリシャには、こんな神話があります。

神様が最初につくられた人間の原型というのは、１つの丸い胴体に頭が２つ、手が４本、足が４本あったのだそうです。その姿は、男の背中と女の背中がくっついているようなものだったと想像してください。その名前はアンドロギュノスといいました。このアンドロギュノスは頭が２つあるので、絶えずおしゃべりをしてうるさくしていました。そのうえ、神様に無礼なことをくり返していました。そのため、とうとう神様の怒りをかい、アンドロギュノスは体を２つに切り離されてしまいました。神様は切り離した一方を男、他方を女という人間にしました。２つに切り離された男と女は、アンドロギュノスだったころの半身にあこがれ、自分の半身に出会うことを求めるようになりました。人間は２つに分けられた自分の半身と１つになって本来の体になることを、それ以来頭の中に植えつけられてしまったのです。だから、今も男性は女性を求め、女性は男性を求めているというのです。そうしないと、心が不安定で寂しいのです。

「中学生の道徳３年　かけがえのない きみだから」（学研）

田中良「『好き』と『愛する』と」

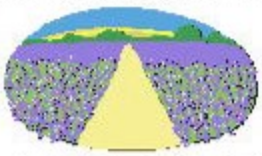
ぼくは、君たちがいつの日か「美しく人間的な性」に出会ってほしいと、心から願っている。「美しく人間的な性」というのは、「本当の愛の中の性」ということだ。本当に愛し合っている二人の性は、生きる喜びや勇気や幸せや希望を生みだしてくれる。愛し合っていることのやさしさと充実感に満たされ、そのことによってさらに二人の愛は深められ、固められていく――。

〈中略〉

「愛する」ということは、主体的で、能動的で、全面的な行為だから、相手に積極的に働きかけたり、相手のために何かしてあげたくなるんだ。そうなれば、当然、相手の立場や感情に、深くかかわっていくことになるんだね。

だから、相手の立場や考え方や生き方などをよく理解していないとまずいんだ。さらに、相手の人生や、その中の喜びや悲しみを丸抱えにしてあげることのできる心の容量の大きさが必要になるんだよね。

人を愛するためには、人間を本当に大事にする心、相手の長い人生の全体を大事にする心、相手の幸せのために必要なときには厳しく忠告をしてあげたり、ときには相手のために自分を抑える能力――などが自分の中にしっかり育っていないと、うまくいかないわけだ。そういう心や能力が育っていないと、身勝手になり、やがて傷つけ合ったり、苦しめ合ったりして、壊れてしまうことにもなる。



これは、じっさいには大人にだってなかなかむずかしいことなんだよね。何度も失敗したり、学んだり、自分を見つめ直したりしながら、成長していくものなんだろうね。

「愛」とは、そういう厳しいものでもあるんだ。「愛」というのは、美しく尊いものであり、甘く切ないものであり、やさしく温かいものでもあるんだけれど、また、つらく悲しいものでもあり、厳しいものでもあるんだね。

寅さんで有名な映画監督の山田洋次さんって知ってる？　この人は、「愛するということは、互いの命をいとおしむことだ」といってるんだけれど、ステキな言葉だよね。

『星の王子さま』を書いたサン＝テグジュペリという人は、「愛し合うということは、互いに見つめ合うことではないんだ。いっしょに同じ方を見ることなんだ」といってる。お互いに顔を見つめ合って、いつまでもウットリしてるだけでは、愛は育たないというんだよ。

「同じ方を見る」ってどういうことなんだろうか？　同じ考え、同じ関心、同じ人生の目標があって、いっしょに励まし合いながら努力する中でこそ、愛は育つのだといってるんじゃないだろうか？

「中学生の道徳　道しるべ３」（正進社）

次号は７月26日(金)に発行します。主な内容は「世界の平和」です。

愛情にはひとつの法則しかない。それは愛する人を幸福にすること。　スタンダール(作家)

沼田中学校道徳通信　Vol.34
（平成 25 年度第 10 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪
平成 25 年　7 月 2 6 日（金）発行

今月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 友という生涯のたからものを　～理解し合い高め合える友達に出会う～

①8/26～31

道徳教育の内容項目：世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する　4-10「平和」

８月は、広島原爆の日（8/6）、長崎原爆の日（8/9）、終戦記念日（8/15）など、戦争や平和について考える記念日が多くあります。しかし、夏休み中であるため、クラスで話し合ったり、思いを共有したりする機会をなかなか設けられません。そこで、下記の資料を読み合い、平和や幸福について深く考えてみましょう。

■（株）陽なた家ファミリー代表　永松茂久「for you～誰かのことを想うとき 人は強くなる～」

そこ（鹿児島の知覧にある特攻平和会館）には特攻隊員の遺書が展示されていました。（中略）明日出撃する、そのギリギリの精神状態で遺書を書くわけです。一番多く書かれていたのはご両親、特にお母さんへの感謝でした。他にも国を想う気持ちだったり、ふるさとへの感謝、「天皇陛下万歳」というのもありました。「あなたを守るために行くんだ」と彼女に向けて書いた遺書もありました。ほとんどが大切な人に向けて書いてありました。

僕はその遺書を見て涙が止まりませんでした。「俺は何をやっているんだろう、本当にすみません」と思いながら、ずっと遺書を読んでいました。しかし、その涙が一つの疑問に変わりました。「ところで英霊さんたちは、何を残したかったんだろう？」、そう思うようになったんです。

特攻作戦は悲惨な作戦です。飛行機に爆弾を積んでそのまま敵艦に体当たりをする。「自分の命と引き替えに絶対に国を守るんだ」という決意と覚悟。その「国」というのは何かというと、自分のふるさとであり、自分の家族であり、自分の愛する人たちだと思うんです。

「みやざき中央新聞」2012年4月23日（月）発行の第2457号より

■（株）アイスブレイク代表取締役　中村信仁「忘れない、愛のために飛び立ったことを」

知覧飛行場は、1945 年に特攻基地となります。わずか 4 か月の間に、1036 名の隊員が沖縄の海に向かって飛んでいったことは、皆さんもご存じだと思います。（中略）

戦争は異常なんです。人生の順番で言うなら、親は子どもより先に逝くものです。子どもが親より先に逝ってはいけないのです。でも、彼らは、20 歳前後の若さで死を決して飛んでいった。国を愛する心だったんでしょうか。彼らの心の中にあったのは郷土愛だったのではないでしょうか。

「自分のふるさと、自分の親、自分の弟や妹を、俺が守らないで誰が守るんだ」

「もし、自分が命を賭けて戦うことで、自分のふるさと、自分の親、自分の弟、妹たちを守れるんだったら…」そういう思いだったのではないでしょうか。

彼らが残した遺書、絶筆が知覧の特攻平和会館に展示されています。日本の国語教育はこれほどまでに素晴らしかったのか感心するほど、達筆な字、そして文章です。

一つ一つを読んでいくと共通項が三つ出てきます。一つ目はご両親に対する感謝です。

「今日まで自分を見事に育ててくださいました」

二つ目は謝罪です。「自分が先に死ぬことをお許しください」

三つ目、これがすごいです。全員が同じことを書いています。

「悲しまないでください。自分が行かなければならんないのです」と。

「みやざき中央新聞」2012年8月13日（月）発行の第2471号より

■　高岡修『新編 知覧特別攻撃隊』（ジャプラン）より　※特攻隊員の遺書の一部です。

・御恩返しに、うんと親孝行しようと思っていましたが、結局何も出来ずにしまいました事をお許しください。

・あんまり緑が美しい　今日これから　死にに行く事すら　忘れてしまいそうだ。
真っ青な空　ぽかんと浮かぶ白い雲　六月の知覧は　もうセミの声がして　夏を思わせる。
作戦命令を待っている間に

次号は 8 月 26 日（月）に発行します。主な内容は「公正・公平」です。

平和の基本はオンリーワンです。他人と比べるのではなく、お互いの違いを大切にする。　新垣勉（歌手）

沼田中学校道徳通信　Vol.35
（平成 25 年度第 11 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 25 年　8 月 26 日（月）発行

「心のノート」（文部科学省）

「心のノート」は、生徒が身に付ける道徳の内容をわかりやすく表し、道徳的価値について自ら考えるきっかけになります。また、道徳の時間等で、生徒が自らページを開いて書き込んだり、家庭で話題にしたりするなど、生活の様々な場面で活用することができます。平成 23･24 年度は、電子データを文部科学省のホームページで紹介されていましたが、今年度は配付が再開しました。

道徳教育の内容項目：正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める　4-(3)

※今年度の７月、沼田市の予算で道徳の副読本（『あすを生きる』日本文教出版）を購入していただきました。
そこで、１年生の内容から「公正・公平」に関する資料を紹介します。

「ちがい」に種類があるの？

地球上には約 60 億（現在は約 71 億）の人々が暮らしており、それぞれがさまざまな“ちがい”をもっています。人々を分類するとき、分類のしかたによっていろいろなグループ分けができるはずです。しかし、それらの“ちがい”の中には、「あってよい“ちがい”」と「あってはいけない“ちがい”」があります。

まず、わたしが考える「あってもよい“ちがい”」と「あってはいけない“ちがい”」のいくつかを紹介してみましょう。

「あってもよい“ちがい”」

①Ａさんは、仏教徒であるが、Ｂさんは、キリスト教徒である。
②日本では、食事のときはしを使うが、インドでは、右手の指を使って食べる。
③プロ野球選手Ｃさんの年収は、１億円であるが、同じ年齢で会社員のＤさんの年収は、400 万円である

「あってはいけない“ちがい”」

④日本では、５歳未満児の死亡率は出生 1,000 人に対して、４人であるが、ボリビアでは６９人、カンボジアでは 141 人、エチオピアでは 166 人となっている。
⑤Ｅ百貨店では、女性社員の採用について、「身長 158 センチメートル以上、容姿端麗の方に限る」という内部条件を設けているが、男性についてはそのような条件は設けていない。
⑥10 歳のＦちゃんは、毎日小学校に通っているが、フィリピンでは、同じ年齢のＧちゃんが、毎日、路上でガムを売って生活費をかせいでいる。

「あってもよい“ちがい”」としてあげたのは、①宗教、②慣習、③能力や本人の努力によるちがいです。また、「あってはいけない“ちがい”」としてあげたのは、自分の意志とは関係なく、その人の生まれた国や民族などのちがいなどによって生じる、④死亡率、⑤性による待遇、⑥教育を受ける機会などのちがいです。

人間は、民族・親・性を選ぶことができません。この「あってはいけない“ちがい”」の中に、わたしたちが人権問題について考えていくうえでの一つのカギがあるのです。

次の⑦～⑨は、「あってもよい“ちがい”」と「あってはいけない“ちがい”」のどちらに分類できるか考えてみてください。

⑦高校入試で、Ｈさんは成績がよかったので合格したが、成績のよくなかったＩさんは、不合格になった。
⑧Ｊさんは大阪の方言で話すが、Ｋさんは青森の方言で話す。
⑨イギリスのあるゴルフ・クラブでは、ヨーロッパ系の白人は歓迎されるが、ユダヤ人や日本人は入会を断られる。

みなさんは、“ちがい”にはいろいろな種類があることがわかったでしょうか。「あってもよい“ちがい”」、「あってはいけない“ちがい”」があり、これらをしっかり区別して対応することで、たがいの暮らしや生き方を理解し合うことができるのです。

次号は９月２日（月）に発行します。主な内容は「集団生活の向上」です。

沼田中学校道徳通信　Vol.36
（平成 25 年度第 12 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 25 年　9 月　2 日（月）発行

9 月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 友という生涯のたからものを　～理解し合い高め合える友達に出逢う～
② 仲間がいてキラリと光る自分がいる　～役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める～
③ 仲間がいてキラリと光る自分がいる　～役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める～
④ 人々の善意や支えにこたえたい　～善意や支えに気づきそれにこたえようとする～
⑤ 理想をもって前向きに生きよう　～真理・真実・理想を求め自分の人生を切り拓く～
⑥ 私たちの力を社会の力に　～勤労の貴さを理解し皆の幸福や社会の発展に努める～

①9/1　②2～8日　③9～15日　④16～22日　⑤23～29日　⑥30日

道徳教育の内容項目：自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める　4－(4)

夏休み中の８月22日（金）、第95回全国高校野球選手権記念大会で前橋育英高校が優勝したことは記憶に新しいところです。快進撃と共に、様々なマスメディアで感動的なエピソードが紹介されています。そこで、今回はネット上で大きな話題になっている「東スポＷｅｂ(8/23)」より、集団生活の向上について考える「陰の立役者」という話をお伝えします。

陰の立役者　～前橋育英ナインが感謝した「スーパー添乗員」～

第 95 回全国高校野球選手権大会は２２日に決勝戦を行い、初出場の前橋育英（群馬）が延岡学園（宮崎）を４－３で下し、深紅の優勝旗を手にした。快挙の裏にはチームを支える“スーパー添乗員”の存在もあった。

前橋育英の荒井直樹監督(49)は「自分たちがやってきたことは間違いではなかったな、とうれしい気持ちです」と喜びをかみしめた。４回に３点を先制されながら、直後の５回に田村（３年）のソロ本塁打や小川（３年）の適時打で同点。そして７回、無死三塁から荒井監督の息子で主将の荒井海斗（３年）が勝ち越し打を放った。

激戦を制したナインからは「優勝できたのはあの人のおかげです」との声が飛び出した。大会期間中、チームに帯同した日本旅行高崎支店の添乗員・宮澤和広氏(35)。桐生高の野球部ＯＢで、ありったけの野球への情熱をチームに注いでくれたという。

「３回戦の横浜(神奈川)戦の前、宮澤さんが『横浜といえばシューマイだから食べた方がいい。ゲンを担ごう』と言ったので、その通りにしたら勝てました。それで次の常総学院(茨城)戦の朝にも名物の納豆を食べたら、また勝った」(ある選手)。ナインは準決勝の日大山形(山形)戦の前に名産のさくらんぼ、そして決勝戦前夜(22 日)も宮崎名産のマンゴーを食べまくった。

幸運を呼び込んだゲン担ぎだが、宮澤氏の活躍はそれだけではない。「宮澤さんは対戦相手のデータや情報を集めて、独自の分析メモを作ってくれた。内容は濃くて相手の配球の特徴や、どの選手がどのタイミングでセーフティーバントをしてくるかまで書かれていた。相手打線の情報は（高橋）光成も役に立ったと思います」（別の選手）。練習中でも宿舎でも常にナインを励まし、試合ではネット裏から「練習通りやれよ！」との声が響いた。

「僕が好きでやったこと。対戦校の地元の地方紙や負けた監督のコメントなどを見て情報をまとめただけです。監督に“君も３年間野球やってたんだろ”と言われ、チームの１人のように扱っていただいた。感動しました」（宮澤氏）

今大会の抽選日２日前からチームに帯同し、かつて自分が追いかけた夢を前橋育英ナインに託した。本来の仕事である弁当の発注や球場入りの連絡などを上司に任せてまでチームを支えた。

決勝の朝、ナインから「あと１つで日本一の添乗員です」と声をかけられた宮澤氏は「決勝戦も練習通り楽しんでください」と選手たちの前でスピーチ。その言葉通り、９回のピンチの場面では主将の荒井が「楽しんでやろう」とナインに呼びかけた。献身的な情熱が呼び込んだ日本一。まさに陰の立役者だ。

次号は９月 20 日（金）に発行します。主な内容は「友情」です。

笑顔で生き、周囲の人々も幸せにする。

渡辺和子（ノートルダム清心学園理事長）

沼田中学校道徳通信　Vol.37
（平成 25 年度第 13 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　9月20日(金)発行

太陽みたいにきらきら輝く生涯のたからもの

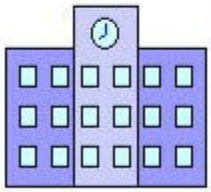
楽しいこともあればぎくしゃくすることもある友達関係。ワイワイガヤガヤしているのは仲のいい証拠。でも、自分がつまづいたときや落ち込んだときにそっと力をくれる、そんな友達がいるとうれしい。生涯のたからものはきっとたくさんあるけれど、友情もそのひとつに違いない。

中学校版『心のノート』より

道徳教育の内容項目：友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに話し合い、高め合う　2－(3)

友達とはどういうものでしょうか。
友達や仲間がいたからこそ、やってこられた経験はありませんか。
もう一度友達との関係を見つめ直し、友達や仲間とのつながりをいかして生きていきましょう。

しるし　～友情を見つめる　　辻 仁成『そこに僕はいた』(新潮社)～



僕は学校が好きだった。毎日わくわくしながら学校に通ったものだ。学校にはいやな奴も大勢いたが、好きな友達がそれ以上沢山いたからである。向こうは僕のことをどう思っていたのかは分からないが、構わなかった。僕はかってに彼らのことを友達だと思っていたのである。

友達を作る、とよくいう。あの頃先生や親は僕によく「いい友達をいっぱい作りなさい」といっていた。僕は彼らがそういうたびに「それは違う」と心の中で反発したものだった。友達は作るものじゃない、と今でも思っている。友達を作るなんて第一友達に対して失礼だ。第二に作った友達は偽物のような気がしたのだ。

僕は友達は作るものではなく、自然に出来るものなのだと思う。僕にも友達が出来なくて辛い時期があったけれど、僕は決して友達を作ろうとはしなかった。つまり無理して誰かに合わせたりしてつきあうことはなかったのだ。僕はいつも自然にしていた。大人になってから、ああ、あの頃あいつは僕の友達だったのだな、と思い知らされた奴もいた。その頃は喧嘩ばっかりしていたからである。後になってそうやって分かる友達もまたいいものだ。ともだちともだちといってつるんでいるだけが友達ではない。いつも一緒にいた奴らよりも忘れられない友達が後になっていっぱい現れたりするものである。だから僕は友達の間口をさらに大きくとらなくてはいけないなと最近思うようになった。友達という言葉には本当は僕らが想像しているよりももっともっと大きな意味がかくされているのだ。

大人になった今、僕は学校を失ってしまった。毎日楽しみにしていた学校はもうない。社会にでてから今日まで、ぼくは孤独に仕事をしてきた。それでも一生懸命仕事がやれたのは、ふりかえると僕には素晴らしい仲間たちが大勢いたからなのだ。彼らと過ごした自然な日々は、僕の人生において大いなる大地となっている。そして僕はそこからすくすくと伸びる一本の木なのだ。ぼくの根っこは彼らと繋がり、ぼくは空を目指している。

■ 友という生涯のたからものを『心のノート』より

空気と光と友人の愛。
これだけ残っていれば、
気を落とすことはない。
ゲーテ(詩人)

人生から友情を取り去ってしまうのは、
この世界から太陽を取り去るというものだ。
キケロ(哲学者)

友人に不信を抱くことは
友人にあざむかれるより
もっと恥ずべきことだ。
ラ・ロシュフコー(文学者)

友情は成長の遅い植物である。
それが友情という名に値する
ようになる前に、幾度かの
困難な打撃に耐えなければ
ならない。
ジョージ・ワシントン(米大統領)

私は世界にふたつの宝をもっていた。
私の友と私の魂と。
ロマン・ロラン(作家)

次号は 10 月 1 日(火)に発行します。主な内容は「勤労の尊さや意義」です。

真の友情は精神の厳しい緊張関係の上にのみ成り立つ　　木下順二(劇作家)

沼田中学校道徳通信　Vol.38
（平成 25 年度第 14 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年１０月　１日(火)発行

10月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 私たちの力を社会の力に　～勤労の尊さを理解し皆の幸福や社会の発展に努める～
② 温かい人間愛につつまれて　～思いやりの心をもつ～
③ 心を形に表していこう　～礼儀の意義を理解しその場に応じた言動をとる～
④ 郷土をもっと好きになろう　～地域社会の一員として郷土を愛しその発展に寄与する～
⑤ 自分の学校・仲間に誇りをもって　～学校を愛しよりよい校風をつくる～

①10/1～6日　②7～13日　③14～20日　④21～27日　⑤28～31日

道徳教育の内容項目：勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める　4-(5)

『心のノート』には、「働く」ことに関して次のような記述があります。

「働く」というと、単にお金をかせぐためだと思いがちだけれども、実は、生きがいや自己実現にもつながっている。自分の大切な人の生活を支えることでもあり、自分の夢を実現するためにものでもあるという意味で、個人の幸福追求の手段ということができるだろう。

その一方で、勤労は社会への貢献でもあることを忘れてはいけない。いろいろな仕事があって、それは必ず社会の役に立っている。その仕事を通し、きっと社会の中のだれかが恩恵を受けていたり、助かったりしているのだ。

「働く」ということには、個人と社会において同じように大きな意義が存在する。

そこで、２年生の職場体験学習(10/2･3)に関連して、今回は「働く」ことについて考えていきましょう。

とてもナチュラルに、気がついたらワインの仕事をしていたんです。なんでそのことを仕事にしたかというのではなく、わたしはこれが**“天職”**、つまり**“天から与えられたやるべきこと”**なんだと思っています。フランス語で**“トラバーユ”**という言葉があります。それを日本語訳すると**“仕事”**という意味なんですけれど、それは仕事というよりも**“天職”**だとわたしは解釈しているんです。

日本ではお金を伴っていることが**“仕事”**と言われるんですけれど、そうではなくて**“その人が生きている間にやるべきこと”**なんです。わたしは短大を卒業したあとは、**“自分がやるべきこと”**ではなくてお金を得るための仕事をしていたんですけれど、現在のワインの仕事はたぶん、わたしのやるべきことだと思っています。

天職というとすごくかっこよく思われてしまうんですけれど、たとえば生まれながらにすごく子どもが好きな人が保育士をやっていたら、それが天職だと思うんです。社会的にたくさんのお金を稼がなかったとしても、お母さんとして子どもたちを育てることが好きで、合っていたら、それがその人の天職だと思います。それを見つけられたらすごく楽になれると思います。若いときには、それがなかなか見つけられないんです。迷っちゃうんですよ。やりたいことがあるけれど、実際、現実的にはそんなことできない、お金にならない、というのは言いわけに過ぎないんですよ。

天職が見つからないという人が日本ですごく多いといわれています。今の日本の社会では自分を社会の尺度で測ってしまっている人が多いため、見つけられないのだと思います。ソフトな部分ではなくハードな部分、いわゆる肩書きのような側面から見てしまうのが、日本社会のベースの教育システムだと思います。外国で暮らしていると、年齢は会話の中では聞いたこともないし、そういうことはぜんぜんその人に関係のないことで、ある程度の年齢ならばだれもが大人の社会にいるんです。

『中学道徳 あすを生きる３』(日本文教出版株式会社)収録の読み物資料
NPO法人キャリナビ「この人がカッコいい！　〔お仕事人辞典〕」より

次号は 10 月 16 日(水)に発行します。主な内容は「公徳心・社会連帯」です。

仕事が楽しみならば　人生は極楽　仕事が義務なら　人生は地獄だ　　田沼武能(写真家)

沼田中学校道徳通信　Vol.39
（平成 25 年度第 15 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年１０月１６日(水)発行

２学期に入って間もない頃、国語の時間に、全校生徒が人権作文を書きました。自分を見つめ、他者を見つめ、社会を見つめる中で、「人権」について考えることができました。いじめ、差別、偏見といった問題に正面から向き合ったり、命の大切さ、助け合いや協力することの美しさについて、考えを整理したりしました。また、最近になって、「全国中学生人権作文コンテスト」の入賞作品集をいただき、各学級の学級文庫に収められています。読んでみてください。

人権作文

道徳教育の内容項目：公徳心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める　4-(2)

マナー、助け合い、譲り合い、思いやり、あたたかさ…などについて、考えていきましょう

おたがいさま

第 43 回ＪＸ童話賞　一般の部　佳作　金田枝里子　　『童話の花束』その 43

「どうもありがとう。」

わたしの腕にかろうじて支えられたその人は、ほっとしたように言った。

午後６時の北千住駅のホーム。電車から降りる人波に押されて、転びそうになったのをとっさに受けとめた。髪はきれいなブラウンに染められているが、てっぺんが白い。小さい孫のいる年齢だろう。

改めて深々と下げられた頭に見送られ、わたしは電車に乗った。ちょっと照れくさい。

しかし間もなく、そんな照れくささも吹きとぶほど、人いきれの車内に我が身を押しこみ、押しこまれ、やっとのことで手すりにつかまる。

池袋で行われた社外研修の帰りだった。かばんの中は資料でぎっしり重く、肩にくいこんでいる。

単調な車内アナウンスが、電車の揺れを予告した。じきに体の重心が前へ、後ろへ移る。

もともと電車は苦手だ。よどんだ空気に、よどんだ匂い、不快な揺れと機械音。乗り換えたときに一旦は解放されるけれど、すぐにまた同じ環境に戻らねばならない。まるで交代相手のいないリレーをやらされているようなもの。わたしは肺の中で生ぬるくなった空気を吐きだした。

３つ目の駅が過ぎさった辺りで、それまで感じていた不快さがふいにピークに達した。

喉の奥から酸っぱいものがせりあがった。

目の前がかすみ、冷や汗が流れた。必死でかばんからタオルハンカチを取りだし、口元を押さえる。がんばれ、とわたしは自分に言いきかせた。今までだってやり過ごせたんだ、あともう少しなんだから、と――。

「どうぞ。」

声をかけられて、わたしはハッとした。

見ると、前のシートに座っていた白髪頭のおばあさんが、腰を浮かそうとしていた。

「大丈夫です。」

とっさにわたしは答えてしまう。

「でも、顔色が悪いよ。」

そう言って立ちあがったおばあさんの背中はひどく曲がっていた。とんでもない、と思わずその肩を押しとどめた。

「ほんとに、あともう少しだけなんで――。」

「そうやってずっとがんばってきたんでしょ。」

見かけとはうらはらに、かくしゃくとした態度でおばあさんは言った。

「あと少しのところで倒れたらどうするの。おたがいさまなんだから、助けあいましょう。」

気がつくと、その人とわたしの位置が逆転した。はるか年上の人に譲られた席に居心地の悪い思いで収まりながらも、わたしの心にはその『おたがいさま』という言葉が強く印象づけられた。そういえばわたしも、この電車に乗る前に人助けをしたっけ。

そうか、おたがいさまって、こういうことなんだ。わたしは肩からすっと力が抜けていくのを感じた。

わたしを苦しめていた無機質な圧迫感が、少しずつだけどやわらいでいったのだ。

でも奇跡はそれだけでは終わらなかった。

隣に座っていた学生服の男の子が、さっきから居心地悪そうにもぞもぞしていたが、やがて、

「あの、こっちにどうぞ。」

と、おばあさんに向かって腰を浮かせた。

温かなリレーは今、空気の一部となってつながっていった。

次号は 11 月 2 日(金)に発行します。主な内容は「愛校心」です。

お子さんに「なんのために生きるの？」と聞かれたら、「誰かを幸せにするために生きるのよ」と答えてあげてください。　瀬戸内寂聴(僧侶)

沼田中学校道徳通信　Vol.40
（平成 25 年度第 16 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 25 年１１月　１日(金)発行

11月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 自分の学校・仲間に誇りをもって　～学校を愛しよりよい校風をつくる～
② 人々の善意や支えにこたえたい　～善意や支えに気づきそれにこたえようとする～
③ 理想をもって前向きに生きよう　～真理・真実・理想を求め自分の人生を切り拓く～
④ 私たちの力を社会の力に　～勤労の尊さを理解し皆の幸福や社会の発展に努める～
⑤ 認め合い学び合う心を　～個性や立場を尊重して他の人から学ぶ姿勢をはぐくむ～

①11/1～3日　②4～10日　③11～17日　④18～24日　⑤25～30日

道徳教育の内容項目：学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する　4-(7)

校門を掘る子　～あなたが自分の学校で大切にしたいものは何ですか～

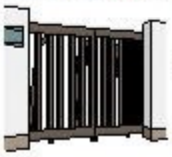
あれは、佐々木兵三校長先生が赴任して来て間もないころの生徒会でのことであった。

ぼくの中学校は田んぼの中にぽつんと建った校舎だった。裏に通称「電気ぜき」と呼ばれる発電所の水路が通っていた。その水路ぷたいに小路（こみち）があって、その小路が学校への近道だったことから、多くの生徒が利用していた。つまり、その小路を登校することは、学校の裏側から校舎に入るかたちになっていたのである。

その件がこの日の議論の対象だった。つまり、ある生徒が、

「いやしくも中学生たる者が裏道を通って登校するとは何ごとか。中学生ならば中学生らしく、正々堂々と校門をくぐって登校すべきであーる。」

と、ぶちあげたのである。



ぼくは結構実利的な考えをするタイプだったので、遅刻するよりも近道ぐらいしたって別にいいじゃないか、と思っていたが、隅で腕組みをしながらじっと聞いていた校長先生が、やおら手を挙げた。

「今の意見、わたしは大賛成だ。非常にいい意見だ。」

と、得意の「非常に」がついたのである。

ところが、たちまち別の生徒の手が挙がった。

「わたしも今の意見には大賛成です。正々堂々と正門をくぐって登校すべきだと思います。しかし、そうしたいのですがいったいどこがわが校の校門なのでしょう？」

この意見には一同あ然とせざるをえなかった。校長先生も思わずズッコケそうになった。そうだったのである。わが校には「校門」がなかったのである。財政難を押して校舎は新築したものの、校門にまでは手が回らなかったのだろう。

「わかりました。その件は、明日さっそく役場にお願いし、近々に建ててもらうよう約束します。」

校長先生は大きく胸を張った。

翌日、校長先生は約束通り役場に参上し、交渉に臨んだ。しかし、当局は財政難を理由に首を縦にふらなかったらしい。

おそらく校長先生は、その帰り道で決心したのだろう。それからほどなくわが校に校門が建ったのである。しかし、確かに形は校門風ではあったが、コンクリートでも石材でもなかった。杉板を使って急いで大工さんに作ってもらった、いわゆる中が空洞の箱状のもので、それにコンクリート色のペンキが塗られたものだった。

ぼくらが、そのテンプラの衣のような校門が、校長先生のポケットマネーによって建てられたものであることを知ったのは、卒業してからのことである。生徒会への「約束」を、校長先生は自らのポケットマネーで果たしていたのである。

とにかくそれからは、全校生徒が正々堂々と校門をくぐって登校するようになったのは言うまでもない。

季節は移ろい、やがて寒い冬が巡ってきた。そして、雪がずんずん降り積もって、あわれ1.5メートルほどのテンプラ校門はいつの間にか雪面下になり、頭さえも見えなくなっていた。

だが、その雪に敢然と挑んだ生徒がいた。うかつにもぼくはそれを知らなかったが、三年生の女生徒だったという。彼女は吹雪の中を汗だくでシャベルをふるい、必死に何か大事なものを探しているかのように掘っていたという。

校門を掘っていたのである。だれに命令されたものでもなく、自発的な行動であった。

そんな豪雪も春の訪れとともに衰え始めた。だがそれは、同時にぼくらの卒業式が近づいた印でもあった。

卒業記念の文集を作るのはわが校の恒例で、その巻頭文を校長先生にお願いするのも恒例であった。恒例に従い、編集委員が校長先生に原稿を依頼した。校長先生はもちろん快く書いてくれたのだが、その巻頭文のタイトルは「校門を掘る子」であった。

約束を守るためにポケットマネーを投じた校門であった。校門が雪下に埋もれた。そのままいけば、春まで姿を見せない校門であった。だが、それを掘り起こす少女がいた。だれに指示されたわけでもないのに少女は黙黙と掘っていた。その姿を校長先生はしっかり見つめていたのである。このシーンこそが校長先生の、教員生活の中で見た、最も印象深いシーンではなかっただろうか。

「わたしの誇りは、きみたちと過ごしたあの一年間に尽きるよ。」とぼくに語った、その「誇り」のクライマックスが、このシーンではなかっただろうか。

マンガ「釣りキチ三平」の著者でもある矢口高雄氏の『ボクの先生は山と川』（講談社）より

次号は 11 月 18 日(月)に発行します。主な内容は「思いやり」です。

合唱の魅力は最終的には「協調性」につきる。音をいかに合わせるかである。　錦織健(オペラ歌手)

沼田中学校道徳通信　Vol.41
（平成 25 年度第 17 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪
平成 25 年１１月１６日(月)発行

道徳項の内容項目：温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ　2-(2)

思いやり

クリスマスが近づき、サンタクロースやツリー、ろうそくなどの映像を目にする機会が増えてきました。この時期になると、数年前の人権作文コンテストの表彰式でお聞きした「ろうそく」の話を思い出します。「ろうそくは自分の身を削ってでも、周りに明かりを与えます。まず人を思いやり、自分のことはあとという生き方が素晴らしいと思います。見習っていきたいものです」と。

そこで、今回は「思いやり」あふれる素敵なエピソードを紹介します。▲▲▲▲▲▲▲▲ ▲▲▲▲▲▲▲▲

あるレストランでのできごと

日本文教出版「新版　中学校道徳教育　あすを生きる３」より

東京ディズニーランドは、「夢と魔法の王国」をテーマにしているので、訪れた人みんなに「夢を与え、幸せになってほしい」と願っている。そのため、お客に接する人をみんな「キャスト」と呼んでいる。

「キャスト」と呼ぶのも、来園されたすべてのゲスト(お客)の方々に、夢と幸せを与えるキャスト(役者)でありたいという願いからである。

道を尋ねられたり、写真撮影の依頼をされたりしても、常に丁寧に対応している。

だからこそ、キャストに対する「マニュアル」は厳しい。

東京ディズニーランドの「ワールドバザール」の一角にある人気レストラン「イーストサイド・カフェ」でのできごとだ。

そこに若い夫婦がやって来た。新婚ではなさそうで、二人の様子は落ちついている。そんな二人をキャストは二人用の席に案内し、いつものように注文をとった。

二人は、それぞれが食べるのであろう料理を注文した。キャストがいつものように注文をとったときのことだった。女性のほうが申し訳なさそうな弱い声で話しかけてきた。

「それと……お子さまランチをください。」

キャストは困惑した。

東京ディズニーランドのマニュアルでは、お子さまランチは、九歳未満の子ども以外には出せないことになっていた。

そう言われて、若い夫婦はさみしげな顔で、たがいを見つめ合っていた。

キャストは悩んでしまった。わずかな時間にいろいろ考えたあと、キャストは勇気を出して二人に聞いた。

「失礼ですが、どちら様がお子さまランチを召し上がるのでしょうか。」

「今日は、昨年亡くなった娘の誕生日なんです。体が弱かったせいで、娘は最初の誕生日を迎えることができませんでした。おなかの中にいるときに、主人と三人で、ここのお子さまランチを食べに行こうねって約束していたのに、それも果たせませんでした……。それで、今日は、娘にお子さまランチを頼んであげたくて、このお店に来ました。」

この話を聞いて、キャストはことばを詰まらせた。窓の外では、楽しそうに親子三人で歩く家族の姿が見える。

キャストは迷った末、いつもの笑顔で声を掛けた。

「どうぞ、こちらのテーブルへ移動してください。」

と、二人を別の席に案内した。大人四人が座れるテーブルだ。そして、その一つのイスを子ども用のイスに取り替えた。

まもなく、この夫婦のための料理とお子さまランチが二人に出された。

「どうぞ、ご家族でごゆっくりとお楽しみください。」

キャストはそう言って、テーブルをあとにした。

このキャストの行動は、マニュアルに違反している。

しかし、それをとがめたキャストも上司もいなかった。それどころか、この話を仲間にしたところ、誰もがそれに協力して、快くお子さまランチを出してくれた。

このキャストの行為は、他のキャストにも「こんなよいことをした仲間がいた」と伝えられ、たたえられた。

数日後、若い夫婦から感謝の手紙が届いた。

東京ディズニーランドは、それを社内報でキャスト全員に知らせるだけではなく、その手紙も掲示した。

このキャストが九歳以上のゲストにお子さまランチを出したのは、あの一回だけである。

次号は 12 月 2 日(月)に発行します。主な内容は「寛容の心」「謙虚」です。

優れた道徳心は習慣からしか生まれない。私たちは、自分でつくった習慣のようにしかならない。　アリストテレス(哲学者)

沼田中学校道徳通信　Vol.42
（平成 25 年度第 18 号）

道徳教育の内容項目：それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心をもち謙虚に他に学ぶ　　2-(5)「寛容の心」

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪
平成25年１２月　２日(月)発行

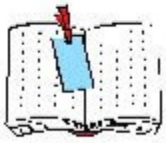
「関係ない」ということば

三浦 綾子

今も、はやっているだろうか。ひところ、しきりに、「関係ない」ということばがはやったのを覚えている。このことばは、わたしのきらいなことばの一つである。こんなざらざらした冷酷なことばをしきりに使う人は、体内を流れる血も、氷のように冷たいのではないかと、わたしは思う。大げさにいえば、この世のどんな人間も、自分とは全く無関係だとは、言い得ないのではないだろうか。

わたしが小学校のときに読んで、忘れられない話がある。

――ある金持ちの娘が、汽車の中でバナナを食べていた。そしてその腐ったバナナを、食べられないからといって、窓からひょいと投げてしまった。そこに、ある貧しい子どもが通りかかって、そのバナナを拾って食べたのである。ところがその子はおなかをこわし、熱を出してしまった。



その夜、金持ちの娘の父親の工場が全焼した。夜警の男が、その夜に限って、夜警を怠ったのだ。それは、わが子が、拾ったバナナを食べたため、熱を出したからである。――

たぶんこんな筋だったと思うが、少女のわたしはこれを読んで、人間の世界というものは、自分の思っているよりも密接なつながりのあることを思って、非常に恐れを感じたものである。

この話は、少年少女向きに書かれているので、因果関係がはっきりしているが、わたしたちは日常生活において、案外これに似た深いかかわりを、ほかの人と持ち合わせているのではないだろうか。

日本中のどの新聞にも、毎日、必ずといってもよいほど出ているのは、交通事故の記事ではないだろうか。交通事故にはいろいろな原因もあるであろう。ある朝、ふとしたことから妻とけんかをした運転手が、カッと頭にきて自動車をふっ飛ばす。そして、あっと急ブレーキをかけたときには、すでに幼い子どもの命を奪っていたという例など、たぶん数えきれないほど多いことだろう。

それまでは、まったく見ず知らずの人間であった、どこかの幼い子どもが、これまた見ず知らずの男のために命を奪われる。命を生んでくれる親との関係が深いように、命を奪い、奪われたという関係はまた、取り返すことのできないほど、恐ろしい密接な関係である。幼児を奪われた親にとって、憎んでも憎みきれない相手が、突如として出現するのだ。

こう考えてみただけでも、わたしたちは、あいつには関係がないとか、こいつには用がないとは、けっして言えないのではないだろうか。

今年、わたしたち夫婦は、台湾から招かれて、三週間にわたる講演旅行が予定されていた。台湾では、このわたしの講演会のために、各地から集まって、準備会議を開いていた。

ところが、二月に入って、父が危篤状態になった。このために、わたしは台湾行きを断念せざるを得なかった。台湾には、再び行く機会も与えられることだろう。しかし、父の死は、娘にとって、生涯にただ一度限りのことである。台湾の人々には、まことに申し訳のないことだったが、わたしは父をおいて日本を離れる勇気はなかった。

こうして台湾行きを中止したわたしたちの所に、ある人が、深刻な悩みをかかえて相談に来た。わたしたち夫婦は、深い同情をもってその話を聞き、できうる限りの助言をした。その人はやっと己を取り戻し、自分の進むべき方向を見いだすことができた。そして言った。

「もし、あなたがたが相談にのっていただけなかったら、わたしは子ども二人を車に乗せて、共に、山の崖から谷底に飛び込むつもりでした。」

わたしは、背筋の寒くなるのを覚えた。父がもし元気であったなら、わたしたちは台湾に行っていた時期である。わたしたちが台湾に行っていたなら、この人は必ずや、自動車もろとも、二人の子どもとともに、谷底に転落していたにちがいない。

ここでまた、わたしは人間と人間との、深いかかわりを身にしみて感じたのである。この人と、わたしの父は、一、二度ことばをかわしたにすぎない間柄である。この人から見ると、一人の老人にすぎないわたしの父の病気は、自分とはなんの関係もないものに思われたかもしれない。しかし、わたしの父の危篤が、その人たち三人の命を救ったともいえるのである。

そのときわたしは、しみじみと思った。けっしてわたしたちは、「だれの世話にもならずに生きている」とか、「だれにも迷惑をかけたことがない。」とか、あるいは、「自分一人で生きてきた。」などと、大きな口はきけないものだと、思わずにいられなかった。だれに対しても、頭を下げたくなるほど、謙遜な思いで生きなければならないものだ、と。

※謙遜（けんそん：へりくだって控えめにすること）

※出典　日本文教出版「新版　中学校道徳教育　あすを生きる３」

次号は 12 月 24 日（火）に発行します。主な内容は「自主・自立」「誠実・責任」です。

今の私は、これまでに出会ったものすべての賜物である　　日野原重明（聖路加国際病院院長）

沼田中学校道徳通信　Vol.43
（平成 25 年度第 19 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 25 年１２月２４日（火）発行

12月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 認め合い学び合う心を　～個性や立場を尊重して他の人から学ぶ姿勢をはぐくむ～
② 不正を許さぬ社会をつくるために　～公正・公平で差別や偏見のない社会の実現を目指す～
③ 異性を理解し尊重して　～異性を正しく理解して相手の人格を尊重する～
④ 仲間がいてキラリと光る自分がいる　～役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める～
⑤ 世界に思いをはせよう　～他の国の人々や異なる文化を理解し世界平和の実現を目指す～

①12/1　②2～8日　③9～15日　④16～22日　⑤23～24日

道徳教育の内容項目：自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ　1-(3)

最近の若者は優しさや思いやりの心が欠けていると、耳にすることがあります。果たして本当でしょうか。

次に、『豊かな心を育てる講話集』「悠」（ぎょうせい）の 1991 年 6 月号より、「自立をたすけた手紙」という資料を紹介します。資料に登場するＡ子さんは、友人との人間関係に苦しみ、唯一の親友も突然の転校で失うなど、孤独と孤立化に悩んだそうです。この手紙はＡ子さんに宛てて同じクラスのＢ君が送ったものです。一見、乱暴とも思える言葉遣いの裏側にある、人間性あふれる思いを感じます。いじめ防止強化月間を振り返りながら読んでみてください。

――おい、学校へこいよな！
家で何やってっかわかんねーけど、家より学校のほうがおもしれーソ。
てめー、はまってんのは、よくわかる。
小学校のとき、おれは、いまのおめーより、すーと百倍もはまってたんだ……わかる？　家でないてたんだソ。
友だちができなくて、何だかしんねーけどあるとき学校でうんこしたらよ、いやなやつがいて、おれのこと、はめやがって、ふけつむしとか言いだしたやつがいて、うんこのふけつむしとか、その日からあだなになっちまったんだ。
ほんとだよ！　はじめはなんとも思ってなかったんだ。だけど、一日、一週間、一か月がすぎていくとさ、みんなから、てめーきたねーからよるなよ、とか、小学校のとき、ゲームがはやって、やらしてくれって言ったんだ。そうしたら「てめーきたねーえからやらせなーい。」と言われたんだ。かなしかったん――そのことより、いろいろとはまってさー、ついには先生(に)までごかいされて、家でないてたんだ。
まーあ　いまのおれとはくらべものにならないけどね！
でも、おれは　くよくよしなかったぜ。
家で少しないだけどよー。でも、いつかはぜったい　いい日がくると思っていっしょうけんめい　人の言うこときいたり、わらわしたりして少しずつかなしかったことをぶっとばしていったんだ。そうしていまのようになっていったってわけ。
いまのおれは、けっこう毎日おもしれーソ。おまえは、いまはまっていると思っているかもしれねーけど、てめーはてめーでいいところがあるはずだ。だからそこをうまくいかしていけばいい！
一つちゅういするが、へんにわらうくせはやめろ！　これはまずいソ。まずこいつをなおしていこう。
ん－　よけいなおせわだったかな？　はっきり言って　おめーは、おれよりあたまはいいんだぜ。だからべつにもんだいはないソ。
まーあ　これをよんでくれ。
一つ、自分でくるしむことはなし。人と　ともに　げんきにすごす。
一つ、はまるようなものごとはするな。また、しないようにする。
一つ、自分は　ぜったい　いつかは、よい日がくると思って　毎日をげんきにすごす。
一つ、人の口は刃となる(と　先生が言ってた)また、はりともなる。　人がなにを言っても、自分で自分をしかって、気にはするな。また、どりょくする。
一つ、自分がはまったと思っても、はまっていないかもしれん。だから、そのときは人にでもきく。天しる地しる。だれかはきっとどこかで見てくれている。だから、それはたぶん母か父だろう。おうえんしてくれる人がいるのなら、自分をそのおうえんにかけてみろ、けっかはどうであれ、まず　やってみる！
学校へこい。
おまえがこのてがみをよんで、学校へくるといいなと思っとる。
おれは、てめーが学校へきても、前のおれとはぜったいかわらんソ。
ほんとうの自分をよび出せ。自分をたたきおこして　いまから自分をかえろ。
一人で物かかえこんだってしょうがねーソ。
学校へきましょう。学校へきましょう。

Ａ子さんはどんなに励まされ、元気が出たか想像がついたと思います。Ａ子さんの母親は「この手紙は、わが家の宝物です」と言いました。この手紙で、Ａ子さんは立ち直り、自立が始まったそうです。

次号は１月８日（水）に発行します。主な内容は「向上心」「個性の伸長」です。

今までに、やって失敗したこと、駄目だったことは山ほどあるが、やらないほうがよかったということは一度もない。　榎本明（俳優）

沼田中学校道徳通信　Vol.44
（平成 25 年度第 20 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 26 年　1 月　8 日（水）発行

1 月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 理想をもって前向きに生きよう　～真理・真実・理想を求め自分の人生を切り拓く～
② 比べてみよう　きのうの自分と　～自分のよさを見つめ個性を伸ばしていく～
③ 温かい人間愛につつまれて　～思いやりの心をもつ～
④ 良心の声を聞こう　～人間として誇りをもって生きていく喜びを味わう～

①1/8～12日　②13～19日　③20～26日　④27～31日

道徳教育の内容項目：自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、
個性を伸ばして充実した生き方を追求する　1-(5)

トマトとメロン　　相田みつを

トマトにねえ
いくら肥料やったってさ
メロンにはならねんだなあ

トマトとね
メロンをね
いくら比べたってしょうがねんだなあ

トマトより
メロンのほうが高級だ
なんて思っているのは
人間だけだね
それもね
欲のふかい人間だけだな

トマトもね　メロンもね
当事者同士は
比べも競争もしてねんだな
トマトはトマトのいのちを
精一杯生きているだけ
メロンはメロンのいのちを
いのちいっぱいに
生きているだけ

トマトもメロンも
それぞれに　自分のいのちを
百点満点に生きているんだよ

トマトとメロンをね
二つ並べて比べたり
競争させたりしているのは
そろばん片手の人間だけ
当事者にしてみれば
いいめいわくのこと

「メロンになれ　メロンになれ
カッコいいメロンになれ!!
金のいっぱいできる　メロンになれ!!」
と　尻ひっぱたかれて
ノイローゼになったり
やけのやんぱちで
暴れたりしているトマトが
いっぱいいるんじゃないかなあ

新しい１年が始まりました。今年もよろしくお願いします。新年のスタート号は「向上心」についての特集です。

はじめに紹介する「トマトとメロン」という詩は、相田みつをさんの『にんげんだもの』（文化出版局）に掲載されています。相田さんは、どんなことでも人と比べるということを嫌っていたそうです。それは、人と比較している限り、心の安定は得られないと考えていたからだと思います。では、「それぞれに自分のいのちを百点満点に生きる」ためにはどうしたらよいのでしょうか。一緒に考えていきましょう。

ありのままの自分

渡辺和子
『目に見えないけれど大切なもの』（PHP）

私たちは誰しも、「ありのままの自分」と、「見てもらいたい自分」の、二人の自分を持って生きている。

「ありのままの自分」は有機体だから、病気もすれば年もとる、感情が高ぶることもあれば落ちこむこともある自分だ。ところが他人にそういう自分を見せたくなくて、「見てほしい自分」を演技するところに無理が生じ、不自由になってしまう。

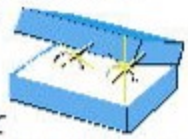
「ありのままの自分」と、「ありもしない自分」との間のギャップが大きければ大きいほど、隠すものが多くて疲れは激しい。絶えずそれらしく見せかけ、ボロが出ないよう気を使わないといけないからだ。それはちょうど、着なれないよそゆきの着物を一日中着ていて、家に戻って脱いだ時に感じる疲れのようなものである。

そんなに苦労してまで、どうして「ありもしない自分」を保とうとするのかといえば、たぶん、そういう自分でないと他人が相手にしてくれない、他人に好かれないという恐れがあるからではなかろうか。デートの時に、念入りに化粧し、相手の気に入るように振る舞おうとする心理に似ている。

このような「見せかけの自分」から自由にしてくれるのは、自分を、ありのままの姿で愛してくれる人との出合いである。「ふだん着のあなた、素顔のあなたでいいのです。それが好きなのです。」という人に出合って、初めて、よそゆきの装いとその窮屈さから自由になり、人は本来の自分の姿を見つめる勇気を与えられるのだ。

若い時、劣等感を強く持っていて、自分をよく見せよう見せようとしていた私に、「あなたは、そのままで宝石だ。」と言ってくれた人がいた。人間の価値は、他人と比べてのそれではなく、かけがえのない一人としての不動のものであることに気づかせてくれた人だった。

この言葉を聞いてからというもの、“どうでもいい自分”が“どうでもよくない自分”に変わったから不思議である。



それまで、自分は単なる石ころに過ぎないと思っていた私は、その人の期待を裏切るまい、と思った。そのために私は、宝石になろうと努力し始めた。大切なのは宝石に見せかけることではなくて、宝石になる努力を惜しまないことだと知ったのだった。

次号の発行は１月 20 日（月）。内容は「感謝」を予定。

成功する人間になろうとせず、むしろ価値ある人間になろうとしなさい。　　アインシュタイン（物理学者）

沼田中学校道徳通信　Vol.45
（平成 25 年度第 21 号）

道徳教育の内容項目：多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる　2-(6)

心の鍵

「感謝」や「部活動」についてヒントとなるエピソードの紹介です。競技成績のみならず、人間としての成長を大切にした毎日をつくっていきましょう。

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪
平成26年　1月20日(月)発行

正進社『キラリ☆道徳２』より
文：永井浩二

冬がやってくるたびに、私は、自分を成長させてくれたできごとについて思い出す。それは苦い経験だが、私の人生を変えるきっかけになったできごとだ。

私は大学時代、スキーのジャンプ競技に打ち込んでいた。「スキージャンプ」というと冬場のみに行われるイメージがあるが、冬だけではなく、体力づくりなどを行いながら、年間を通して取り組まなければならないスポーツなのである。私は一年生のころから、情熱のすべてをスキージャンプに費やしていた。そうした日々の努力が実って、全国大会のような大きな大会でも良い成績を残せるようになり、学年が上がるにつれて、さらに上位に入賞することも増えていった。

そうして技術が上達するのに比例して、私の自信も大きくなっていった。「自分こそが一番なんだ！」という気持ちはどんどん大きくなり、スキー部の仲間も含め、まわりの選手は全員ライバルだと思って競技にのぞんでいた。自分がチームのエースであるという自信から、競技以外の場面でも考え方はいつも自己中心的で、まわりにいる人の気持ちなど考えたことはなかった。

だが、学生生活最後の年に転機が訪れた。

日本で開催される国際大会の代表選手になるチャンスを得たのだ。私は「なんとしても代表になりたい。」という思いから、それまでにも増して一生懸命練習した。同時に、まわりの選手のことをいっそうライバル視し、自分の記録ばかりを考えるようになっていった。

代表選考会は一次予選から始まり、二次、三次と進み、ライバルたちはどんどん姿を消していった。私は順調に勝ち進み、最終選考会まで残ることができた。残った選手は十人。その中から三人が国際大会に出場できるのだった。「ここまできたら、絶対に大会に出たい。」私はそう思った。しかし、ついに迎えた最終選考の日、私の調子は良くなかった。そのため、他の選手がジャンプする時、私はなんとしても勝ちたい一心で、「ミスしろ！」と、心の中で何度も叫んだ。ところが、結果は十人中五位。代表になることはできなかった。「これだけ練習したのに……。」と、それまでの努力を振り返り、悔しくてたまらなかった。

悔しさをおさえて宿舎に帰り、荷物の整理をしながら、私は自分と選ばれた選手との違いを考えた。スキーの技術・ジャンプのタイミング・空中姿勢や着地……、いろいろなことを比べてみたが、どれも決定的な違いは見当たらなかった。なかなか答えが見つからないまま、宿舎の中を行き来している時、私はある光景を目にした。一位に選ばれた選手が部屋のトイレを掃除していたのだ。私ははっとした。合宿や大会が終わり、宿舎を出る時、彼がそうしている光景を、今まで何度も見てきた。それだけではない。彼は食事が終わると、食器洗いや机ふきなど、食堂の方の手伝いもよくやっていた。そのたびに、彼は「いつもありがとうございます。」という言葉を口にしていたことを、思い出したのだ。

それまでの私は、「自分こそが一番だ！」ということばかりを考えていた。まわりの人を見る時は、いつもどちらが上か下かという目でしか見たことはなかった。宿舎でも、手伝いをしたことなどもちろんない。それに比べ、彼は、私も含めライバルになりそうな選手へも気さくに声をかけ、惜しげもなくアドバイスをしていた。誰かが長い距離を跳べた時は「ナイスジャンプ！」と、一緒に喜んでいた。雪が降る日は、ぬれないように雪を払ってくれるリフトの従業員の方たちへ「お願いします」「いつもありがとうございます。」と声をかけていたのである。私はといえば、従業員の方が雪を払ってくれるのは当たり前のことだと思い、感謝の言葉を述べたことは一度もなかった。比べれば比べるほど情けない気持ちになった。

そして、次の瞬間、そこが自分と彼との違いなのだと気がついた。私は技術以前に、彼に心で負けていたのである。勝てなくて当然だった。悔しかったが、なぜか心に清々しい風が通ってゆくような気がした。自分を支えてくれる多くの方への感謝の気持ち。

私はこの選考会を通して、自分に足りないものが何なのか気づかされた。大学の四年間で、競技の成績は確かに向上していたが、それ以上に大切なものを見失っていたのだと思うと、涙がこみ上げてきた。

それから私は、スキーだけでなく生活のあらゆる場面で、競技と同じように、他人への感謝の気持ちを大切にしようと心がけた。練習を大切にするのと同じように、「ありがとう」や「おかげさま」という言葉を大切にするようになった。すると、不思議と成績も伸びていった。

私は大学を卒業した後も、社会人として競技を続けた。あの選考会から数年後、地元で開催された小さなスキージャンプの大会で、ライバルたちに心から「がんばれ！」「ナイスジャンプ！」と大声で声援を送る私がいた。

※今秋、群馬県教育委員会から発刊される道徳の郷土資料集に、「感謝」のテーマで沼田公園（久米民之助）が紹介される予定です。別刷りの読み物資料もご覧ください。次号の発行は２月３日（月）。内容は「礼儀・あいさつ・マナー」です。

いいことは　おかげさま　わるいことは　身から出たさび　　相田みつを（詩人・書家）

沼田中学校道徳通信　Vol.46
（平成 25 年度第 22 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 26 年　2 月　3 日(月)発行

2 月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 良心の声を聞こう　～人間として誇りをもって生きていく喜びを味わう～
② 異性を理解し尊重して　～異性を正しく理解して相手の人格を尊重する～
③ この国を愛しこの国に生きる　～日本を愛し優れた伝統の継承と新しい文化を創造する～
④ つながり合う社会は住みよい
～よりよい社会の実現のために公徳心・社会連帯の自覚を高める～
⑤ 認め合い学び合う心を　～個性や立場を尊重して他の人から学ぶ姿勢をはぐくむ～
①2/1～2日　②3～9日　③10～16日　④17～23日　⑤24～28日

道徳の特別教科化や「心のノート」改訂など、道徳教育が大きな注目を集める中、2013 年 12 月 5 日、扶桑社から『はじめての道徳教科書』という本が発行されました。稲森和夫さん(京セラ名誉会長)や鍵山秀三郎さん(日本を美しくする会相談役)、野口健さん(アルピニスト)らが参加する「道徳教育をすすめる有識者の会」が編者となり、小学生から読める偉人や実話、名作などが集められました。そこで、今号では幸田文さんがお書きになった「礼儀」に関するエピソードを紹介します。テーマは、今年度の沼中が力を入れて取り組んできた「挨拶」です。

道徳教育の内容項目：礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる　2-(1)

挨拶は苦手である

～時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接しましょう～

挨拶は苦手である。ちゃんとうまく言えたなどという記憶は一つもない。そのかわりといってはへんだが、まずい挨拶をしてしまって、そのあと自分で自分が嫌になるような思いをした記憶なら、いくつも、しかと身にこたえた覚えがある。

と、いうようなわけだけれど、これでも幼いころ、親たちはわたくしたちをほったらかしにしていたのではなく、ひと通りは挨拶も家庭教育として、教えてくれたのである。

朝晩の、おはようございます、おやすみなさい、食事のいただきます、ごちそうさま。出はいりのいってまいります、ただいま。

これは今も昔もおなじことと思うが、昔は今より多少きびしく習慣付けられていたとおもう。この挨拶が一家の会話の基礎になるのだ、といった考えによるものであり、また、もののけじめをきちんとさせることだ、ともきかされた。だからこの挨拶をなおざりにすると、うちの中の話がだんだんに通じなくなるおそれがあり、同時にうちの中の秩序が失せ、乱れが生じる傾向になるといって、きびしく叱られた。もちろん、子どもにそんなことはよくわからないのだが、わからぬなりにいうことはきいたのである。

ついでよその人への挨拶、こんにちは、こんばんは、ごきげんよう、さようならなど。

ここでことばだけではいけない、からだも挨拶のうちだといって、お辞儀を習わせられる。するとその次は、親類へおつかいにやらされた。口上、というのを口うつしに習っておぼえて行き、先へつくと声をはりあげてそれをいうのである。

たとえば「これは昨日、京都から到来いたしました松茸でございます。まことに香りばかり、ほんの少々でございますが、お勝手もとの御料におつかいくださいませば、うれしゅうございます」といったような挨拶である。

毎日つかうことばとはちがって、へんにギシャ張った(堅苦しい)いい方だがら、おぼえにくいし、言うにもテレくさくて気がさすし、子どもにとっては大迷惑なのだが、親のほうはむずかしい顔をして、親の慈悲で教えてやるのだから、文句をいうひまに早くおぼえてしまえ、というのだから仕方がない。

祖母の前へ、持ってきた包みをさし出し、手をついて、バカ声だして明瞭に口上をのべ、平たくなってお辞儀をしたのは、何度だろう。おばあさんはわたくしが区切り区切りいう、その区切りのところで一々、はいはいとか、ふむ、うむとかこたえて、ずっとおしまいまで聞き通しておいて、ほめたり、直したり、かならずあとで批評してくれた。

でも、これだけではお使いの役はすまない。行った分だけの片道だからだ。今度はおばあさんからの挨拶を、うちへ告げなければならない。ところがおばあさんの返事が難物で、お口上調(他人の前で、かしこまって挨拶をするときの調子)のところと、ありがとよ、よろしくいっておくれ式のところと、まぜまぜになる。止むを得ない、使いはいわれた通りに暗誦するのだと、教えられているから、「ありがとよ、とおっしゃいました」という。子ども心にも気をつかったものである。

そのうち口上も棒暗記の一本調子がとれてやわらかくいえるようになると、よそのお宅へ使いにだされる。借りた本を返しに、用事の申送りに、盆暮れの贈答に、等々。そのあいだに、近火見舞(知り合いなどの家の近くに火事があったとき、大丈夫かと心配して訪ねること。またそのときに持っていくもの)にはお騒々しいことでといい、悼みの挨拶は、短いことばをいそがずにいい、喜びごとの挨拶は大きめの声ではっきりいい、老人の機嫌うかがいに行ったら、帰りぎわに何度も、どうぞお大事に、くれぐれもお大切にとしつこくいわぬこと、そんな挨拶はかえって老人を不安にする、ことなどをときにしたがって教えてくれる。つまりかたというか、見本というか、要するに常識を教えられたのである。

こういう家庭教育はわたくしの家だけではなく、教え方に硬軟の差こそあれ、商家職人みなおなじだったようである。当時の親たちは辛抱強く、面倒見がよかったものである。

次号の発行は 2 月 26 日(水)。内容は「生きる喜び」を予定しています。

いかなるときでも　おじぎはし足りないよりも　し過ぎたほうがよい　　トルストイ(小説家)

沼田中学校道徳通信　Vol.47
（平成 25 年度第 23 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪
平成 26 年　2 月 2 6 日（水）発行

人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、
人間として生きることに喜びを見いだすように努める　3-(3)

道徳の副読本『キラリ☆道徳①』（正進社）より、有名な音楽家であるベートーヴェンの苦悩に焦点を当てた資料（一部抜粋したもの）を紹介します。難聴（音や声がうまく聞き取れない状態）に悩まされ、両耳とも聞き取りにくくなってしまったベートーヴェンが、苦しみを乗り越え、より人間らしい人間、自ら肯定できる人間になりたいと生きる姿勢から、考え、学びましょう。

「運命」を乗り越える

1770 年のドイツで、ベートーヴェンは祖父の代から続く音楽家の家庭に生まれました。父親は宮廷歌手をしていましたが、大酒飲みであるうえに、喉をわずらっていたこともあって、一家の暮らしは貧しいものでした。父親はベートーヴェンを有名な音楽家に育てようと考え、幼い頃からピアノの練習をさせました。それは、酔っ払って帰ってきても、息子を叩き起こして夜明けまで練習させたり、上手に弾けないと地下室に閉じ込めたりするほど、熱が入っていたそうです。

厳しい教育を受けたベートーヴェンは、よい先生との巡り会いもあり、音楽の才能を開花させました。そして、13 歳の時には宮廷で演奏するようになり、音楽家として一家を支え始めました。しかし、彼の稼ぎはすぐに父親の酒代に消え、母を亡くした後は弟の世話もしなければならず、貧しく辛い日々が続きました。

22 際の時に父親が亡くなると、ベートーヴェンはようやく音楽家としての成功をつかみ始めます。音楽の都ウィーンで演奏会を行い、ピアノの名人としての評判はしだいに高まっていきました。

そんな矢先、今度は難聴という苦難に襲われるようになります。はじめは左耳がざわざわして、それは右耳にも移り、ついには両方とも聞き取りにくくなりました。人と話していても、声は聞こえるのに言葉がわからないということが多くなり、大きな音も聞きづらくなってしまったのです。音楽家の生命線である聴力が衰えることは、ベートーヴェンにとって耐えがたいものでした。音を聞き取れないことが周囲に漏れることを怖れ、人に会うことを避けるようになり、田舎でひっそりと暮らすことを決意しました。

そして、この病気が少しでもよくなることを願って医者に通い、さまざまな治療を受けました。しかし、難聴の症状はひどくなるばかりで、よくなることはありませんでした。もはやこの苦しみから逃れることは難しいと悟ったベートーヴェンは、32 歳の時、弟に宛てて手紙を書きました。この手紙（右の資料）は、彼の死後に机の中から発見され、「ハイリゲンシュタットの遺書」と呼ばれています。

絶望的な苦しみを告白したこの手紙を書き記した後に、ベートーヴェンは数年かけて交響曲第五番を作曲しました。この曲の冒頭の「ダダダダーン」に関して、ベートーヴェン自身が「運命はこのようにして扉を叩く」と言ったことから、「運命」と呼ばれています。

ベートーヴェンは 1827 年、56 歳の若さでこの世を去りましたが、最後まで音楽への情熱を失いませんでした。たくさんの素晴らしい曲は、今もなお、多くの人々を喜ばせ続け、オーストリアで行われた葬儀には、ベートーヴェンとその音楽を愛する人々が２万人以上も集まり、彼を見送ったそうです。

> 私は世間から意地悪で人嫌いのように思われているが、それは私の耳の病のせいであったことを伝えておきたい。情熱に満ちた快活な性格で、人と交わることの楽しみを知っているこの私が、若いうちから人々を避け、孤独に生きなければならなくなった。耳が聞こえないことに苦しみ、入りたい世界に入れないことがどんなに辛いことか。「もっと大きな声で叫んでください。私は耳が聞こえないのです。」などと、私にはとても言えない。私にとって他の人よりももっと完全であるべき感覚、かつては完璧な形で持っていた。音楽家のなかでも数少ない人にしか恵まれないその感覚が衰えているなどと、人に言えるわけがないのだ。私はそのために引きこもり、誤解され、二重の苦しみを味わっている。友人との気晴らし、意見の交換など、私にはもう許されない。人の輪に近づくと、自分の病を悟られてしまうのではないかという不安が私を襲い、もはや逃れられない。（中略）
>
> 私はもう一歩のところで自らの命を絶つところだった。私を引き止めたのは「芸術」である。私は私の使命である仕事を成し遂げないで、この世を見捨ててはならないように思えたのだ。そのために、このみじめな命を引き延ばして生きてきた。
>
> 忍耐！　それだ、今、私の導き手となるものは。私はそれをこの手に選ぶ。無慈悲な死神が私の命を断ち切ろうとするまで、その決心が持ちこたえることを願う。うまく行くかもしれない。行かないかもしれない。しかし、私には覚悟がある。　（中略）
>
> 不幸を背負う人々よ、同じようなひとりの人間が、尊敬すべき芸術家になろうとして、あらゆる困難とたたかい、最善を尽くしたことを知ってほしい。（後略）
>
> L.Vベートーヴェン

次号の発行は３月３日（月）。内容は「郷土愛」を予定しています。

人間の寿命というのはね、あなたが使える時間のこと。　日野原重明（医師）

沼田中学校道徳通信　Vol.48
（平成 25 年度第 24 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 26 年　3 月　3 日（月）発行

道徳教育の内容項目　4-(8)

3 月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 認め合い学び合う心を　～個性や立場を尊重して他の人から学ぶ姿勢をはぐくむ～
② 理想をもって前向きに生きよう　～真理・真実・理想を求め自分の人生を切り拓く～
③ 自分の学校・仲間に誇りをもって　～学校を愛しよりよい校風をつくる～
④ 自然のすばらしさに感動できる人でありたい
　～自然や美を愛し人間の力を超えたものへの畏敬の念を深める～
⑤ 比べてみよう　きのうの自分と　～自分のよさを見つめ個性を伸ばしていく～

①3/1～2日　②3～9日　③10～16日　④17～23日　⑤24～26日

地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土に発展に努める

いじめ防止子ども会議（プレ会議を含む）、入学説明会、生徒総会などにおいて、生徒会本部役員や専門委員長、部活動の部長といった２年生を中心とする新しいリーダーの活躍にめざましいものがありました。そこで、広島県教育委員会作成の『心に響く道徳学習教材集』より、生徒会活動を中心に郷土愛を育てるエピソードを紹介します。

わがふるさとを守る生徒会

私たちの生徒会では、島の自然をいつまでもきれいな状態にして守りたいと、いつも真剣に考えています。私たちの先輩たちは、行楽シーズンのあとには、「自分たちの島を自分たちの手できれいにしよう。」というスローガンのもとで、毎年清掃活動を続けてきました。今年も夏のシーズンを前に、いろいろと相談を重ねました。その結果、例年の行楽シーズン後に行う清掃活動だけでなく、シーズンを迎える前に、ゴミや空き瓶、空き缶の持ち帰りを呼びかける立て札やポスターをつくり、多くの人に美しい自然を楽しんでもらおうという意見が出され、生徒総会でもこのことを決めました。

学級ごとに作業を分担して、立て札やポスターを作成しました。行楽客が多く訪れそうなところを中心に立て札を立てたり、ポスターを掲示してまわりました。設置し終えたときには、心がはればれとして、訪れてくるたくさんの人たちがゴミを持ち帰ってくれて、島の自然を楽しんで帰ってほしいという気持ちでいっぱいになりました。

今年の夏も非常にたくさんの人たちが島を訪れました。

やがて、40日間の長い夏休みが終わって、私たちは元気に登校しました。

生徒会では、２学期が始まるとすぐに、例年のように清掃活動を行いました。

ところがどうでしょう。私たちがあれほど期待して設置した立て札やポスターであったのですが、空き瓶や空き缶などが散乱している様子に、みんなぼうぜんとなりました。

立て札を設置したところを回ってみると、なくなっているところや、中にはキャンパーのたき火跡と思われる場所で、燃やされて悲しい姿になったものもありました。

ポスターの中にも、破れて剥がれているものや落書きされたものがありました。

さっそく、今回の取り組みについて生徒会の代表委員会で話し合いました。行楽客やキャンパーたちの行動が信用できない、公共道徳を守る気持ちが薄いなどの意見がたくさん出て、いずれもやり場のない怒りの口調でなじるように出されました。どの意見ももっともだという気持ちで、お互いうなずいて聞いていました。２年生の女子の代表からは、茂みにめがけて、空き缶を投げ捨てたり、海水浴場近くの岩場で空き瓶を並べて石であてっこしていた姿が報告されました。

代表委員会の雰囲気は、だんだん１学期の生徒総会の晴れやかだったものとは対照的に、とげとげしいものになっていました。

このような投げやりになった雰囲気の中で、３年生の男子の代表から、「僕も残念で、腹が立ってしようがないのは、みなさんと同じ気持ちです。でも、ここで投げ出してしまっていいんでしょうか。もっと冷静に考えたほうがいいのではないでしょうか。」という意見が出されました。

そこで私たちは、もう一度自分たちに何ができるかを考えることにしました。

やがて、秋の行楽シーズンが近づいてきます。それに向けて、結局私たちは、また新しい気持ちになって、空き缶や空き瓶を入れる護美箱（ごみばこ）をつくって設置してみようということにしました。

また壊されるかもしれないのですが、私たちは取り組みを続けていきたいと思っています。

私たちの力は小さなものです。たとえ、小さなものであっても続けていきたい。

島には今日も美しい自然を求めて、たくさんの人が訪れています。

次号（最終号）の発行は３月 12 日（水）。内容は「理想の実現」を予定しています。

今日なしうることに全力をそそげ。　　ニュートン（科学者）

沼田中学校道徳通信　Vol.25
（平成25年度第1号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年4月　9日(火)発行

「美しい心」を磨くために…

沼田中学校では、次のような心の育成を目指し、道徳教育を展開します。

「美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性、正義感や公正さを重んじる心、生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観、他人を思いやる心や社会貢献の精神、自立心、自己抑制力、責任感、他者との共生や異なるものへの寛容などの感性及び道徳的価値を大切にする心（学習指導要領より）**」**

昨年度は、毎月２回のペースで合計24号発行した道徳通信「心の鍵」を、今年も継続いたします。不定期な発行となりますが、年間25号を予定していますので、どうぞよろしくお願いします。

初回は、掛川茶で有名な静岡県掛川市で配られているタウン誌の裏表紙に掲載されていた、ある学習塾の広告ページから、道徳を学ぶ意味や価値について紹介します。

日本人のこころ　～「美しい心」「道徳心」を育む教育を目指して～

先日、ある飲食店に行った時のことでした。どうやら、閉店間際の入店になってしまったようです。注文した料理が届きいただいていると、急に店内が薄暗くなりました。店外の照明が一斉に消された様子です。少しあわて気味に残りの料理を食べ、会計を済まし店を出ました。すると案の定、駐車場は真っ暗闇。車を探すことすら難しい状況でした。

閉店間近なのだから、あたりまえのことでしょう。店員さんも、決められた「お店のルール」に従ってやったまでのことと思います。ただし私は、すごくいやな気分になりました。足元におびえながら車に戻ったとき、「会計が済んだら、もうお客さんとして扱わないんだな」と感じてしまいました。もちろん、そんな気持ちはないと思います。でも、客である私が、そう感じたことも動かしがたい事実なのです。このお店の「もてなしの心」とは、こんな程度なのだな、と結論付けてしまったのです。

最近、日本人らしい「こころ」を感じることが、めっきり減ってきているように感じます。表面的な「権利」や「義務」、または「正しいか、正しくないか」という判断基準ばかりが重視されているように思えてなりません。日本は法治国家ですから、それらが大切であることは言うまでもありません。しかし法治国家である前に、「人間関係」があることを忘れてはなりません。人間関係において最も必要なことは、「ルール」でなくて「こころ」であるはずなのです。

「日本人のこころ」とは何でしょう。それは「奥ゆかしさ」や「奥深さ」です。「和」を大切にし、何事につけても相手を思いやり、こころを込める…。日本製の電化製品を見れば、一目瞭然わかります。あきれるくらい使う人の立場にたって作られていますよね。そこにあるのは、作り手の「こころ」。その「こころ」に私たちは惹かれてしまうのではないでしょうか。

「海を豊かにしたければ、山を育てよ」という言葉があります。森の土に栄養があれば、川によって、その栄養を含んだ土は海に流され、豊かな漁場が出来上がります。「目先」の海だけ見ていたら、決して気付かない「本質」ではないでしょうか。

「損して得を取れ。」自分が欲しい物は、相手にとっても魅力的な物です。その欲しい物を先に相手にゆずることで、実はより多くのモノが手に入るのです。それは、相手からの「感謝」であり、豊かな「こころ」や「人間性」、そしてそれらが人に伝わり幾重にもなって返ってくるモノ、それが「徳」というものです。

閉店直前に、照明を落とす。閉店なのですから、「正しいこと」です。「お客さんがさらに来てしまっては困るから」です。しかし、よく考えてみましょう。「来てくれなかったら、もっと困る」のです。その店員さんの取った行動は、少なからず私に「もう来たくないな」と思わせてしまいましたよ。なぜ、そうなってしまったのでしょう。その店員さんの行動は「正しかった」けれども、「こころ」がなかったからです。

人は「こころ」に触れると感動します。「こころ」を感じると感謝します。「こころ」にあふれた社会を、何としても作りたいのです。「こころ」を育むには「教育」しかありません。読んで聞かせ、見せて与え、植えつけて育てるしか方法はないのです。

日本人の「道徳心」は世界を変える力を持っています。

名学館掛川校「教育論」Vol.12

次号は４月17日(水)発行予定です。主な内容は「望ましい生活習慣、心身の健康の増進、調和のある生活」です。

幸も不幸もない。要は心の持ち方一つなのだ。　シェークスピア(劇作家)

沼田中学校道徳通信　Vol.26
（平成25年度第2号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　4月17日(水)発行

今月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 心もからだも元気でいよう　～望ましい生活習慣を身に付けた調和のある生活をする～
② 心もからだも元気でいよう　～望ましい生活習慣を身に付けた調和のある生活をする～
③ 心を形に表していこう　～礼儀の意義を理解しその場に応じた言動をとる～
④ 法やきまりを守る気持ちよい社会を
～法やきまりの意義を理解し社会の秩序と規律を高める～

①4/8～14日　②15～21日　③22～28日　④29～30日

道徳教育の内容項目：望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする　1-1「生活習慣」

日々の生活を健康で充実したものにするためには、望ましい生活習慣を身に付けることが大切です。また逆に、望ましい生活習慣を身に付けることによって、健康で充実した生活も可能となります。今回は、「望ましい生活習慣」について考えていきましょう。

明日を生きる意欲を支えるもの

五木寛之さんの著書『大河の一滴』において、イギリス出身のC・W・ニコルさん(小説家として来日したが、日本の自然を愛するあまり日本国籍まで取得した)が、南極かどこかへ探検に行ったときの話を紹介されていました。

南極などの極地では、長い間テントを張り、風と雪と氷の中でじっと我慢して待たなければならない時があるそうです。そんな時、どういうタイプの人間が一番辛抱強く、最後まで自分を失わずに耐え抜けたかというと、必ずしも頑健な体をもったタイプの人ではなかったようです。

南極でテント生活をしていると、どうしても人間は無精になるし、そういうところでは体裁をかまう必要がないから、身だしなみなどということはほとんど考えなくてもいいわけです。にもかかわらず、なかには、きちんと朝起きると顔を洗ってひげを剃り、一応、服装をととのえて髪もなでつけ、顔をあわせると「おはよう」とあいさつし、物を食べるときには「いただきます」と言う人もいる。こういう社会的なマナーを身につけた人が意外にしぶとく強く、厳しい生活環境のなかで最後まで弱音を吐かなかった、というわけです。これはおもしろい話だと思います。

礼儀、身だしなみ、こういうことは極限状態のなかでは最後に考えるような気がします。しかし実際には、そういうなかで顔をあわせたときにきちんと「おはよう」とあいさつのできるような人、「ありがとう」と言えるような人、あるいは朝、ほんのわずかな水で顔を洗い、ひげも剃って、それなりに服装をととのえ、そして他人と礼儀を忘れずに接するという、小さなときからの自分の生活態度をずっと守りつづけたようなタイプの人のほうが、むくつけき(むさ苦しい)頑強な熊のような大男よりも、かえって最後までがんばり抜いて弱音を吐くことがなかった、という。

同じようなことが、第二次世界大戦中のアウシュヴィッツ強制収容所(ナチス・ドイツがユダヤ人を連行し、残虐な殺戮(さつりく)が行われた)でも言えるそうです。五木さんは、フランクルという人の『夜と霧』という著書をもとに、なぜ地獄のような生活から奇跡の生還を遂げたのかを、印象的なエピソードで紹介しています。

精神科医だったフランクルは、人間がこの極限状態のなかを耐えて最後まで生き抜いていくためには、感動することが大事、喜怒哀楽の人間的な感情が大切だと、考えるのです。無感動のあとにくるのは死のみである。そして自分の親しい友達と相談し、なにか毎日ひとつずつおもしろい話、ユーモラスな話をつくりあげ、お互いにそれを披露しあって笑おうじゃないか、と決めるのです。

あすをも知れない極限状態のなかで笑い話をつくって、お互いに笑いあうなんていうことになんの意味があるのか、と思われそうですけれども、そうではないのです。あすの命さえも知れないような強制収容所の生活のなかでユーモアのあるジョークを一生懸命に考え、お互いに披露しあって、栄養失調の体で、うふ、ふ、ふ、と、力なく笑う。

こういうことをノルマのように決めて毎日実行したというのですが、むしろそういうことも、ひょっとしたらフランクルが奇跡の生還を遂げる上での大事な役割を果たしていたのではないか、と思います。

また、風景というものに対して、非常に強い感受性の人間もいたようです。

強制労働のなかで水たまりに映った冬の枯れ枝の風景を眺めて、あ、レンブラントの絵のようだ、なんていうことを考えたりする人がいる。こういう感じかたをする人のほうがじつは強制収容所の非人間的な生活のなかでは、むしろ強く、生き延びることができたのです。

人間は、健康や体力だけで厳しい条件に耐えられるのではなく、「心の在り方」が支えになるのかもしれません。

次号は4月26日(金)発行予定です。「法やきまり」「社会の秩序」などについて考えましょう。

自分を励ますためにもユーモアの習慣は忘れたくない。　高見澤たか子(作家)

沼田中学校道徳通信　Vol.27
（平成25年度第3号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　4月26日(金)発行

4月を振り返って

新しいメンバー、新しいクラスで、よりよい人間関係を築き、集団生活を向上させようと、「生活指針」をはじめとするルールの確認を行いました。また、新校舎の生活が始まり、新たな注意事項も加わり、ルールや規則を窮屈に考えている人もいるかもしれません。下記の考え方を参考にしてください。

道徳教育の内容項目：法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める　　4-1「法やきまり」「社会の秩序」

規則を守れば、規則があなたを守る

みなさんの中には、わたしたちの生活に法やきまりがなかったら、もっと自由にのびのびと暮らすことができるのではないかと、なんとなく社会や学校のきまりに抵抗を感じ、反発している人はいないでしょうか。規則にしばられていると型にはまったようにきゅうくつで、自分がい縮してしまうように考えている人はいないでしょうか。もしそう考えていたら、それはたいへんな誤りです。

例えば、交通のきまりがなかったら、自動車は信号で止まるということがなく、交差点では、いつも交通事故が起こるでしょう。歩行者は危なくて道路を歩けません。

もう一つ、スポーツの中で、もっともはげしいラグビーを例にとって考えてみましょう。ラグビーは、走る敵をたおし、敵・味方の上につっこんでたおれ、敵をねじふせて進んでいくはげしいものです。しかし、どんな大げんかになりかねない場面でも、乱闘などにはならず、流れるように試合は進行します。試合が終われば、見るものにすがすがしい感動をあたえ、敵・味方と分かれたフィフティーンはたがいに健闘をたたえ合います。このように試合が進められるのは、きとんとしたルールがあり、すべてのプレイヤーがルールを守るという精神をもち、レフェリーがルール違反者に対しペナルティーを科する、ということがあるからです。

このように、わたしたちの社会生活にとって、法やきまりはなくてはならぬ大切な役割をもっています。法やきまりはわたしたちを守るためにあるので、これを人々が守らないと、法としての機能を発揮することができません。

この法やきまりの乱れた社会を考えてみましょう。もし借りたお金を返さないでおくことがまかり通るようになったらどうでしょう。だれもお金を貸さなくなるか、踏みたおされる危険を予想して、うんと利子を高くするでしょう。また、他人の土地や建物を不法に占拠しても罪に問われず、どろぼうや殺人犯が横行しても、つかまらないとしたらどうなるでしょう。自分の生命や財産を守るために、人々はそれぞれ余計な心配をしなければなりません。これでは個人の生活があやうくなるばかりでなく、国家もあやうくなるでしょう。

ここで、法律について考えてみましょう。法律は国会によって決められた国の規則であって、その規定ははっきりと条文に記されています。そこで法律に反した行為をしたときは、法律の規定にしたがって罰を受けなければなりません。この処罰するということは、国家の権力によって、法律を守ることを、人々に強制しているということです。法律はこのように強制力をもって人の行為を外から正していくものです。警察や裁判所は、このために設けられているのです。このように、法律は人々の財産や生命を守り、集団の秩序や平和を維持していくものなのです。

つまり、法やきまりは、個人を傷つけたり、社会に反するような自分かってな行為に制限を加えて、人々の自由に生きる権利を守るものなのです。ですから、法やきまりを守るということは、一人ひとりの生き方を守り合うということなのです。自分の権利を守るとともに、他人の権利を尊重するという人間尊重の精神こそ、法の精神といえるでしょう。

わたしたちは、自由に楽しい生活を送ることができる権利があると同時に、決められた法やきまりを守る義務もあるのです。「規則を守れば、規則があなたを守る」といわれるように、わたしたちは、法やきまりを守ることによって、その保護によって、安穏な生活を続けていくことができるわけです。　「中学校道徳　あすを生きる２」（秀学社）より

生活向上オリエンテーション(4/10)で伝えた話

牧場　学校は、低い柵に囲まれた牧場のようにしたい。牧場の中では、端っこにいても構わない。でも、みんなで守るルールはあって、それが周りを囲む柵。ただし牢屋のようにみんなを閉じ込める場所ではないので、その柵は低ければ低いほどよい。強制ではなく、一人一人が自分の判断で柵の中に留まり、一定のルールの中でのびのびと暮らす牧場を目指したい。

次号は５月１日(水)発行予定です。「母の日(今年は５月12日)」などについて考えましょう。

人間関係というのは、相手との距離さえ置けばうまくいく。もめるのはその距離を越えようとするからだ。　遠藤三紀彦（作家）

沼田中学校道徳通信　Vol.28
（平成25年度第4号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　5月　1日(水)発行

今月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 法やきまりを守る気持ちよい社会を
～法やきまりの意義を理解し社会の秩序と規律を高める～
② 大切な家族の一員だから　～家族の大切さを再認識しその一員であることを自覚する～
③ 限りあるたったひとつの生命だから　～かけがえのない生命を尊重する～
④ 自分で考え判断してやってみる　～何ごとも自分で判断し決定し実行し責任をもつ～
⑤ 目標に向かうくじけない心を大切にしたい
～目標や希望に向かい勇気をもって生き抜く～

①5/1～5日　②6～12日　③13～19日　④20～26日　⑤27～31日

道徳教育の内容項目：父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く　4-6「家族愛」

ママへ

はなはね、ママに伝えたいことがあるんだよ。それはね、おべんとうが全部作れるようになったこと。びっくりしたでしょ。

冬休み、パパが前の日にお酒を飲みすぎて、ねぼうして、学童保育に持っていくおべんとうを用意してなかった。パパは「あとで持って行くから」と言ったけど、はなは今からでも間に合うと思ったので、パパがお風呂に入っている間、ごはんをたいて、自分でおべんとうを作ってみようと思った。おかずは、ばあばから作り方を教えてもらったたまごやきと、パパから教えてもらった豚肉とピーマンのしおこうじいため。ごはんには、ゆかりのふりかけをかけたよ。こんど作るときは、あとかたずけも全部するって、パパとやくそくしたんだよ。

さいきんのとくい料理は、カレーと肉じゃが。あとね、ママにもっと教えてもらいたかったこと。それはね、ピアノなんだよ。ママはきびしかったけど、教え方がわかりやすかったよ。きびしいほうが、はなが上手になるからね。ママのおかげで、はなは学校のべんきょうの中では、音楽が一番とくいだよ。はなもママみたいに、大人になったら、歌を歌う人になりたいな。おうえんしてね。お風呂のそうじとせんたくは、少し、さぼっているので、４年生になったらがんばる。やくそくするから、天国で見ててね。

今年は、パパといろんなところに旅行したいな。はなは、ママといっしょに行きたいところがたくさんあった。パパとママと三人でおきなわやディズニーランドに行きたかったな。夏休みに、パパがつれて行ってくれるんだって。ママがいてくれたらもっと楽しかったと思うけどね。

人の悪口を言わない。笑顔をわすれない。全部、ママが教えてくれたこと。

むずかしいな、いやだな、こまったな、と思っても、なんとかなるもんね。「きりかえ、きりかえ」って、ママがよく言ってたもんね。

はな、もう泣かないよ。がんばるよ。　安武はな

母が娘に遺した躾と食

人気ブログ「早寝早起き玄米生活~がんとムスメと、時々、旦那~」の一家の物語を、夫(安武信吾)の手記・妻(千恵)のブログ・娘(はな)の手紙で綴った著書『はなちゃんのみそ汁』(文藝春秋)から、娘の手紙を紹介しました。

千恵さんが乳がんの手術を受けたのは、結婚直前の 25 歳でした。抗がん剤の副作用で諦めていたのに、奇跡的に妊娠。出産で再発リスクは高まりますが、「命がけで産んだ」のが一人娘のはなちゃんでした。肺がんの再発後、千恵さんと信吾さんは治療とともに、「食べることは生きること。１人でも生きられる力を身につけて」と食生活の改善に取り組み、「玄米ごはんとみそ汁」の和食生活に変わりました。

そして、肺がんは一度消失しましたが、全身転移が発覚。千恵さんは、はなちゃん５歳の誕生日に約束をします。

「毎朝、自分でみそ汁をつくること」。

遺していく娘が、一人でも生きていけるようにと訴える感動の作品で、躾(しつけ)と食の大切さを訴え、親子愛・家族愛を再認識する良書です。

人間がもつ母への叫び

『日本一短い「母」への手紙』(角川文庫)より、「一筆啓上賞」の第１回受賞作品を紹介します。胸が熱くなります。

あと 10 分で着きます。手紙よりさきにつくと思います。あとで読んで笑って下さい。　瀬谷英佑(16 歳)

母ちゃん。泣きたい夜は決まって母ちゃんが夢に出てくる。背中を押してくれる。　髙田郁(33 歳)

あなたからもらった物は数多く　返せる物はとても少ない
大和田早都美(21 歳)

お母さんから母ちゃんに変えたのは、それだけ誇りに思ったからです。　高橋蘭子(28 歳)

次号は５月 20 日(月)発行します。「生命尊重」について考えましょう。

母、私の最高の教師でした。思いやりや愛、恐れずに立ち向かうことを教えてくれたのです。　スティーヴィー・ワンダー(歌手)

沼田中学校道徳通信　Vol.29
（平成25年度第5号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　5月20日(月)発行

生命を考える

文部科学省が作成した『心のノート』によると、

いま、自分がここに息づいていることの偶然性
そして、一度しか抱きしめることができないという有限性
さらに祖先から受け継ぎ、子孫へ受け渡していく連続性

生命(いのち)について、３つの観点から大切さを見つめています。

生命を考える　偶然性

いまここにいる不思議

地球の永い永い歴史を考え、
人類の誕生を考え
そしていまここにいる自分を考えてみる。
こうやって生きていること
存在していることが
何か不思議に思えてくる。
私のまわりに
いつもの笑顔、いつもの声。
でも、この人たちとの出会いも
いまここに生命を授かっているからこそ。
星の数ほどの偶然があって
私自身の、いまここにいることの不思議。
考えれば考えるほど大切にしたいと思う
この生命。

生命を考える　有限性

いつか終わりがあること

遠い日の夏祭り。金魚すくい。
そして金魚が死んでしまったあの秋の日。
そっと土に埋めてあげた幼い自分を覚えている。
生あるものには終わりがあると
しんみり思ったあの夕方。
自分の生命だって
きっと終わりがやってくる。
一度しかない
一度しか抱きしめることのできないこの生命を証を
自分はこの世に　どのように刻んでいけばよいのだろう。
もっともっと
生きていることを実感し、喜びたい。
そしてかけがえのない私の人生を、生命を
もっともっと輝かせて

生命を考える　連続性

ずっとつながっていること

この生命は私のもの。
だれのものでもない、かけがえのない私のもの。
でも、どこからやってきたのだろう。
———そう
これは私が受け継いだもの。
ずっとずっと遠い遠いむかしから受け継がれ
受け継がれて、私が受け取ったもの。
この生命は私のものだけれど
私だけのものではない。
私は生命という襷を受け取り
人生という長いコースを走りきらねばならぬ駅伝走者。
転んでも、立たなきゃならない
くじけるわけにはいかない。
襷を私に届けてくれた人たちのためにも
そして私の襷を
待っている人たちのためにも。

母の日(5/12)と父の日(6/16)に挟まれている今、改めて自らの生命や、家族や友だちをはじめとする身近な生命について考えてみましょう。

次号は６月３日(月)に発行します。主な内容は「強い意志」です。

生命(いのち)は

吉野　弘

生命は
自分自身だけでは完結できないように
つくられているらしい
花も
めしべとおしべが揃(そろ)っているだけでは
不充分で
虫や風が訪れて
めしべとおしべを仲立ちする

生命はすべて
その中に欠如を抱き
それを他者から満たしてもらうのだ

私は今日、
どこかの花のための
虹(にじ)だったかもしれない
そして明日は
誰かが
私という花のための
虹であるかもしれない

自分は自分の主人公　世界でただひとりの自分をつくっていく責任者　　東井義雄(詩人)

沼田中学校道徳通信　Vol.30
（平成25年度第6号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　6月　3日(月)発行

道徳教育の内容項目　1-(2)

強い意志

今月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 目標に向かうくじけない心を大切にしたい
～目標や希望に向かい勇気をもって生き抜く～

② 目標に向かうくじけない心を大切にしたい
～目標や希望に向かい勇気をもって生き抜く～

③ 大切な家族の一員だから　～家族の大切さを再認識しその一員であることを自覚する～

④ この国を愛しこの国に生きる
～日本を愛し優れた伝統の継承と新しい文化を創造する～

⑤ 認め合い学び合う心を　～個性や立場を尊重して他の人から学ぶ姿勢をはぐくむ～

①6/1～2日　②3～9日　③10～16日　④17～23日　⑤24～30日

「沼中三大行事」の先陣を切って、６月６日(木)に「マラソン大会」が行われます。すでに、体育の授業や朝活動の時間、部活動などで練習が進められていますが、今年度は、学校教育目標の「強い身体を磨く生徒」を意識したり、学級力を向上させようと団結して頑張ったりしている光景が見られます。

そこで、1996年のアトランタオリンピックに出場したり、1997年の世界陸上アテネ大会10,000ｍと2003年世界陸上パリ大会女子マラソンで銅メダルを獲得したりした、千葉真子選手を取り上げた道徳資料「ベストスマイル」（日本文教出版）から、「強い意志」や「前向きな心」について考えましょう。千葉さんは世界陸上選手権大会で、異種目複数メダル獲得という前人未踏の快挙を成し遂げた選手ですが、2004年のアテネオリンピックでは補欠に回りました。その際、もう一度原点に立ち返ろうとした気持ちをまとめた文章です。

そもそもわたしがやっているマラソンは、走っているのは自分なんですけれども、一人の力だけでは絶対に走りきることはできません。指導してくれる監督、コーチ、それにトレーナー。食事などの健康を管理してくれるスタッフ、共に励まし合いながら練習をするチームメイト。わたしの場合は豊田自動織機という、全面的にバックアップしてくれるスポンサー、そして応援してくれる両親、友人、ファンの方々……。それはもう、数えきれない人たちからのパワーをもらって走っているんです。わたしが走る、といっても、この元気をもらわなければ、前には進めないと思います。

実際、練習そのものは自分のためのものでしかないんですけれども、試合はみんなで作り上げていくもの。ひとつのマラソンを走るために、何か月も前から毎日みんなで励まし合いながら苦しい練習を積み重ねていく過程があり、走ったときは喜びを共感して、みんなでひとつのものを作り上げていくこと、それがわたしにとっての最大の魅力なんです。わたしは感動好きです。みんなと感動を分かち合うことが大好きです。（中略）

わたしの座右の銘は「ベストスマイル」。ゴールした後にみんなで作ってきたレースをみんなで笑顔で喜び合おうという気持ちを込めた言葉なんです。

そう、人生も「ベストスマイル」で！

自分やクラスの目標を達成するため、主役である一人一人の生徒が希望と勇気をもって着実に走り抜くことを期待しています。

成長への強い意志

竹　　萩原朔太郎（群馬県出身）

光る地面に竹が生え、
青竹が生え、
地下には竹の根が生え、
根がしだいにほそらみ、
根の先より繊毛が生え、
かすかにけぶる繊毛が生え、
かすかにふるえ。

かたき地面に竹が生え、
地上にするどく竹が生え、
まっしぐらに竹が生え、
凍れる節節りんりんと、
青空のもとに竹が生え、
竹、竹、竹が生え。

がんばろう・顔晴れ(がんばれ)

マラソン大会の応援でよく耳にするのが「がんばれ」の声援です。一生懸命がんばっているのに「がんばれ」と言われたら、「もうこれ以上がんばれない」と気持ちが萎えてしまう人もいるかもしれません。

みなさんは「がんばれ」と言われてどんな気持ちがしますか。

1995年の阪神・淡路大震災直後、地元プロ野球チームのオリックスは、ヘルメットに「がんばれ」ではなく、「がんばろう」と書いて共感を呼びました。東日本大震災後も、「がんばろう東北／がんばろう日本」といった呼びかけを多く目にします。沼中も「ベストスマイル」を目指して、顔晴(がんば)りましょう。

次号は６月17日(月)に発行します。主な内容は「愛国心」です。

勤勉努力は、凡を非凡にする。　　上村松篁（日本画家）

沼田中学校道徳通信　Vol.31
（平成25年度第７号）

道徳教育の内容項目：日本人としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める　４-９「愛国心」

心の鍵

和のこころ

1. 素直な心
2. 思いやりがある優しい心
3. 困難に挑戦する心

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　６月１７日(月)発行

2013年3月18日付の「みやざき中央新聞」に掲載されていた富田欣和さんの講演会(久留米市開催「和ごころ塾」)より、日本人の秘密を紹介します。

「和のこころ」って何でしょう？

「和」ってどういうイメージがありますか？

「調和」「統合」「一つ」、いろいろ言い方はあると思うんですけど、「和のこころとは何か」ということを実はアマテラスオオミカミが古事記の中で言っています。

僕にとって個人的にこれは大発見でした。

「和のこころ」とは３つあります。

1、素直な心。2、思いやりがある優しい心。3、困難に挑戦する心。古事記ではこの３つを以て「和のこころ」と言っています。このうちの１つじゃなくて３つ全部持ちましょう、というのです。

どういうことか。

素直な心だけだと、能天気みたいな感じで「素直だね」で終わっちゃいます。思いやりのある優しい心だけだと、もしかしたら八方美人になるかもしれません。困難に挑戦する心だけだと、ジコチューなだけで終わってしまうかもしれません。

素直な心で何でもできる。そして、人のこともちゃんと見つつ、困難なことにも挑戦できる。この３つのバランスがすごく大事だということです。

「素直な心」「困難に挑戦する心」に対して、「思いやりのある優しい心」は少し意味合いが違います。

どういうことかと言うと、素直であることと、困難に挑戦することは１人でもできます。でも、思いやりのある優しい心は誰かがいないとできません。つまり、１人でできる「素直な心」「困難に挑戦する心」の間に、相手がいないとできない「思いやりのある優しい心」が入っているんです。

そしてこの「和のこころ」を表しているのが三種の神器の「鏡」、「剣」、「勾玉」です。

ちょっと余談ですが、天皇陛下が天皇陛下であるためにはこの三種の神器を持っていなければなりません。三種の神器をもっている人を天皇陛下と言うんです。それぐらい重要なんです。

実は「素直な心」というのが三種の神器でいうと「鏡」です。「困難に挑戦する心」、これは「剣」です。「思いやりのある優しい心」は「勾玉」に対応しています。

もう１つ、鏡はアマテラスオオミカミに対応しています。このことは古事記にこう書かれてあります、「鏡を私だと思ってちゃんと篤く敬いなさい」と。

また、「困難に挑戦する心」は剣に対応していると言いましたが、剣を手に入れた人はスサノオノミコトです。ですから剣はスサノオに対応しています。勾玉はもう１人の神様ツクヨミノミコトに対応しています。

ツクヨミって聞いたことある人いますか？　古事記の中で「最も尊い神様が３人生まれました」と言っているんですが、それがアマテラス、スサノオ、ツクヨミの３人です。

ところが、ツクヨミは生まれた後１行も古事記に出てきていません。アマテラス、スサノオは結構活躍して、すごいエピソードもたくさんあるんですけど、ツクヨミだけ古事記に記述がないんです。最も尊い神様の１人なのに。

なぜか。それは「思いやりのある優しい心」がないと、アマテラスもスサノオも本来の良さが生きてこない、ということです。つまりツクヨミは裏(陰)で支えているんです。

このバランス感覚こそ古事記の秘密、日本人の秘密なんです。わかります？

素直に正直に生きることも大事だし、困難にチャレンジすることも大事なんですけど、それを結びつけているのが思いやりなんです。他者に対して思いやりのある優しい心がなければ、あとの２つは生きない。「三位一体で和のこころなんだよ」ということを古事記は物語っているんですね。

各学年の旅行では、友だちとの交流に加え、日本のよさや日本人の魅力を感じてきてください。
次号は７月１日(月)に発行します。主な内容は「愛国心」です。

心を変えろ、心を。日本を背負う気になってみろ。その気になって背負えば、日本などは軽いものだ。　　坂本龍馬(幕末志士)

沼田中学校道徳通信　Vol.32
（平成25年度第8号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　7月　1日(月)発行

今月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 郷土をもっと好きになろう　～地域社会の一員として郷土を愛しその発展に寄与する～
② 自分の学校・仲間に誇りをもって　～学校を愛しよりよい校風をつくる～
③ 比べてみよう きのうの自分と　～自分のよさを見つめ個性を伸ばしていく～
①7/1～7日　②8～14日　③15～19日

※「愛国心」の予定でしたが、内容を変更して「自然愛」について特集します。

新旧ＰＴＡ会長さんのご厚意により、生徒・保護者・教員・地域住民らの融資が参加したボランティアで、新校舎玄関付近に、100 株以上のラベンダーが並ぶ花壇を造成しました。そこで、感謝の思いを込め、木の話を紹介します。

木を植えよう

君が家の周りに、一本の木を植える。毎朝、「お早う」と声をかける。木も、「お早う、元気でね」と、葉をふるわせて答えてくれる。友だちが、仲間が、兄弟が出来たのだ。君が、成長する。木も、成長する。互いに、競争だ。君が病気で寝ているときは、「早くよくなるんだよ、頑張ってね」と、いっそう鮮やかな葉の緑とともに、木が励ましてくれる。

君が家の周りに、もう一本の木を植える。朝、「お早う、元気でね」の木の声が、二倍になる。君は、二倍元気になる。病気したときも、「頑張ってね」の木の励ましが、二倍になる。君はもっと早く、病気がよくなり、治るだろう。背が伸びて大きくなる木との競争にも、もっと熱が入るだろう。

君が家の周りに、三本目の木を植える。「お早う」の声も三倍の、合唱になる。お父さん、お母さんが家にいない、君がひとりぼっちのときも、もう寂しくはない。夜も昼も、雨の日も風の日も、君の植えた木々がいつも傍にいて、お喋りしてくれる。君の仲間ができたのだ。カンカン照りのときも、涼しい木陰を作って君の話を聞いてくれる。学校で先生にほめられた話、叱られた話、友だちと遊んだこと、ケンカしたこと、楽しい話や悲しい話、何でもだ。それによって君の心はより楽しく、より明るく、より元気になる。どんな時にも仲間がいてくれるのは、何よりも心強い。

君が家の周りに、四本目、五本目、六本目、七本目の木を植える。十本目、二十本目、三十本目の木を植える。さらに、百本目、二百本目、三百本目、五百本目、千本目の木を植えれば、やがて林が出来、森が生まれる。「元気でね」の、林や森の大合唱が起きる。自分にとって大元気、大安心が生まれるとともに、自分の村、自分の町の、林や森が出来ることになる。

そこは、自然の荒々しい森とは違う。君や村の人、町の人と同じ大気、同じ土、同じ水を分かち合い、ともに呼吸し合い、ともに生き合う、「息遣いのきこえる」林や森である。そこには、「いのち」が溢れ、小鳥が美しく歌い、ミツバチがおいしいハチミツを作り、虫たちが賑やかに集う。木漏れ日が輝き、雨上がりの水玉が木の葉に光って、最高に美しい芸術作品を生んでくれる。

そこでは、人も自然も心を開き、ともに愛し合う。林や森の大合唱、交響曲がきこえる。「いのち」のきらめきがある。

君の植えた一本、一本の木が大きく成長し、林となり森となるとき、その林や森のある村や町が、君の本当のふるさとになる。たとえ君が大きくなって地球の反対側で働き、くらしたとしても、君が植えた木、君が作った林や森には、ともに育みそだてた愛がある。そここそが、君の帰るべき心のふるさとである。そこには愛があり、美しさと安心がある。君の植えた木々こそが、君の愛する仲間、幼なじみだからだ。

まず、一本の木を家の周りに植えることから始めよう。木を植え、木を愛し、元気と、美しさと、安心の原点を作ろう。一本にさらに一本を加えつづけ、木の仲間、木を植える仲間を増やし、手に手を取って広々とした心のふるさとを作り出そう。

人と木、人と自然、そして人と人が呼吸し合い、生き合い、愛し合うところに、私たちの明るい未来がある。そこに、二十一世紀の幸せがある。

「HAND　IN　HAND実行委員会制作ノート」木村尚三郎(東京大学名誉教授)
「21世紀を生きる日本の子ども達、アジアの子ども達に
－木を植えよう、愛する仲間を作ろう－」

次号は７月18日(木)に発行します。主な内容は「男女の異性観」です。

私たちが新しい木を植えるとき、私たちは平和の種も植えるのです。　ワンガリ・マータイ(ノーベル平和賞受賞)

沼田中学校道徳通信　Vol.33
（平成25年度第9号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　7月18日(木)発行

各学年の旅行が終わり、廊下には旅行のまとめが掲示されています。どの学年も男女混合のグループごとに撮った集合写真が飾られ、協力して困難を乗り越えた様子、楽しく友情を深めた様子などが伝わってきます。

愛 幸せな人生を築くために…

～男女の人格を尊重して、互いに成長する～

道徳教育の内容項目：男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。　2-4「男女の異性観」

そこで、沼中で活用している道徳の副読本から「男女の異性観」に注目し、その一部を紹介します。

坂口幸恵「さわやかな笑顔」

古代のギリシャには、こんな神話があります。

神様が最初につくられた人間の原型というのは、１つの丸い胴体に頭が２つ、手が４本、足が４本あったのだそうです。その姿は、男の背中と女の背中がくっついているようなものだったと想像してください。その名前はアンドロギュノスといいました。このアンドロギュノスは頭が２つあるので、絶えずおしゃべりをしてうるさくしていました。そのうえ、神様に無礼なことをくり返していました。そのため、とうとう神様の怒りをかい、アンドロギュノスは体を２つに切り離されてしまいました。神様は切り離した一方を男、他方を女という人間にしました。２つに切り離された男と女は、アンドロギュノスだったころの半身にあこがれ、自分の半身に出会うことを求めるようになりました。人間は２つに分けられた自分の半身と１つになって本来の体になることを、それ以来頭の中に植えつけられてしまったのです。だから、今も男性は女性を求め、女性は男性を求めているというのです。そうしないと、心が不安定で寂しいのです。

「中学生の道徳３年　かけがえのない きみだから」（学研）

田中良「『好き』と『愛する』と」

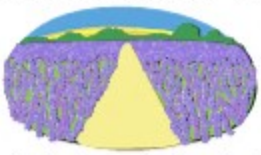
ぼくは、君たちがいつの日か「美しく人間的な性」に出会ってほしいと、心から願っている。「美しく人間的な性」というのは、「本当の愛の中の性」ということだ。本当に愛し合っている二人の性は、生きる喜びや勇気や幸せや希望を生みだしてくれる。愛し合っていることのやさしさと充実感に満たされ、そのことによってさらに二人の愛は深められ、固められていく――。

〈中略〉

「愛する」ということは、主体的で、能動的で、全面的な行為だから、相手に積極的に働きかけたり、相手のために何かしてあげたくなるんだ。そうなれば、当然、相手の立場や感情に、深くかかわっていくことになるんだね。

だから、相手の立場や考え方や生き方などをよく理解していないとまずいんだ。さらに、相手の人生や、その中の喜びや悲しみを丸抱えにしてあげることのできる心の容量の大きさが必要になるんだよね。

人を愛するためには、人間を本当に大事にする心、相手の長い人生の全体を大事にする心、相手の幸せのために必要なときには厳しく忠告をしてあげたり、ときには相手のために自分を抑える能力――などが自分の中にしっかり育っていないと、うまくいかないわけだ。そういう心や能力が育っていないと、身勝手になり、やがて傷つけ合ったり、苦しめ合ったりして、壊れてしまうことにもなる。



これは、じっさいには大人にだってなかなかむずかしいことなんだよね。何度も失敗したり、学んだり、自分を見つめ直したりしながら、成長していくものなんだろうね。

「愛」とは、そういう厳しいものでもあるんだ。「愛」というのは、美しく尊いものであり、甘く切ないものであり、やさしく温かいものでもあるんだけれど、また、つらく悲しいものでもあり、厳しいものでもあるんだね。

寅さんで有名な映画監督の山田洋次さんって知ってる？　この人は、「愛するということは、互いの命をいとおしむことだ」といってるんだけれど、ステキな言葉だよね。

『星の王子さま』を書いたサン＝テグジュペリという人は、「愛し合うということは、互いに見つめ合うことではないんだ。いっしょに同じ方を見ることなんだ」といってる。お互いに顔を見つめ合って、いつまでもウットリしてるだけでは、愛は育たないというんだよ。

「同じ方を見る」ってどういうことなんだろうか？　同じ考え、同じ関心、同じ人生の目標があって、いっしょに励まし合いながら努力する中でこそ、愛は育つのだといってるんじゃないだろうか？

「中学生の道徳　道しるべ３」（正進社）

次号は７月26日(金)に発行します。主な内容は「世界の平和」です。

愛情にはひとつの法則しかない。それは愛する人を幸福にすること。　スタンダール（作家）

沼田中学校道徳通信　Vol.34
（平成 25 年度第 10 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪
平成25年　7月26日(金)発行

忘れない

今月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 友という生涯のたからものを　～理解し合い高め合える友達に出会う～
①8/26～31

道徳教育の内容項目：世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する　4-10「平和」

８月は、広島原爆の日（8/6）、長崎原爆の日（8/9）、終戦記念日（8/15）など、戦争や平和について考える記念日が多くあります。しかし、夏休み中であるため、クラスで話し合ったり、思いを共有したりする機会をなかなか設けられません。そこで、下記の資料を読み合い、平和や幸福について深く考えてみましょう。

■(株)陽なた家ファミリー代表　永松茂久「for　you～誰かのことを想うとき 人は強くなる～」

そこ（鹿児島の知覧にある特攻平和会館）には特攻隊員の遺書が展示されていました。（中略）明日出撃する、そのギリギリの精神状態で遺書を書くわけです。一番多く書かれていたのはご両親、特にお母さんへの感謝でした。他にも国を想う気持ちだったり、ふるさとへの感謝、「天皇陛下万歳」というのもありました。「あなたを守るために行くんだ」と彼女に向けて書いた遺書もありました。ほとんどが大切な人に向けて書いてありました。

僕はその遺書を見て涙が止まりませんでした。「俺は何をやっているんだろう、本当にすみません」と思いながら、ずっと遺書を読んでいました。しかし、その涙が一つの疑問に変わりました。「ところで英霊さんたちは、何を残したかったんだろう？」、そう思うようになったんです。

特攻作戦は悲惨な作戦です。飛行機に爆弾を積んでそのまま敵艦に体当たりをする。「自分の命と引き替えに絶対に国を守るんだ」という決意と覚悟。その「国」というのは何かというと、自分のふるさとであり、自分の家族であり、自分の愛する人たちだと思うんです。

「みやざき中央新聞」2012年4月23日(月)発行の第2457号より

■（株)アイスブレイク代表取締役　中村信仁「忘れない、愛のために飛び立ったことを」

知覧飛行場は、1945 年に特攻基地となります。わずか 4 か月の間に、1036 名の隊員が沖縄の海に向かって飛んでいったことは、皆さんもご存じだと思います。（中略）

戦争は異常なんです。人生の順番で言うなら、親は子どもより先に逝くものです。子どもが親より先に逝ってはいけないのです。でも、彼らは、20 歳前後の若さで死を決して飛んでいった。国を愛する心だったんでしょうか。彼らの心の中にあったのは郷土愛だったのではないでしょうか。

「自分のふるさと、自分の親、自分の弟や妹を、俺が守らないで誰が守るんだ」

「もし、自分が命を賭けて戦うことで、自分のふるさと、自分の親、自分の弟、妹たちを守れるんだったら…」そういう思いだったのではないでしょうか。

彼らが残した遺書、絶筆が知覧の特攻平和会館に展示されています。日本の国語教育はこれほどまでに素晴らしかったのか感心するほど、達筆な字、そして文章です。

一つ一つを読んでいくと共通項が三つ出てきます。一つ目はご両親に対する感謝です。

「今日まで自分を見事に育ててくださいました」

二つ目は謝罪です。「自分が先に死ぬことをお許しください」

三つ目、これがすごいです。全員が同じことを書いています。

「悲しまないでください。自分が行かなければならんないのです」と。

「みやざき中央新聞」2012年8月13日(月)発行の第2471号より

■　高岡修『新編 知覧特別攻撃隊』(ジャプラン)より　※特攻隊員の遺書の一部です。

・御恩返しに、うんと親孝行しようと思っていましたが、結局何も出来ずにしまいました事をお許しください。

・あんまり緑が美しい　今日これから　死にに行く事すら　忘れてしまいそうだ。
真っ青な空　ぽかんと浮かぶ白い雲　六月の知覧は　もうセミの声がして　夏を思わせる。
作戦命令を待っている間に

次号は８月 26 日（月）に発行します。主な内容は「公正・公平」です。

平和の基本はオンリーワンです。他人と比べるのではなく、お互いの違いを大切にする。　新垣勉（歌手）

沼田中学校道徳通信　Vol.35
（平成 25 年度第 11 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 25 年　8 月 2 6 日（月）発行

「心のノート」（文部科学省）

「心のノート」は、生徒が身に付ける道徳の内容をわかりやすく表し、道徳的価値について自ら考えるきっかけになります。また、道徳の時間等で、生徒が自らページを開いて書き込んだり、家庭で話題にしたりするなど、生活の様々な場面で活用することができます。平成 23･24 年度は、電子データを文部科学省のホームページで紹介されていましたが、今年度は配付が再開しました。

道徳教育の内容項目：正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める　4-(3)

※今年度の７月、沼田市の予算で道徳の副読本（『あすを生きる』日本文教出版）を購入していただきました。
そこで、１年生の内容から「公正・公平」に関する資料を紹介します。

「ちがい」に種類があるの？

地球上には約 60 億（現在は約 71 億）の人々が暮らしており、それぞれがさまざまな“ちがい”をもっています。人々を分類するとき、分類のしかたによっていろいろなグループ分けができるはずです。しかし、それらの“ちがい”の中には、「あってよい“ちがい”」と「あってはいけない“ちがい”」があります。

まず、わたしが考える「あってもよい“ちがい”」と「あってはいけない“ちがい”」のいくつかを紹介してみましょう。

「あってもよい“ちがい”」

①Ａさんは、仏教徒であるが、Ｂさんは、キリスト教徒である。
②日本では、食事のときはしを使うが、インドでは、右手の指を使って食べる。
③プロ野球選手Ｃさんの年収は、１億円であるが、同じ年齢で会社員のＤさんの年収は、400 万円である

「あってはいけない“ちがい”」

④日本では、５歳未満児の死亡率は出生 1,000 人に対して、４人であるが、ボリビアでは６９人、カンボジアでは 141 人、エチオピアでは 166 人となっている。
⑤Ｅ百貨店では、女性社員の採用について、「身長 158 センチメートル以上、容姿端麗の方に限る」という内部条件を設けているが、男性についてはそのような条件は設けていない。
⑥10 歳のＦちゃんは、毎日小学校に通っているが、フィリピンでは、同じ年齢のＧちゃんが、毎日、路上でガムを売って生活費をかせいでいる。

「あってもよい“ちがい”」としてあげたのは、①宗教、②慣習、③能力や本人の努力によるちがいです。また、「あってはいけない“ちがい”」としてあげたのは、自分の意志とは関係なく、その人の生まれた国や民族などのちがいなどによって生じる、④死亡率、⑤性による待遇、⑥教育を受ける機会などのちがいです。

人間は、民族・親・性を選ぶことができません。この「あってはいけない“ちがい”」の中に、わたしたちが人権問題について考えていくうえでの一つのカギがあるのです。

次の⑦～⑨は、「あってもよい“ちがい”」と「あってはいけない“ちがい”」のどちらに分類できるか考えてみてください。

⑦高校入試で、Ｈさんは成績がよかったので合格したが、成績のよくなかったＩさんは、不合格になった。
⑧Ｊさんは大阪の方言で話すが、Ｋさんは青森の方言で話す。
⑨イギリスのあるゴルフ・クラブでは、ヨーロッパ系の白人は歓迎されるが、ユダヤ人や日本人は入会を断られる。

みなさんは、“ちがい”にはいろいろな種類があることがわかったでしょうか。「あってもよい“ちがい”」、「あってはいけない“ちがい”」があり、これらをしっかり区別して対応することで、たがいの暮らしや生き方を理解し合うことができるのです。

次号は９月２日（月）に発行します。主な内容は「集団生活の向上」です。

沼田中学校道徳通信　Vol.36
（平成 25 年度第 12 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 25 年　9 月　2 日（月）発行

9 月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 友という生涯のたからものを　～理解し合い高め合える友達に出逢う～
② 仲間がいてキラリと光る自分がいる　～役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める～
③ 仲間がいてキラリと光る自分がいる　～役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める～
④ 人々の善意や支えにこたえたい　～善意や支えに気づきそれにこたえようとする～
⑤ 理想をもって前向きに生きよう　～真理・真実・理想を求め自分の人生を切り拓く～
⑥ 私たちの力を社会の力に　～勤労の貴さを理解し皆の幸福や社会の発展に努める～

①9/1　②2～8日　③9～15日　④16～22日　⑤23～29日　⑥30日

道徳教育の内容項目：自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める　4－(4)

夏休み中の８月22日（金）、第95回全国高校野球選手権記念大会で前橋育英高校が優勝したことは記憶に新しいところです。快進撃と共に、様々なマスメディアで感動的なエピソードが紹介されています。そこで、今回はネット上で大きな話題になっている「東スポＷｅｂ(8/23)」より、集団生活の向上について考える「陰の立役者」という話をお伝えします。

陰の立役者　～前橋育英ナインが感謝した「スーパー添乗員」～

第 95 回全国高校野球選手権大会は２２日に決勝戦を行い、初出場の前橋育英（群馬）が延岡学園（宮崎）を４－３で下し、深紅の優勝旗を手にした。快挙の裏にはチームを支える“スーパー添乗員”の存在もあった。

前橋育英の荒井直樹監督(49)は「自分たちがやってきたことは間違いではなかったな、とうれしい気持ちです」と喜びをかみしめた。４回に３点を先制されながら、直後の５回に田村（３年）のソロ本塁打や小川（３年）の適時打で同点。そして７回、無死三塁から荒井監督の息子で主将の荒井海斗（３年）が勝ち越し打を放った。

激戦を制したナインからは「優勝できたのはあの人のおかげです」との声が飛び出した。大会期間中、チームに帯同した日本旅行高崎支店の添乗員・宮澤和広氏(35)。桐生高の野球部ＯＢで、ありったけの野球への情熱をチームに注いでくれたという。

「３回戦の横浜(神奈川)戦の前、宮澤さんが『横浜といえばシューマイだから食べた方がいい。ゲンを担ごう』と言ったので、その通りにしたら勝てました。それで次の常総学院(茨城)戦の朝にも名物の納豆を食べたら、また勝った」(ある選手)。ナインは準決勝の日大山形(山形)戦の前に名産のさくらんぼ、そして決勝戦前夜(22 日)も宮崎名産のマンゴーを食べまくった。

幸運を呼び込んだゲン担ぎだが、宮澤氏の活躍はそれだけではない。「宮澤さんは対戦相手のデータや情報を集めて、独自の分析メモを作ってくれた。内容は濃くて相手の配球の特徴や、どの選手がどのタイミングでセーフティーバントをしてくるかまで書かれていた。相手打線の情報は（高橋）光成も役に立ったと思います」（別の選手）。練習中でも宿舎でも常にナインを励まし、試合ではネット裏から「練習通りやれよ！」との声が響いた。

「僕が好きでやったこと。対戦校の地元の地方紙や負けた監督のコメントなどを見て情報をまとめただけです。監督に“君も３年間野球やってたんだろ”と言われ、チームの１人のように扱っていただいた。感動しました」（宮澤氏）

今大会の抽選日２日前からチームに帯同し、かつて自分が追いかけた夢を前橋育英ナインに託した。本来の仕事である弁当の発注や球場入りの連絡などを上司に任せてまでチームを支えた。

決勝の朝、ナインから「あと１つで日本一の添乗員です」と声をかけられた宮澤氏は「決勝戦も練習通り楽しんでください」と選手たちの前でスピーチ。その言葉通り、９回のピンチの場面では主将の荒井が「楽しんでやろう」とナインに呼びかけた。献身的な情熱が呼び込んだ日本一。まさに陰の立役者だ。

次号は９月 20 日（金）に発行します。主な内容は「友情」です。

笑顔で生き、周囲の人々も幸せにする。

渡辺和子（ノートルダム清心学園理事長）

沼田中学校道徳通信　Vol.37
（平成 25 年度第 13 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年　9月２０日(金)発行

太陽みたいにきらきら輝く生涯のたからもの

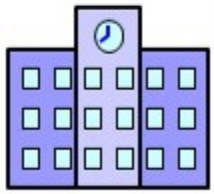
楽しいこともあればぎくしゃくすることもある友達関係。ワイワイガヤガヤしているのは仲のいい証拠。でも、自分がつまづいたときや落ち込んだときにそっと力をくれる、そんな友達がいるとうれしい。生涯のたからものはきっとたくさんあるけれど、友情もそのひとつに違いない。

中学校版『心のノート』より

道徳教育の内容項目：友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに話し合い、高め合う　２－(３)

友達とはどういうものでしょうか。
友達や仲間がいたからこそ、やってこられた経験はありませんか。
もう一度友達との関係を見つめ直し、友達や仲間とのつながりをいかして生きていきましょう。

しるし　～友情を見つめる　　辻 仁成『そこに僕はいた』(新潮社)～



僕は学校が好きだった。毎日わくわくしながら学校に通ったものだ。学校にはいやな奴も大勢いたが、好きな友達がそれ以上沢山いたからである。向こうは僕のことをどう思っていたのかは分からないが、構わなかった。僕はかってに彼らのことを友達だと思っていたのである。

友達を作る、とよくいう。あの頃先生や親は僕によく「いい友達をいっぱい作りなさい」といっていた。僕は彼らがそういうたびに「それは違う」と心の中で反発したものだった。友達は作るものじゃない、と今でも思っている。友達を作るなんて第一友達に対して失礼だ。第二に作った友達は偽物のような気がしたのだ。

僕は友達は作るものではなく、自然に出来るものなのだと思う。僕にも友達が出来なくて辛い時期があったけれど、僕は決して友達を作ろうとはしなかった。つまり無理して誰かに合わせたりしてつきあうことはなかったのだ。僕はいつも自然にしていた。大人になってから、ああ、あの頃あいつは僕の友達だったのだな、と思い知らされた奴もいた。その頃は喧嘩ばっかりしていたからである。後になってそうやって分かる友達もまたいいものだ。ともだちともだちといってつるんでいるだけが友達ではない。いつも一緒にいた奴らよりも忘れられない友達が後になっていっぱい現れたりするものである。だから僕は友達の間口をさらに大きくとらなくてはいけないなと最近思うようになった。友達という言葉には本当は僕らが想像しているよりももっともっと大きな意味がかくされているのだ。

大人になった今、僕は学校を失ってしまった。毎日楽しみにしていた学校はもうない。社会にでてから今日まで、ぼくは孤独に仕事をしてきた。それでも一生懸命仕事がやれたのは、ふりかえると僕には素晴らしい仲間たちが大勢いたからなのだ。彼らと過ごした自然な日々は、僕の人生において大いなる大地となっている。そして僕はそこからすくすくと伸びる一本の木なのだ。ぼくの根っこは彼らと繋がり、ぼくは空を目指している。

■ 友という生涯のたからものを　『心のノート』より

空気と光と友人の愛。
これだけ残っていれば、
気を落とすことはない。
ゲーテ(詩人)

人生から友情を取り去ってしまうのは、
この世界から太陽を取り去るというものだ。　キケロ(哲学者)

友人に不信を抱くことは
友人にあざむかれるより
もっと恥ずべきことだ。
ラ・ロシュフコー(文学者)

友情は成長の遅い植物である。
それが友情という名に値する
ようになる前に、幾度かの
困難な打撃に耐えなければ
ならない。
ジョージ・ワシントン(米大統領)

私は世界にふたつの宝をもっていた。
私の友と私の魂と。
ロマン・ロラン(作家)

次号は 10 月１日(火)に発行します。主な内容は「勤労の尊さや意義」です。

真の友情は精神の厳しい緊張関係の上にのみ成り立つ　　木下順二(劇作家)

沼田中学校道徳通信　Vol.38
（平成 25 年度第 14 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 25 年１０月　１日(火)発行

10月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 私たちの力を社会の力に　～勤労の尊さを理解し皆の幸福や社会の発展に努める～
② 温かい人間愛につつまれて　～思いやりの心をもつ～
③ 心を形に表していこう　～礼儀の意義を理解しその場に応じた言動をとる～
④ 郷土をもっと好きになろう　～地域社会の一員として郷土を愛しその発展に寄与する～
⑤ 自分の学校・仲間に誇りをもって　～学校を愛しよりよい校風をつくる～

①10/1～6日　②7～13日　③14～20日　④21～27日　⑤28～31日

道徳教育の内容項目：勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める　4-(5)

『心のノート』には、「働く」ことに関して次のような記述があります。

「働く」というと、単にお金をかせぐためだと思いがちだけれども、実は、生きがいや自己実現にもつながっている。自分の大切な人の生活を支えることでもあり、自分の夢を実現するためにものでもあるという意味で、個人の幸福追求の手段ということができるだろう。

その一方で、勤労は社会への貢献でもあることを忘れてはいけない。いろいろな仕事があって、それは必ず社会の役に立っている。その仕事を通し、きっと社会の中のだれかが恩恵を受けていたり、助かったりしているのだ。

「働く」ということには、個人と社会において同じように大きな意義が存在する。

そこで、２年生の職場体験学習(10/2･3)に関連して、今回は「働く」ことについて考えていきましょう。

とてもナチュラルに、気がついたらワインの仕事をしていたんです。なんでそのことを仕事にしたかというのではなく、わたしはこれが**“天職”**、つまり**“天から与えられたやるべきこと”**なんだと思っています。フランス語で**“トラバーユ”**という言葉があります。それを日本語訳すると**“仕事”**という意味なんですけれど、それは仕事というよりも**“天職”**だとわたしは解釈しているんです。

日本ではお金を伴っていることが**“仕事”**と言われるんですけれど、そうではなくて**“その人が生きている間にやるべきこと”**なんです。わたしは短大を卒業したあとは、**“自分がやるべきこと”**ではなくてお金を得るための仕事をしていたんですけれど、現在のワインの仕事はたぶん、わたしのやるべきことだと思っています。

天職というとすごくかっこよく思われてしまうんですけれど、たとえば生まれながらにすごく子どもが好きな人が保育士をやっていたら、それが天職だと思うんです。社会的にたくさんのお金を稼がなかったとしても、お母さんとして子どもたちを育てることが好きで、合っていたら、それがその人の天職だと思います。それを見つけられたらすごく楽になれると思います。若いときには、それがなかなか見つけられないんです。迷っちゃうんですよ。やりたいことがあるけれど、実際、現実的にはそんなことできない、お金にならない、というのは言いわけに過ぎないんですよ。

天職が見つからないという人が日本ですごく多いといわれています。今の日本の社会では自分を社会の尺度で測ってしまっている人が多いため、見つけられないのだと思います。ソフトな部分ではなくハードな部分、いわゆる肩書きのような側面から見てしまうのが、日本社会のベースの教育システムだと思います。外国で暮らしていると、年齢は会話の中では聞いたこともないし、そういうことはぜんぜんその人に関係のないことで、ある程度の年齢ならばだれもが大人の社会にいるんです。

『中学道徳 あすを生きる３』(日本文教出版株式会社)収録の読み物資料
NPO法人キャリナビ「この人がカッコいい！　〔お仕事人辞典〕」より

次号は 10 月 16 日(水)に発行します。主な内容は「公徳心・社会連帯」です。

仕事が楽しみならば　人生は極楽　仕事が義務なら　人生は地獄だ　　田沼武能(写真家)

沼田中学校道徳通信　Vol.39
（平成 25 年度第 15 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年１０月１６日(水)発行

２学期に入って間もない頃、国語の時間に、全校生徒が人権作文を書きました。自分を見つめ、他者を見つめ、社会を見つめる中で、「人権」について考えることができました。いじめ、差別、偏見といった問題に正面から向き合ったり、命の大切さ、助け合いや協力することの美しさについて、考えを整理したりしました。また、最近になって、「全国中学生人権作文コンテスト」の入賞作品集をいただき、各学級の学級文庫に収められています。読んでみてください。

人権作文

道徳教育の内容項目：公徳心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める　4-(2)

マナー、助け合い、譲り合い、思いやり、あたたかさ…などについて、考えていきましょう

おたがいさま

第 43 回ＪＸ童話賞　一般の部　佳作　金田枝里子　　『童話の花束』その 43

「どうもありがとう。」

わたしの腕にかろうじて支えられたその人は、ほっとしたように言った。

午後６時の北千住駅のホーム。電車から降りる人波に押されて、転びそうになったのをとっさに受けとめた。髪はきれいなブラウンに染められているが、てっぺんが白い。小さい孫のいる年齢だろう。

改めて深々と下げられた頭に見送られ、わたしは電車に乗った。ちょっと照れくさい。

しかし間もなく、そんな照れくささも吹きとぶほど、人いきれの車内に我が身を押しこみ、押しこまれ、やっとのことで手すりにつかまる。

池袋で行われた社外研修の帰りだった。かばんの中は資料でぎっしり重く、肩にくいこんでいる。

単調な車内アナウンスが、電車の揺れを予告した。じきに体の重心が前へ、後ろへ移る。

もともと電車は苦手だ。よどんだ空気に、よどんだ匂い、不快な揺れと機械音。乗り換えたときに一旦は解放されるけれど、すぐにまた同じ環境に戻らねばならない。まるで交代相手のいないリレーをやらされているようなもの。わたしは肺の中で生ぬるくなった空気を吐きだした。

３つ目の駅が過ぎさった辺りで、それまで感じていた不快さがふいにピークに達した。

喉の奥から酸っぱいものがせりあがった。

目の前がかすみ、冷や汗が流れた。必死でかばんからタオルハンカチを取りだし、口元を押さえる。がんばれ、とわたしは自分に言いきかせた。今までだってやり過ごせたんだ、あともう少しなんだから、と――。

「どうぞ。」

声をかけられて、わたしはハッとした。

見ると、前のシートに座っていた白髪頭のおばあさんが、腰を浮かそうとしていた。

「大丈夫です。」

とっさにわたしは答えてしまう。

「でも、顔色が悪いよ。」

そう言って立ちあがったおばあさんの背中はひどく曲がっていた。とんでもない、と思わずその肩を押しとどめた。

「ほんとに、あともう少しだけなんで――。」

「そうやってずっとがんばってきたんでしょ。」

見かけとはうらはらに、かくしゃくとした態度でおばあさんは言った。

「あと少しのところで倒れたらどうするの。おたがいさまなんだから、助けあいましょう。」

気がつくと、その人とわたしの位置が逆転した。はるか年上の人に譲られた席に居心地の悪い思いで収まりながらも、わたしの心にはその『おたがいさま』という言葉が強く印象づけられた。そういえばわたしも、この電車に乗る前に人助けをしたっけ。

そうか、おたがいさまって、こういうことなんだ。わたしは肩からすっと力が抜けていくのを感じた。

わたしを苦しめていた無機質な圧迫感が、少しずつだけどやわらいでいったのだ。

でも奇跡はそれだけでは終わらなかった。

隣に座っていた学生服の男の子が、さっきから居心地悪そうにもぞもぞしていたが、やがて、

「あの、こっちにどうぞ。」

と、おばあさんに向かって腰を浮かせた。

温かなリレーは今、空気の一部となってつながっていった。

次号は 11 月 2 日(金)に発行します。主な内容は「愛校心」です。

お子さんに「なんのために生きるの？」と聞かれたら、「誰かを幸せにするために生きるのよ」と答えてあげてください。　瀬戸内寂聴(僧侶)

沼田中学校道徳通信　Vol.40
（平成25年度第16号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成25年１１月　１日(金)発行

11月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 自分の学校・仲間に誇りをもって　～学校を愛しよりよい校風をつくる～
② 人々の善意や支えにこたえたい　～善意や支えに気づきそれにこたえようとする～
③ 理想をもって前向きに生きよう　～真理・真実・理想を求め自分の人生を切り拓く～
④ 私たちの力を社会の力に　～勤労の尊さを理解し皆の幸福や社会の発展に努める～
⑤ 認め合い学び合う心を　～個性や立場を尊重して他の人から学ぶ姿勢をはぐくむ～

①11/1～3日　②4～10日　③11～17日　④18～24日　⑤25～30日

道徳教育の内容項目：学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する　4-(7)

校門を掘る子　～あなたが自分の学校で大切にしたいものは何ですか～

あれは、佐々木兵三校長先生が赴任して来て間もないころの生徒会でのことであった。

ぼくの中学校は田んぼの中にぽつんと建った校舎だった。裏に通称「電気ぜき」と呼ばれる発電所の水路が通っていた。その水路ぷたいに小路（こみち）があって、その小路が学校への近道だったことから、多くの生徒が利用していた。つまり、その小路を登校することは、学校の裏側から校舎に入るかたちになっていたのである。

その件がこの日の議論の対象だった。つまり、ある生徒が、

「いやしくも中学生たる者が裏道を通って登校するとは何ごとか。中学生ならば中学生らしく、正々堂々と校門をくぐって登校すべきであーる。」

と、ぶちあげたのである。

ぼくは結構実利的な考えをするタイプだったので、遅刻するよりも近道ぐらいしたって別にいいじゃないか、と思っていたが、隅で腕組みをしながらじっと聞いていた校長先生が、やおら手を挙げた。

「今の意見、わたしは大賛成だ。非常にいい意見だ。」

と、得意の「非常に」がついたのである。

ところが、たちまち別の生徒の手が挙がった。

「わたしも今の意見には大賛成です。正々堂々と正門をくぐって登校すべきだと思います。しかし、そうしたいのですがいったいどこがわが校の校門なのでしょう？」

この意見には一同あ然とせざるをえなかった。校長先生も思わずズッコケそうになった。そうだったのである。わが校には「校門」がなかったのである。財政難を押して校舎は新築したものの、校門にまでは手が回らなかったのだろう。

「わかりました。その件は、明日さっそく役場にお願いし、近々に建ててもらうよう約束します。」

校長先生は大きく胸を張った。

翌日、校長先生は約束通り役場に参上し、交渉に臨んだ。しかし、当局は財政難を理由に首を縦にふらなかったらしい。

おそらく校長先生は、その帰り道で決心したのだろう。それからほどなくわが校に校門が建ったのである。しかし、確かに形は校門風ではあったが、コンクリートでも石材でもなかった。杉板を使って急いで大工さんに作ってもらった、いわゆる中が空洞の箱状のもので、それにコンクリート色のペンキが塗られたものだった。

ぼくらが、そのテンプラの衣のような校門が、校長先生のポケットマネーによって建てられたものであることを知ったのは、卒業してからのことである。生徒会への「約束」を、校長先生は自らのポケットマネーで果たしていたのである。

とにかくそれからは、全校生徒が正々堂々と校門をくぐって登校するようになったのは言うまでもない。

季節は移ろい、やがて寒い冬が巡ってきた。そして、雪がずんずん降り積もって、あわれ1.5メートルほどのテンプラ校門はいつの間にか雪面下になり、頭さえも見えなくなっていた。

だが、その雪に敢然と挑んだ生徒がいた。うかつにもぼくはそれを知らなかったが、三年生の女生徒だったという。彼女は吹雪の中を汗だくでシャベルをふるい、必死に何か大事なものを探しているかのように掘っていたという。

校門を掘っていたのである。だれに命令されたものでもなく、自発的な行動であった。

そんな豪雪も春の訪れとともに衰え始めた。だがそれは、同時にぼくらの卒業式が近づいた印でもあった。

卒業記念の文集を作るのはわが校の恒例で、その巻頭文を校長先生にお願いするのも恒例であった。恒例に従い、編集委員が校長先生に原稿を依頼した。校長先生はもちろん快く書いてくれたのだが、その巻頭文のタイトルは「校門を掘る子」であった。

約束を守るためにポケットマネーを投じた校門であった。校門が雪下に埋もれた。そのままいけば、春まで姿を見せない校門であった。だが、それを掘り起こす少女がいた。だれに指示されたわけでもないのに少女は黙黙と掘っていた。その姿を校長先生はしっかり見つめていたのである。このシーンこそが校長先生の、教員生活の中で見た、最も印象深いシーンではなかっただろうか。

「わたしの誇りは、きみたちと過ごしたあの一年間に尽きるよ。」とぼくに語った、その「誇り」のクライマックスが、このシーンではなかっただろうか。

マンガ「釣りキチ三平」の著者でもある矢口高雄氏の『ボクの先生は山と川』（講談社）より

次号は 11 月 18 日(月)に発行します。主な内容は「思いやり」です。

合唱の魅力は最終的には「協調性」につきる。音をいかに合わせるかである。　錦織健(オペラ歌手)

沼田中学校道徳通信　Vol.41
（平成 25 年度第 17 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪
平成 25 年１１月１６日(月)発行

道徳の内容項目：温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ　2-(2)

思いやり

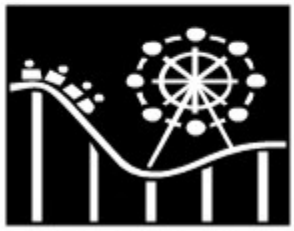
クリスマスが近づき、サンタクロースやツリー、ろうそくなどの映像を目にする機会が増えてきました。この時期になると、数年前の人権作文コンテストの表彰式でお聞きした「ろうそく」の話を思い出します。「ろうそくは自分の身を削ってでも、周りに明かりを与えます。まず人を思いやり、自分のことはあとという生き方が素晴らしいと思います。見習っていきたいものです」と。

そこで、今回は「思いやり」あふれる素敵なエピソードを紹介します。

あるレストランでのできごと

日本文教出版「新版　中学校道徳教育　あすを生きる３」より

東京ディズニーランドは、「夢と魔法の王国」をテーマにしているので、訪れた人みんなに「夢を与え、幸せになってほしい」と願っている。そのため、お客に接する人をみんな「キャスト」と呼んでいる。



「キャスト」と呼ぶのも、来園されたすべてのゲスト(お客)の方々に、夢と幸せを与えるキャスト(役者)でありたいという願いからである。

道を尋ねられたり、写真撮影の依頼をされたりしても、常に丁寧に対応している。

だからこそ、キャストに対する「マニュアル」は厳しい。

東京ディズニーランドの「ワールドバザール」の一角にある人気レストラン「イーストサイド・カフェ」でのできごとだ。

そこに若い夫婦がやって来た。新婚ではなさそうで、二人の様子は落ちついている。そんな二人をキャストは二人用の席に案内し、いつものように注文をとった。

二人は、それぞれが食べるのであろう料理を注文した。キャストがいつものように注文をとったときのことだった。女性のほうが申し訳なさそうな弱い声で話しかけてきた。

「それと……お子さまランチをください。」

キャストは困惑した。

東京ディズニーランドのマニュアルでは、お子さまランチは、九歳未満の子ども以外には出せないことになっていた。

そう言われて、若い夫婦はさみしげな顔で、たがいを見つめ合っていた。

キャストは悩んでしまった。わずかな時間にいろいろ考えたあと、キャストは勇気を出して二人に聞いた。

「失礼ですが、どちら様がお子さまランチを召し上がるのでしょうか。」

「今日は、昨年亡くなった娘の誕生日なんです。体が弱かったせいで、娘は最初の誕生日を迎えることができませんでした。おなかの中にいるときに、主人と三人で、ここのお子さまランチを食べに行こうねって約束していたのに、それも果たせませんでした……。それで、今日は、娘にお子さまランチを頼んであげたくて、このお店に来ました。」

この話を聞いて、キャストはことばを詰まらせた。窓の外では、楽しそうに親子三人で歩く家族の姿が見える。

キャストは迷った末、いつもの笑顔で声を掛けた。

「どうぞ、こちらのテーブルへ移動してください。」

と、二人を別の席に案内した。大人四人が座れるテーブルだ。そして、その一つのイスを子ども用のイスに取り替えた。

まもなく、この夫婦のための料理とお子さまランチが二人に出された。

「どうぞ、ご家族でごゆっくりとお楽しみください。」

キャストはそう言って、テーブルをあとにした。

このキャストの行動は、マニュアルに違反している。

しかし、それをとがめたキャストも上司もいなかった。それどころか、この話を仲間にしたところ、誰もがそれに協力して、快くお子さまランチを出してくれた。

このキャストの行為は、他のキャストにも「こんなよいことをした仲間がいた」と伝えられ、たたえられた。

数日後、若い夫婦から感謝の手紙が届いた。

東京ディズニーランドは、それを社内報でキャスト全員に知らせるだけではなく、その手紙も掲示した。

このキャストが九歳以上のゲストにお子さまランチを出したのは、あの一回だけである。

次号は 12 月 2 日(月)に発行します。主な内容は「寛容の心」「謙虚」です。

優れた道徳心は習慣からしか生まれない。私たちは、自分でつくった習慣のようにしかならない。　アリストテレス(哲学者)

沼田中学校道徳通信　Vol.42
（平成 25 年度第 18 号）

道徳教育の内容項目：それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心をもち謙虚に他に学ぶ　　2-(5)「寛容の心」

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪
平成25年１２月　２日(月)発行

「関係ない」ということば

三浦 綾子

今も、はやっているだろうか。ひところ、しきりに、「関係ない」ということばがはやったのを覚えている。このことばは、わたしのきらいなことばの一つである。こんなざらざらした冷酷なことばをしきりに使う人は、体内を流れる血も、氷のように冷たいのではないかと、わたしは思う。大げさにいえば、この世のどんな人間も、自分とは全く無関係だとは、言い得ないのではないだろうか。

わたしが小学校のときに読んで、忘れられない話がある。

――ある金持ちの娘が、汽車の中でバナナを食べていた。そしてその腐ったバナナを、食べられないからといって、窓からひょいと投げてしまった。そこに、ある貧しい子どもが通りかかって、そのバナナを拾って食べたのである。ところがその子はおなかをこわし、熱を出してしまった。

その夜、金持ちの娘の父親の工場が全焼した。夜警の男が、その夜に限って、夜警を怠ったのだ。それは、わが子が、拾ったバナナを食べたため、熱を出したからである。――

たぶんこんな筋だったと思うが、少女のわたしはこれを読んで、人間の世界というものは、自分の思っているよりも密接なつながりのあることを思って、非常に恐れを感じたものである。

この話は、少年少女向きに書かれているので、因果関係がはっきりしているが、わたしたちは日常生活において、案外これに似た深いかかわりを、ほかの人と持ち合わせているのではないだろうか。

日本中のどの新聞にも、毎日、必ずといってもよいほど出ているのは、交通事故の記事ではないだろうか。交通事故にはいろいろな原因もあるであろう。ある朝、ふとしたことから妻とけんかをした運転手が、カッと頭にきて自動車をふっ飛ばす。そして、あっと急ブレーキをかけたときには、すでに幼い子どもの命を奪っていたという例など、たぶん数えきれないほど多いことだろう。

それまでは、まったく見ず知らずの人間であった、どこかの幼い子どもが、これまた見ず知らずの男のために命を奪われる。命を生んでくれる親との関係が深いように、命を奪い、奪われたという関係はまた、取り返すことのできないほど、恐ろしい密接な関係である。幼児を奪われた親にとって、憎んでも憎みきれない相手が、突如として出現するのだ。

こう考えてみただけでも、わたしたちは、あいつには関係がないとか、こいつには用がないとは、けっして言えないのではないだろうか。

今年、わたしたち夫婦は、台湾から招かれて、三週間にわたる講演旅行が予定されていた。台湾では、このわたしの講演会のために、各地から集まって、準備会議を開いていた。

ところが、二月に入って、父が危篤状態になった。このために、わたしは台湾行きを断念せざるを得なかった。台湾には、再び行く機会も与えられることだろう。しかし、父の死は、娘にとって、生涯にただ一度限りのことである。台湾の人々には、まことに申し訳のないことだったが、わたしは父をおいて日本を離れる勇気はなかった。

こうして台湾行きを中止したわたしたちの所に、ある人が、深刻な悩みをかかえて相談に来た。わたしたち夫婦は、深い同情をもってその話を聞き、できうる限りの助言をした。その人はやっと己を取り戻し、自分の進むべき方向を見いだすことができた。そして言った。

「もし、あなたがたが相談にのっていただけなかったら、わたしは子ども二人を車に乗せて、共に、山の崖から谷底に飛び込むつもりでした。」

わたしは、背筋の寒くなるのを覚えた。父がもし元気であったなら、わたしたちは台湾に行っていた時期である。わたしたちが台湾に行っていたなら、この人は必ずや、自動車もろとも、二人の子どもとともに、谷底に転落していたにちがいない。

ここでまた、わたしは人間と人間との、深いかかわりを身にしみて感じたのである。この人と、わたしの父は、一、二度ことばをかわしたにすぎない間柄である。この人から見ると、一人の老人にすぎないわたしの父の病気は、自分とはなんの関係もないものに思われたかもしれない。しかし、わたしの父の危篤が、その人たち三人の命を救ったともいえるのである。

そのときわたしは、しみじみと思った。けっしてわたしたちは、「だれの世話にもならずに生きている」とか、「だれにも迷惑をかけたことがない。」とか、あるいは、「自分一人で生きてきた。」などと、大きな口はきけないものだと、思わずにいられなかった。だれに対しても、頭を下げたくなるほど、謙遜な思いで生きなければならないものだ、と。

※謙遜（けんそん：へりくだって控えめにすること）

※出典　日本文教出版「新版　中学校道徳教育　あすを生きる３」

次号は 12 月 24 日（火）に発行します。主な内容は「自主・自立」「誠実・責任」です。

今の私は、これまでに出会ったものすべての賜物である　　日野原重明（聖路加国際病院院長）

沼田中学校道徳通信　Vol.43
（平成 25 年度第 19 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 25 年１２月２４日(火)発行

12月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 認め合い学び合う心を　～個性や立場を尊重して他の人から学ぶ姿勢をはぐくむ～
② 不正を許さぬ社会をつくるために　～公正・公平で差別や偏見のない社会の実現を目指す～
③ 異性を理解し尊重して　～異性を正しく理解して相手の人格を尊重する～
④ 仲間がいてキラリと光る自分がいる　～役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める～
⑤ 世界に思いをはせよう　～他の国の人々や異なる文化を理解し世界平和の実現を目指す～

①12/1　②2～80日　③9～15日　④16～22日　⑤23～24日

道徳教育の内容項目：自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ　1-(3)

最近の若者は優しさや思いやりの心が欠けていると、耳にすることがあります。果たして本当でしょうか。

次に、『豊かな心を育てる講話集』「悠」（ぎょうせい）の 1991 年 6 月号より、「自立をたすけた手紙」という資料を紹介します。資料に登場するＡ子さんは、友人との人間関係に苦しみ、唯一の親友も突然の転校で失うなど、孤独と孤立化に悩んだそうです。この手紙はＡ子さんに宛てて同じクラスのＢ君が送ったものです。一見、乱暴とも思える言葉遣いの裏側にある、人間性あふれる思いを感じます。いじめ防止強化月間を振り返りながら読んでみてください。

――おい、学校へこいよな！
家で何やってっかわかんねーけど、家より学校のほうがおもしれーソ。
てめー、はまってんのは、よくわかる。
小学校のとき、おれは、いまのおめーより、すーと百倍もはまってたんだ……わかる？　家でないてたんだソ。
友だちができなくて、何だかしんねーけどあるとき学校でうんこしたらよ、いやなやつがいて、おれのこと、はめやがって、ふけつむしとか言いだしたやつがいて、うんこのふけつむしとか、その日からあだなになっちまったんだ。
ほんとだよ！　はじめはなんとも思ってなかったんだ。だけど、一日、一週間、一か月がすぎていくとさ、みんなから、てめーきたねーからよるなよ、とか、小学校のとき、ゲームがはやって、やらしてくれって言ったんだ。そうしたら「てめーきたねーえからやらせなーい。」と言われたんだ。かなしかったん――そのことより、いろいろとはまってさー、ついには先生(に)までごかいされて、家でないてたんだ。
まーあ　いまのおれとはくらべものにならないけどね！
でも、おれは　くよくよしなかったぜ。
家で少しないだけどよー。でも、いつかはぜったい　いい日がくると思っていっしょうけんめい　人の言うこときいたり、わらわしたりして少しずつかなしかったことをぶっとばしていったんだ。そうしていまのようになっていったってわけ。
いまのおれは、けっこう毎日おもしれーソ。おまえは、いまはまっていると思っているかもしれねーけど、てめーはてめーでいいところがあるはずだ。だからそこをうまくいかしていけばいい！
一つちゅういするが、へんにわらうくせはやめろ！　これはまずいソ。まずこいつをなおしていこう。
ん―　よけいなおせわだったかな？　はっきり言って　おめーは、おれよりあたまはいいんだぜ。だからべつにもんだいはないソ。
まーあ　これをよんでくれ。
一つ、自分でくるしむことはなし。人と　ともに　げんきにすごす。
一つ、はまるようなものごとはするな。また、しないようにする。
一つ、自分は　ぜったい　いつかは、よい日がくると思って　毎日をげんきにすごす。
一つ、人の口は刃となる(と　先生が言ってた)また、はりともなる。　人がなにを言っても、自分で自分をしかって、気にはするな。また、どりょくする。
一つ、自分がはまったと思っても、はまっていないかもしれん。だから、そのときは人にでもきく。天しる地しる。だれかはきっとどこかで見てくれている。だから、それはたぶん母か父だろう。おうえんしてくれる人がいるのなら、自分をそのおうえんにかけてみろ、けっかはどうであれ、まず　やってみる！
学校へこい。
おまえがこのてがみをよんで、学校へくるといいなと思っとる。
おれは、てめーが学校へきても、前のおれとはぜったいかわらんソ。
ほんとうの自分をよび出せ。自分をたたきおこして　いまから自分をかえろ。
一人で物かかえこんだってしょうがねーソ。
学校へきましょう。学校へきましょう。

Ａ子さんはどんなに励まされ、元気が出たか想像がついたと思います。Ａ子さんの母親は「この手紙は、わが家の宝物です」と言いました。この手紙で、Ａ子さんは立ち直り、自立が始まったそうです。

次号は１月８日（水）に発行します。主な内容は「向上心」「個性の伸長」です。

今までに、やって失敗したこと、駄目だったことは山ほどあるが、やらないほうがよかったということは一度もない。　榎本明（俳優）

沼田中学校道徳通信　Vol.44
（平成 25 年度第 20 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 26 年　1 月　8 日（水）発行

1 月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 理想をもって前向きに生きよう　～真理・真実・理想を求め自分の人生を切り拓く～
② 比べてみよう　きのうの自分と　～自分のよさを見つめ個性を伸ばしていく～
③ 温かい人間愛につつまれて　～思いやりの心をもつ～
④ 良心の声を聞こう　～人間として誇りをもって生きていく喜びを味わう～

①1/8～12日　②13～19日　③20～26日　④27～31日

道徳教育の内容項目：自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、
個性を伸ばして充実した生き方を追求する　1-(5)

トマトとメロン　　相田みつを

トマトにねえ
いくら肥料やったってさ
メロンにはならねんだなあ

トマトとね
メロンをね
いくら比べたってしょうがねんだなあ

トマトより
メロンのほうが高級だ
なんて思っているのは
人間だけだね
それもね
欲のふかい人間だけだな

トマトもね　メロンもね
当事者同士は
比べも競争もしてねんだな
トマトはトマトのいのちを
精一杯生きているだけ
メロンはメロンのいのちを
いのちいっぱいに
生きているだけ

トマトもメロンも
それぞれに　自分のいのちを
百点満点に生きているんだよ

トマトとメロンをね
二つ並べて比べたり
競争させたりしているのは
そろばん片手の人間だけ
当事者にしてみれば
いいめいわくのこと

「メロンになれ　メロンになれ
カッコいいメロンになれ!!
金のいっぱいできる　メロンになれ!!」
と　尻ひっぱたかれて
ノイローゼになったり
やけのやんぱちで
暴れたりしているトマトが
いっぱいいるんじゃないかなあ

新しい１年が始まりました。今年もよろしくお願いします。新年のスタート号は「向上心」についての特集です。

はじめに紹介する「トマトとメロン」という詩は、相田みつをさんの『にんげんだもの』（文化出版局）に掲載されています。相田さんは、どんなことでも人と比べるということを嫌っていたそうです。それは、人と比較している限り、心の安定は得られないと考えていたからだと思います。では、「それぞれに自分のいのちを百点満点に生きる」ためにはどうしたらよいのでしょうか。一緒に考えていきましょう。

ありのままの自分

渡辺和子
『目に見えないけれど大切なもの』（PHP）

私たちは誰しも、「ありのままの自分」と、「見てもらいたい自分」の、二人の自分を持って生きている。

「ありのままの自分」は有機体だから、病気もすれば年もとる、感情が高ぶることもあれば落ちこむこともある自分だ。ところが他人にそういう自分を見せたくなくて、「見てほしい自分」を演技するところに無理が生じ、不自由になってしまう。

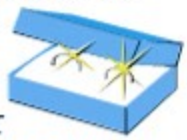
「ありのままの自分」と、「ありもしない自分」との間のギャップが大きければ大きいほど、隠すものが多くて疲れは激しい。絶えずそれらしく見せかけ、ボロが出ないよう気を使わないといけないからだ。それはちょうど、着なれないよそゆきの着物を一日中着ていて、家に戻って脱いだ時に感じる疲れのようなものである。

そんなに苦労してまで、どうして「ありもしない自分」を保とうとするのかといえば、たぶん、そういう自分でないと他人が相手にしてくれない、他人に好かれないという恐れがあるからではなかろうか。デートの時に、念入りに化粧し、相手の気に入るように振る舞おうとする心理に似ている。

このような「見せかけの自分」から自由にしてくれるのは、自分を、ありのままの姿で愛してくれる人との出合いである。「ふだん着のあなた、素顔のあなたでいいのです。それが好きなのです。」という人に出合って、初めて、よそゆきの装いとその窮屈さから自由になり、人は本来の自分の姿を見つめる勇気を与えられるのだ。

若い時、劣等感を強く持っていて、自分をよく見せよう見せようとしていた私に、「あなたは、そのままで宝石だ。」と言ってくれた人がいた。人間の価値は、他人と比べてのそれではなく、かけがえのない一人としての不動のものであることに気づかせてくれた人だった。

この言葉を聞いてからというもの、“どうでもいい自分”が“どうでもよくない自分”に変わったから不思議である。



それまで、自分は単なる石ころに過ぎないと思っていた私は、その人の期待を裏切るまい、と思った。そのために私は、宝石になろうと努力し始めた。大切なのは宝石に見せかけることではなくて、宝石になる努力を惜しまないことだと知ったのだった。

次号の発行は１月 20 日（月）。内容は「感謝」を予定。

成功する人間になろうとせず、むしろ価値ある人間になろうとしなさい。　　アインシュタイン（物理学者）

沼田中学校道徳通信　Vol.45
（平成 25 年度第 21 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪
平成26年　1月２０日(月)発行

道徳教育の内容項目：多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる　2-(6)

「感謝」や「部活動」についてヒントとなるエピソードの紹介です。競技成績のみならず、人間としての成長を大切にした毎日をつくっていきましょう。

ナイスジャンプ

正進社『キラリ☆道徳２』より
文：永井浩二

冬がやってくるたびに、私は、自分を成長させてくれたできごとについて思い出す。それは苦い経験だが、私の人生を変えるきっかけになったできごとだ。

私は大学時代、スキーのジャンプ競技に打ち込んでいた。「スキージャンプ」というと冬場のみに行われるイメージがあるが、冬だけではなく、体力づくりなどを行いながら、年間を通して取り組まなければならないスポーツなのである。私は一年生のころから、情熱のすべてをスキージャンプに費やしていた。そうした日々の努力が実って、全国大会のような大きな大会でも良い成績を残せるようになり、学年が上がるにつれて、さらに上位に入賞することも増えていった。

そうして技術が上達するのに比例して、私の自信も大きくなっていった。「自分こそが一番なんだ！」という気持ちはどんどん大きくなり、スキー部の仲間も含め、まわりの選手は全員ライバルだと思って競技にのぞんでいた。自分がチームのエースであるという自信から、競技以外の場面でも考え方はいつも自己中心的で、まわりにいる人の気持ちなど考えたことはなかった。

だが、学生生活最後の年に転機が訪れた。

日本で開催される国際大会の代表選手になるチャンスを得たのだ。私は「なんとしても代表になりたい。」という思いから、それまでにも増して一生懸命練習した。同時に、まわりの選手のことをいっそうライバル視し、自分の記録ばかりを考えるようになっていった。

代表選考会は一次予選から始まり、二次、三次と進み、ライバルたちはどんどん姿を消していった。私は順調に勝ち進み、最終選考会まで残ることができた。残った選手は十人。その中から三人が国際大会に出場できるのだった。「ここまできたら、絶対に大会に出たい。」私はそう思った。しかし、ついに迎えた最終選考の日、私の調子は良くなかった。そのため、他の選手がジャンプする時、私はなんとしても勝ちたい一心で、「ミスしろ！」と、心の中で何度も叫んだ。ところが、結果は十人中五位。代表になることはできなかった。「これだけ練習したのに……。」と、それまでの努力を振り返り、悔しくてたまらなかった。

悔しさをおさえて宿舎に帰り、荷物の整理をしながら、私は自分と選ばれた選手との違いを考えた。スキーの技術・ジャンプのタイミング・空中姿勢や着地……、いろいろなことを比べてみたが、どれも決定的な違いは見当たらなかった。なかなか答えが見つからないまま、宿舎の中を行き来している時、私はある光景を目にした。一位に選ばれた選手が部屋のトイレを掃除していたのだ。私ははっとした。合宿や大会が終わり、宿舎を出る時、彼がそうしている光景を、今まで何度も見てきた。それだけではない。彼は食事が終わると、食器洗いや机ふきなど、食堂の方の手伝いもよくやっていた。そのたびに、彼は「いつもありがとうございます。」という言葉を口にしていたことを、思い出したのだ。

それまでの私は、「自分こそが一番だ！」ということばかりを考えていた。まわりの人を見る時は、いつもどちらが上か下かという目でしか見たことはなかった。宿舎でも、手伝いをしたことなどもちろんない。それに比べ、彼は、私も含めライバルになりそうな選手へも気さくに声をかけ、惜しげもなくアドバイスをしていた。誰かが長い距離を跳べた時は「ナイスジャンプ！」と、一緒に喜んでいた。雪が降る日は、ぬれないように雪を払ってくれるリフトの従業員の方たちへ「お願いします」「いつもありがとうございます。」と声をかけていたのである。私はといえば、従業員の方が雪を払ってくれるのは当たり前のことだと思い、感謝の言葉を述べたことは一度もなかった。比べれば比べるほど情けない気持ちになった。

そして、次の瞬間、そこが自分と彼との違いなのだと気がついた。私は技術以前に、彼に心で負けていたのである。勝てなくて当然だった。悔しかったが、なぜか心に清々しい風が通ってゆくような気がした。自分を支えてくれる多くの方への感謝の気持ち。

私はこの選考会を通して、自分に足りないものが何なのか気づかされた。大学の四年間で、競技の成績は確かに向上していたが、それ以上に大切なものを見失っていたのだと思うと、涙がこみ上げてきた。

それから私は、スキーだけでなく生活のあらゆる場面で、競技と同じように、他人への感謝の気持ちを大切にしようと心がけた。練習を大切にするのと同じように、「ありがとう」や「おかげさま」という言葉を大切にするようになった。すると、不思議と成績も伸びていった。

私は大学を卒業した後も、社会人として競技を続けた。あの選考会から数年後、地元で開催された小さなスキージャンプの大会で、ライバルたちに心から「がんばれ！」「ナイスジャンプ！」と大声で声援を送る私がいた。

※今秋、群馬県教育委員会から発刊される道徳の郷土資料集に、「感謝」のテーマで沼田公園（久米民之助）が紹介される予定です。別刷りの読み物資料もご覧ください。次号の発行は２月３日（月）。内容は「礼儀・あいさつ・マナー」です。

いいことは　おかげさま　わるいことは　身から出たさび　　相田みつを（詩人・書家）

沼田中学校道徳通信　Vol.46
（平成 25 年度第 22 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 26 年　2 月　3 日(月)発行

2 月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 良心の声を聞こう　～人間として誇りをもって生きていく喜びを味わう～
② 異性を理解し尊重して　～異性を正しく理解して相手の人格を尊重する～
③ この国を愛しこの国に生きる　～日本を愛し優れた伝統の継承と新しい文化を創造する～
④ つながり合う社会は住みよい
～よりよい社会の実現のために公徳心・社会連帯の自覚を高める～
⑤ 認め合い学び合う心を　～個性や立場を尊重して他の人から学ぶ姿勢をはぐくむ～
①2/1～2日　②3～9日　③10～16日　④17～23日　⑤24～28日

道徳の特別教科化や「心のノート」改訂など、道徳教育が大きな注目を集める中、2013 年 12 月 5 日、扶桑社から『はじめての道徳教科書』という本が発行されました。稲森和夫さん(京セラ名誉会長)や鍵山秀三郎さん(日本を美しくする会相談役)、野口健さん(アルピニスト)らが参加する「道徳教育をすすめる有識者の会」が編者となり、小学生から読める偉人や実話、名作などが集められました。そこで、今号では幸田文さんがお書きになった「礼儀」に関するエピソードを紹介します。テーマは、今年度の沼中が力を入れて取り組んできた「挨拶」です。

道徳教育の内容項目：礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる　2-(1)

挨拶は苦手である

～時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接しましょう～

挨拶は苦手である。ちゃんとうまく言えたなどという記憶は一つもない。そのかわりといってはへんだが、まずい挨拶をしてしまって、そのあと自分で自分が嫌になるような思いをした記憶なら、いくつも、しかと身にこたえた覚えがある。

と、いうようなわけだけれど、これでも幼いころ、親たちはわたくしたちをほったらかしにしていたのではなく、ひと通りは挨拶も家庭教育として、教えてくれたのである。

朝晩の、おはようございます、おやすみなさい、食事のいただきます、ごちそうさま。出はいりのいってまいります、ただいま。

これは今も昔もおなじことと思うが、昔は今より多少きびしく習慣付けられていたとおもう。この挨拶が一家の会話の基礎になるのだ、といった考えによるものであり、また、もののけじめをきちんとさせることだ、ともきかされた。だからこの挨拶をなおざりにすると、うちの中の話がだんだんに通じなくなるおそれがあり、同時にうちの中の秩序が失せ、乱れが生じる傾向になるといって、きびしく叱られた。もちろん、子どもにそんなことはよくわからないのだが、わからぬなりにいうことはきいたのである。

ついでよその人への挨拶、こんにちは、こんばんは、ごきげんよう、さようならなど。

ここでことばだけではいけない、からだも挨拶のうちだといって、お辞儀を習わせられる。するとその次は、親類へおつかいにやらされた。口上、というのを口うつしに習っておぼえて行き、先へつくと声をはりあげてそれをいうのである。

たとえば「これは昨日、京都から到来いたしました松茸でございます。まことに香りばかり、ほんの少々でございますが、お勝手もとの御料におつかいくださいませば、うれしゅうございます」といったような挨拶である。

毎日つかうことばとはちがって、へんにギシャ張った(堅苦しい)いい方だがら、おぼえにくいし、言うにもテレくさくて気がさすし、子どもにとっては大迷惑なのだが、親のほうはむずかしい顔をして、親の慈悲で教えてやるのだから、文句をいうひまに早くおぼえてしまえ、というのだから仕方がない。

祖母の前へ、持ってきた包みをさし出し、手をついて、バカ声だして明瞭に口上をのべ、平たくなってお辞儀をしたのは、何度だろう。おばあさんはわたくしが区切り区切りいう、その区切りのところで一々、はいはいとか、ふむ、うむとかこたえて、ずっとおしまいまで聞き通しておいて、ほめたり、直したり、かならずあとで批評してくれた。

でも、これだけではお使いの役はすまない。行った分だけの片道だからだ。今度はおばあさんからの挨拶を、うちへ告げなければならない。ところがおばあさんの返事が難物で、お口上調(他人の前で、かしこまって挨拶をするときの調子)のところと、ありがとよ、よろしくいっておくれ式のところと、まぜまぜになる。止むを得ない、使いはいわれた通りに暗誦するのだと、教えられているから、「ありがとよ、とおっしゃいました」という。子ども心にも気をつかったものである。

そのうち口上も棒暗記の一本調子がとれてやわらかくいえるようになると、よそのお宅へ使いにだされる。借りた本を返しに、用事の申送りに、盆暮れの贈答に、等々。そのあいだに、近火見舞(知り合いなどの家の近くに火事があったとき、大丈夫かと心配して訪ねること。またそのときに持っていくもの)にはお騒々しいことでといい、悼みの挨拶は、短いことばをいそがずにいい、喜びごとの挨拶は大きめの声ではっきりいい、老人の機嫌うかがいに行ったら、帰りぎわに何度も、どうぞお大事に、くれぐれもお大切にとしつこくいわぬこと、そんな挨拶はかえって老人を不安にする、ことなどをときにしたがって教えてくれる。つまりかたというか、見本というか、要するに常識を教えられたのである。

こういう家庭教育はわたくしの家だけではなく、教え方に硬軟の差こそあれ、商家職人みなおなじだったようである。当時の親たちは辛抱強く、面倒見がよかったものである。

次号の発行は 2 月 26 日(水)。内容は「生きる喜び」を予定しています。

いかなるときでも　おじぎはし足りないよりも　し過ぎたほうがよい　　トルストイ(小説家)

沼田中学校道徳通信　Vol47
（平成 25 年度第 23 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪
平成26年　２月２６日(水)発行

人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、
人間として生きることに喜びを見いだすように努める　3-(3)

道徳の副読本『キラリ☆道徳①』（正進社）より、有名な音楽家であるベートーヴェンの苦悩に焦点を当てた資料(一部抜粋したもの)を紹介します。難聴(音や声がうまく聞き取れない状態)に悩まされ、両耳とも聞き取りにくくなってしまったベートーヴェンが、苦しみを乗り越え、より人間らしい人間、自ら肯定できる人間になりたいと生きる姿勢から、考え、学びましょう。

「運命」を乗り越える

1770年のドイツで、ベートーヴェンは祖父の代から続く音楽家の家庭に生まれました。父親は宮廷歌手をしていましたが、大酒飲みであるうえに、喉をわずらっていたこともあって、一家の暮らしは貧しいものでした。父親はベートーヴェンを有名な音楽家に育てようと考え、幼い頃からピアノの練習をさせました。それは、酔っ払って帰ってきても、息子を叩き起こして夜明けまで練習させたり、上手に弾けないと地下室に閉じ込めたりするほど、熱が入っていたそうです。

厳しい教育を受けたベートーヴェンは、よい先生との巡り会いもあり、音楽の才能を開花させました。そして、13歳の時には宮廷で演奏するようになり、音楽家として一家を支え始めました。しかし、彼の稼ぎはすぐに父親の酒代に消え、母を亡くした後は弟の世話もしなければならず、貧しく辛い日々が続きました。

22 際の時に父親が亡くなると、ベートーヴェンはようやく音楽家としての成功をつかみ始めます。音楽の都ウィーンで演奏会を行い、ピアノの名人としての評判はしだいに高まっていきました。

そんな矢先、今度は難聴という苦難に襲われるようになります。はじめは左耳がざわざわして、それは右耳にも移り、ついには両方とも聞き取りにくくなりました。人と話していても、声は聞こえるのに言葉がわからないということが多くなり、大きな音も聞きづらくなってしまったのです。音楽家の生命線である聴力が衰えることは、ベートーヴェンにとって耐えがたいものでした。音を聞き取れないことが周囲に漏れることを怖れ、人に会うことを避けるようになり、田舎でひっそりと暮らすことを決意しました。

そして、この病気が少しでもよくなることを願って医者に通い、さまざまな治療を受けました。しかし、難聴の症状はひどくなるばかりで、よくなることはありませんでした。もはやこの苦しみから逃れることは難しいと悟ったベートーヴェンは、32 歳の時、弟に宛てて手紙を書きました。この手紙(右の資料)は、彼の死後に机の中から発見され、「ハイリゲンシュタットの遺書」と呼ばれています。

絶望的な苦しみを告白したこの手紙を書き記した後に、ベートーヴェンは数年かけて交響曲第五番を作曲しました。この曲の冒頭の「ダダダダーン」に関して、ベートーヴェン自身が「運命はこのようにして扉を叩く」と言ったことから、「運命」と呼ばれています。

ベートーヴェンは 1827 年、56 歳の若さでこの世を去りましたが、最後まで音楽への情熱を失いませんでした。たくさんの素晴らしい曲は、今もなお、多くの人々を喜ばせ続け、オーストリアで行われた葬儀には、ベートーヴェンとその音楽を愛する人々が２万人以上も集まり、彼を見送ったそうです。

> 私は世間から意地悪で人嫌いのように思われているが、それは私の耳の病のせいであったことを伝えておきたい。情熱に満ちた快活な性格で、人と交わることの楽しみを知っているこの私が、若いうちから人々を避け、孤独に生きなければならなくなった。耳が聞こえないことに苦しみ、入りたい世界に入れないことがどんなに辛いことか。「もっと大きな声で叫んでください。私は耳が聞こえないのです。」などと、私にはとても言えない。私にとって他の人よりももっと完全であるべき感覚、かつては完璧な形で持っていた。音楽家のなかでも数少ない人にしか恵まれないその感覚が衰えているなどと、人に言えるわけがないのだ。私はそのために引きこもり、誤解され、二重の苦しみを味わっている。友人との気晴らし、意見の交換など、私にはもう許されない。人の輪に近づくと、自分の病を悟られてしまうのではないかという不安が私を襲い、もはや逃れられない。（中略）
>
> 私はもう一歩のところで自らの命を絶つところだった。私を引き止めたのは「芸術」である。私は私の使命である仕事を成し遂げないで、この世を見捨ててはならないように思えたのだ。そのために、このみじめな命を引き延ばして生きてきた。
>
> 忍耐！　それだ、今、私の導き手となるものは。私はそれをこの手に選ぶ。無慈悲な死神が私の命を断ち切ろうとするまで、その決心が持ちこたえることを願う。うまく行くかもしれない。行かないかもしれない。しかし、私には覚悟がある。　（中略）
>
> 不幸を背負う人々よ、同じようなひとりの人間が、尊敬すべき芸術家になろうとして、あらゆる困難とたたかい、最善を尽くしたことを知ってほしい。（後略）
>
> L.Vベートーヴェン

次号の発行は３月３日(月)。内容は「郷土愛」を予定しています。

人間の寿命というのはね、あなたが使える時間のこと。　日野原重明(医師)

沼田中学校道徳通信　Vol.48
（平成 25 年度第 24 号）

心の鍵

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 26 年　3 月　3 日（月）発行

道徳教育の内容項目　4-(8)

3 月の「心の鍵」

「沼中ノート」より

① 認め合い学び合う心を　～個性や立場を尊重して他の人から学ぶ姿勢をはぐくむ～
② 理想をもって前向きに生きよう　～真理・真実・理想を求め自分の人生を切り拓く～
③ 自分の学校・仲間に誇りをもって　～学校を愛しよりよい校風をつくる～
④ 自然のすばらしさに感動できる人でありたい
　～自然や美を愛し人間の力を超えたものへの畏敬の念を深める～
⑤ 比べてみよう　きのうの自分と　～自分のよさを見つめ個性を伸ばしていく～

①3/1～2日　②3～9日　③10～16日　④17～23日　⑤24～26日

地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土に発展に努める

いじめ防止子ども会議（プレ会議を含む）、入学説明会、生徒総会などにおいて、生徒会本部役員や専門委員長、部活動の部長といった２年生を中心とする新しいリーダーの活躍にめざましいものがありました。そこで、広島県教育委員会作成の『心に響く道徳学習教材集』より、生徒会活動を中心に郷土愛を育てるエピソードを紹介します。

わがふるさとを守る生徒会

私たちの生徒会では、島の自然をいつまでもきれいな状態にして守りたいと、いつも真剣に考えています。私たちの先輩たちは、行楽シーズンのあとには、「自分たちの島を自分たちの手できれいにしよう。」というスローガンのもとで、毎年清掃活動を続けてきました。今年も夏のシーズンを前に、いろいろと相談を重ねました。その結果、例年の行楽シーズン後に行う清掃活動だけでなく、シーズンを迎える前に、ゴミや空き瓶、空き缶の持ち帰りを呼びかける立て札やポスターをつくり、多くの人に美しい自然を楽しんでもらおうという意見が出され、生徒総会でもこのことを決めました。

学級ごとに作業を分担して、立て札やポスターを作成しました。行楽客が多く訪れそうなところを中心に立て札を立てたり、ポスターを掲示してまわりました。設置し終えたときには、心がはればれとして、訪れてくるたくさんの人たちがゴミを持ち帰ってくれて、島の自然を楽しんで帰ってほしいという気持ちでいっぱいになりました。

今年の夏も非常にたくさんの人たちが島を訪れました。

やがて、40日間の長い夏休みが終わって、私たちは元気に登校しました。

生徒会では、２学期が始まるとすぐに、例年のように清掃活動を行いました。

ところがどうでしょう。私たちがあれほど期待して設置した立て札やポスターであったのですが、空き瓶や空き缶などが散乱している様子に、みんなぼうぜんとなりました。

立て札を設置したところを回ってみると、なくなっているところや、中にはキャンパーのたき火跡と思われる場所で、燃やされて悲しい姿になったものもありました。

ポスターの中にも、破れて剥がれているものや落書きされたものがありました。

さっそく、今回の取り組みについて生徒会の代表委員会で話し合いました。行楽客やキャンパーたちの行動が信用できない、公共道徳を守る気持ちが薄いなどの意見がたくさん出て、いずれもやり場のない怒りの口調でなじるように出されました。どの意見ももっともだという気持ちで、お互いうなずいて聞いていました。２年生の女子の代表からは、茂みにめがけて、空き缶を投げ捨てたり、海水浴場近くの岩場で空き瓶を並べて石であてっこしていた姿が報告されました。

代表委員会の雰囲気は、だんだん１学期の生徒総会の晴れやかだったものとは対照的に、とげとげしいものになっていました。

このような投げやりになった雰囲気の中で、３年生の男子の代表から、「僕も残念で、腹が立ってしようがないのは、みなさんと同じ気持ちです。でも、ここで投げ出してしまっていいんでしょうか。もっと冷静に考えたほうがいいのではないでしょうか。」という意見が出されました。

そこで私たちは、もう一度自分たちに何ができるかを考えることにしました。

やがて、秋の行楽シーズンが近づいてきます。それに向けて、結局私たちは、また新しい気持ちになって、空き缶や空き瓶を入れる護美箱（ごみばこ）をつくって設置してみようということにしました。
また壊されるかもしれないのですが、私たちは取り組みを続けていきたいと思っています。

私たちの力は小さなものです。たとえ、小さなものであっても続けていきたい。
島には今日も美しい自然を求めて、たくさんの人が訪れています。

次号（最終号）の発行は３月 12 日（水）。内容は「理想の実現」を予定しています。

今日なしうることに全力をそそげ。　　ニュートン（科学者）

沼田中学校道徳通信　Vol.49
（平成 25 年度第 25 号）

道徳教育の内容項目：1-(4)真理を愛し、真実を求め、
理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく

心の鍵

夢の実現に向けて

♪まなびやにきほひつらぬくまごころ♪

平成 26 年　3 月 1 2 日（水）発行

2012 年、世界で初めてｉｐｓ細胞（人工多能性幹細胞）を作り出した京都大学の山中伸弥教授が、ノーベル医学・物理学賞を受賞しました。ｉｐｓ細胞は皮膚や血液の細胞を人工的に初期化して作られた細胞です。眼の網膜や心臓の筋肉など、体中のさまざまな部分の細胞に変化させることができるため、万能細胞とも呼ばれています。これまでは、ある役割をもった細胞を、他の役割の細胞に変化させたり、役割の決まっていない細胞に初期化したりすることは不可能だと考えられていました。そんな科学の常識をくつがえした山中教授のエピソードから、理想の実現を目指す生き方について学びましょう。

山中さんはもともと、整形外科医をめざしていました。学生時代に柔道やラグビーに打ち込み、何度も骨折した経験があったからです。しかし、他の医師なら20～30分で終わる手術に２時間もかかるなど、なかなかうまくいきませんでした。また、整形外科で目にした重症患者の姿も、山中さんに衝撃を与えました。有効な治療法がなく、患者さんの症状が悪化していく現実を前に、現代の医療の限界を感じました。

そうした経験から、山中さんは、重症患者や難病を根本から治療するためには、基礎研究をしなくてはならないと考えるようになりました。大学院に入り直して学んだあと、アメリカの研究所へ留学し、マウスを使ってＥＳ細胞の研究を始めました。

ＥＳ細胞は、ｉｐｓ細胞と同じく万能細胞の１つです。しかし、ＥＳ細胞は赤ちゃんとなる受精卵を壊して作られるという問題がありました。そのため、受精卵を使わない万能細胞が望まれていたのです。

日本に帰国後、山中さんは、アメリカと日本の研究設備の差や、なかなか研究成果が出ないことを思い悩み、もう研究をやめようかとさえ考えるようになりました。そんな中、山中さんは奈良先端科学技術大学院大学で研究するチャンスをつかみました。

山中さんは大学院の新入生の前で、「受精卵を使わず、普通の細胞から万能細胞を作る」と、夢のような研究テーマを語りました。そして、のちの大発見に立ち会う高橋和利さんたち大学院生３人とともに、挑戦が始まりました。

京都大学に研究の場を移してからも、山中さんはアメリカ時代に教えられた**「ビジョン&ハード（しっかりと目標をもち、懸命に努力すること）」**ということばを胸に、研究を続けました。そして、2006年にマウスの皮膚の細胞を初期化して万能細胞を作ることに成功し、これを「ｉｐｓ細胞」と名づけました。さらに翌年の2007年、今度はヒトのｉｐｓ細胞作りを成功させました。

ｉｐｓ細胞の研究には、大きく２つの期待があります。１つは、再生医療です。病気になったり失われたりした目や心臓などの代わりを、その人の細胞から新しく作ることができると期待されています。もう１つは、新しい薬の開発です。患者の細胞から実験用の細胞を作ることによって、病気になる仕組みを解明したり、薬の効用や副作用を調べたりすることができると考えられています。実用化にはまだ越えなければならないハードルがありますが、山中さんをはじめとした世界の研究者が研究を続けています。

山中さんが中学校２年生のときに行った自由研究は、こうまとめられていました。

「この研究は、実験という点において成功である。しかし必ずしも成功＝完成ではない。
さらに研究を発展させていきたいと思う。」

そして、ノーベル賞の受賞が決定したとき、山中さんは次のように語っています。

私はもともと臨床医をしていました。臨床医は常に患者さんの顔が見える、「この人の病気をどうやって治すか」という仕事です。それが基礎研究を始めてから、患者さんの顔が見えなくなりました。病気の名前は見えても、その病気で苦しんでいる一人ひとりの顔はなかなか見えてきません。

しかし、ｉｐｓ細胞の研究は、難病の患者さんの皮膚や血液の細胞をいただいて研究する仕事です。その意味で、一人ひとりの患者さんの顔を思い浮かべながら仕事をする場面も多いです。

私たちにとっての１日１か月と、難病で苦しむ患者さんや家族にとっての１日１か月との意味の違いを心して研究をしています。

「明日、薬を作れるか」と言うと、その力はまだ私たちにありませんが、それに向けて多くの研究者が毎日挑戦をしていますので、希望をもっていただきたいと思います。

山中さんは夢の実現に向けて、走りつづけています。　　『あすを生きる３』（日本文教出版）

この１年間、または昨年度から引き続きご愛読いただき、ありがとうございました。　　文責：林　武史

人生とは未知の自分に挑戦することだよ。　　日野原重明（医師）